

山梨県塩山市

西田遺跡

—第2次発掘調査報告書—

1997. 3

山梨県教育委員会

山梨県塩山市

西田遺跡

— 第2次発掘調査報告書 —

1997. 3

山梨県教育委員会

序

本報告書は、山梨県警察塩山警察署庁舎建設に先立って、1977年に実施した発掘調査の成果をまとめたものであります。本来ならば調査後速やかに報告書が刊行されるべきものであります、1978年以降、本県における主要施策事業となった中央自動車道の建設が決まり、本遺跡の調査担当者も急速中央自動車道の発掘調査に従事することとなりました。このため、整理の中止が余儀なくされ、さらにその後も県の重要施策事業に伴う発掘調査が長期に渡り、これらが一段落した1995年に、再び整理作業を開始するところとなりました。

西田遺跡は、甲府盆地北東部の塩山市にあって、秩父山地に源を発した重川右岸の沖積地の南西傾斜面に位置しております。調査によって検出された遺構は古墳時代前期の住居跡54軒、溝2本、平安時代の土壙1基、溝4本、時期不明の土坑4基などです。このうち古墳時代前期の住居跡はその構造の違い、配置状況、規模などから集落内における階層差（制）などを示しているものと考えられます。また、住居跡をはじめ大溝などから大量の土器が検出されました、東海地方や北陸地方など周辺地域とのかかわり具合や、日常生活の様子などを知る好資料といえるものです。さらに平安時代の墓については、本県ではこれまで検出された例が極めて少なく、わずか1例ではありますが平安時代の葬制の一端を知る好資料といえるものです。

西田遺跡は発掘当初から注目を受けておりましたが、このたびようやく報告書の刊行にこぎつけることができました。より多くの方々によって研究資料としてご利用いただければと念じております。

末筆ながら、ご協力を賜った関係機関各位、並びに直接発掘調査、整理に当られた方々に厚くお礼申し上げます。

1997年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚 初重

目 次

序

例言

凡例

第1章 調査の実施と経過	1
第1節 調査経過	1
第2節 調査組織	1
第2章 遺跡の環境	1
第1節 位置と地理的環境	1
第2節 歴史的環境	5
第3章 遺構・遺物	6
第1節 住居跡	6
第2節 溝	20
第3節 土壌	22
第4節 その他	22
第4章 各 説	23
第1節 出土土器と遺構の時期	23
第2節 住居跡と集落	30
第3節 編物石	34
おわりに	37

挿図目次

第1図	西田遺跡位置図	2
第2図	第1次・2次調査の位置関係図	3
第3図	西田遺跡全体図	4
第4図	西田遺跡土器編年表	25・26
第5図	西田遺跡集落変遷図	28
第6図	西田遺跡住居跡と方形周溝墓位置図	32

表目次

第1表	西田遺跡住居跡時期一覧表	27
第2表	縄物石一覧表	35
第3表	山梨県内出土縄物石一覧表	36

図版目次

図版第1	1号住居跡・炉平面図	
図版第2	2号住居跡・炉平面図	
図版第3	3号住居跡・炉平面図	
図版第4	4号住居跡・炉平面図及び遺物出土位置図	
図版第5	5・6号住居跡平面図	
図版第6	7号住居跡・炉平面図	
図版第7	8号住居跡・炉平面図	
図版第8	9号住居跡・炉・貯蔵穴平面図	
図版第9	10号住居跡・炉平面図	
図版第10	11号住居跡・炉平面図	
図版第11	12・13号住居跡平面図	
図版第12	14・15号住居跡・炉平面図	
図版第13	16号住居跡・炉平面図	
図版第14	16号住居跡ピット平面図	
図版第15	17号住居跡・炉平面図	
図版第16	17号住居跡遺物出土位置図	
図版第17	18号住居跡平面図	
図版第18	18号住居跡炉・ピット平面図 及び19号住居跡・炉平面図	
図版第19	20号住居跡・炉平面図	
図版第20	21号住居跡平面図	
図版第21	22号住居跡・炉平面図	
図版第22	22号住居跡ピット平面図及び 遺物出土位置図	
図版第23	23号住居跡・炉平面図	
図版第24	24号住居跡・炉平面図	
図版第25	24号住居跡貯蔵穴平面図及び 遺物出土位置図	
図版第26	25号住居跡平面図	
図版第27	25号住居跡炉・貯蔵穴平面図 及び26号住居跡・炉平面図	
図版第28	27号住居跡・炉平面図	
図版第29	28号住居跡・炉平面図及び 第29号住居跡平面図	
図版第30	30・31号住居跡平面図	
図版第31	31号住居跡ピット平面図及び 遺物出土位置図	
図版第32	32・33号住居跡・炉平面図	
図版第33	34号住居跡平面図	
図版第34	34号住居跡炉・ピット平面図	
図版第35	35・36号住居跡・炉平面図	
図版第36	37号住居跡・炉・焼土平面図	
図版第37	37号住居跡遺物出土位置図	
図版第38	38・39号住居跡・炉平面図	
図版第39	40号住居跡・炉平面図	

- 図版第40 41・42号住居跡・炉平面図
図版第41 43・44号住居跡・炉平面図
図版第42 45号住居跡・炉平面図
図版第43 46号住居跡・炉平面図
図版第44 47号住居跡・炉平面図
図版第45 48号住居跡・炉平面図
図版第46 49号住居跡・炉平面図
図版第47 50号住居跡・炉平面図
図版第48 51号住居跡・炉平面図
図版第49 52号住居跡・炉平面図
図版第50 52号住居跡貯蔵穴平面図及び
ムシロ縦石器出土状況図
図版第51 52号住居跡遺物出土状況・出
土位置
図版第52 53号住居跡・貯蔵穴・炉平面図
図版第53 54号住居跡平面図及び遺物出
土位置図
図版第54 1～6号溝平面図
図版第55 1・3号溝断面図
図版第56 2・4号溝断面図
図版第57 5号溝断面図
図版第58 4号溝遺物出土状況図
図版第59 1～5号土壤平面図
図版第60 1号住居跡出土遺物
図版第61 2・3・4・6号住居跡出土遺物
図版第62 7・8・9・11・15・16号住
跡出土遺物
図版第63 17・20・21号住居跡出土遺物
図版第64 22号住居跡出土遺物
図版第65 24・25・27・29号住居跡出土遺物
図版第66 30・31号住居跡出土遺物
図版第67 31・32・33・34・35号住居
跡出土遺物
図版第68 37・39・40号住居跡出土遺物
図版第69 42・44・45・47号住居跡出
土遺物
図版第70 48・49・50号住居跡出土遺物
図版第71 51・52号住居跡出土遺物
図版第72 52・53・54号住居跡出土遺物
図版第73 17・21・52号住居跡出土編物石
図版第74 5号土壤・1号溝出土遺物
図版第75 2・3号溝出土遺物
図版第76 4号溝出土遺物(1)
図版第77 4号溝出土遺物(2)
図版第78 4・5号溝出土遺物及び拓影
図版第79 5号溝出土遺物(2)
図版第80 5号溝出土遺物(3)
図版第81 5号溝出土遺物(4)
図版第82 5号溝出土遺物(5)
図版第83 5号溝出土遺物(6)
図版第84 5号溝出土遺物(7)
図版第85 5号溝出土遺物(8)
図版第86 5号溝出土遺物(9)
図版第87 5号溝出土遺物(10)
図版第88 5号溝出土遺物(11)
図版第89 5号溝出土遺物(12)
図版第90 5号溝出土遺物(13)
図版第91 5号溝出土遺物(14)
図版第92 5号溝出土遺物(15)
図版第93 5号溝出土遺物(16)
図版第94 5号溝出土遺物(17)
図版第95 5号溝出土遺物(18)
図版第96 5号溝出土遺物(19)
図版第97 5号溝出土遺物(20)
図版第98 5号溝出土遺物(21)
図版第99 5号溝出土遺物(22)
図版第100 5号溝出土遺物(23)
図版第101 5号溝出土遺物(24)
図版第102 5号溝出土遺物(25)
図版第103 5号溝出土遺物(26)
図版第104 5号溝出土土器拓影
図版第105 5・6号溝、グリッド出土遺物
図版第106 グリッド出土縄文土器拓影
図版第107 (写真)
図版第108 (写真)
図版第109 (写真)

例　言

- 1 本書は、山梨県塩山市大字熊野字西田105番地ほかに所在する西田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本事業は山梨県警察塩山警察署建設に先立って、山梨県警察本部から委託をうけて山梨県教育委員会文化課が実施した発掘調査で、発掘調査は昭和53年度、整理報告書作成は昭和53・54年度に一部実施（文化課）、その後平成6・7年度に山梨県埋蔵文化財センターで実施した。
- 3 本報告書の作成、執筆、編集は文化財主事坂本美夫があたった。
- 4 報告書にかかる出土品、記録図面、写真などは山梨県埋蔵文化財センターに保管している。

凡　例

- 1 図版中のスクリートーンは次のような内容を示している。
 - カーボンないし焼土の飛散範囲
 - 粘土
 - 朱塗りの部分
- 2 土層図、断面図の標高の単位はmである。
- 3 縮尺は原則として遺構を1/80、土器を1/4、石器を1/5としたが例外もある。
- 4 ムシロ編み石器の遺物番号脇のカッコ内の数字は重さ(g)を表す。
- 5 土層説明は色調のみとし、組成内容の細かな説明は必要な箇所のみとした。
- 6 5号溝出土土器の脇にカッコに記した上、中、下は溝の中の土器の出土位置を表し、次の通りである。上=上部(28層以上)、中=中部(28~41層)、下=下部(41層以下)。

第1章 調査の実施と経過

第1節 調査経過

1. 発掘調査事務経過

昭和53年 4月 4日 文化庁に発掘届を提出する。
昭和53年 4月 5日 発掘調査を開始する。
昭和53年10月31日 発掘調査終了。
発掘調査終了後、遺物発見通知を提出する。
昭和53年11月 ~昭和55年3月第1次整理作業を実施。
平成 6年 4月 5日~平成6年10月31日第2次整理作業を実施。
平成 9年 3月31日 報告書刊行。

2. 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会
調査機関 山梨県教育委員会文化課
山梨県埋蔵文化財センター(第2次整理作業)
調査担当 文化財主事 坂本美夫
" 山崎金夫
調査員 米田明訓(現山梨県埋蔵文化財センター職員)
山本 茂(")
伊藤恒彦
佐藤勝廣(現小瀬沢町教育委員会職員)
品川祐司(現世田谷区資料館職員)
日原喜昭
調査補助員 野田昭人(現御坂町役場職員)
渡辺儀訓(現下吉田市第一小学校教諭)

第2章 遺跡の環境

第1節 位置と地理的環境

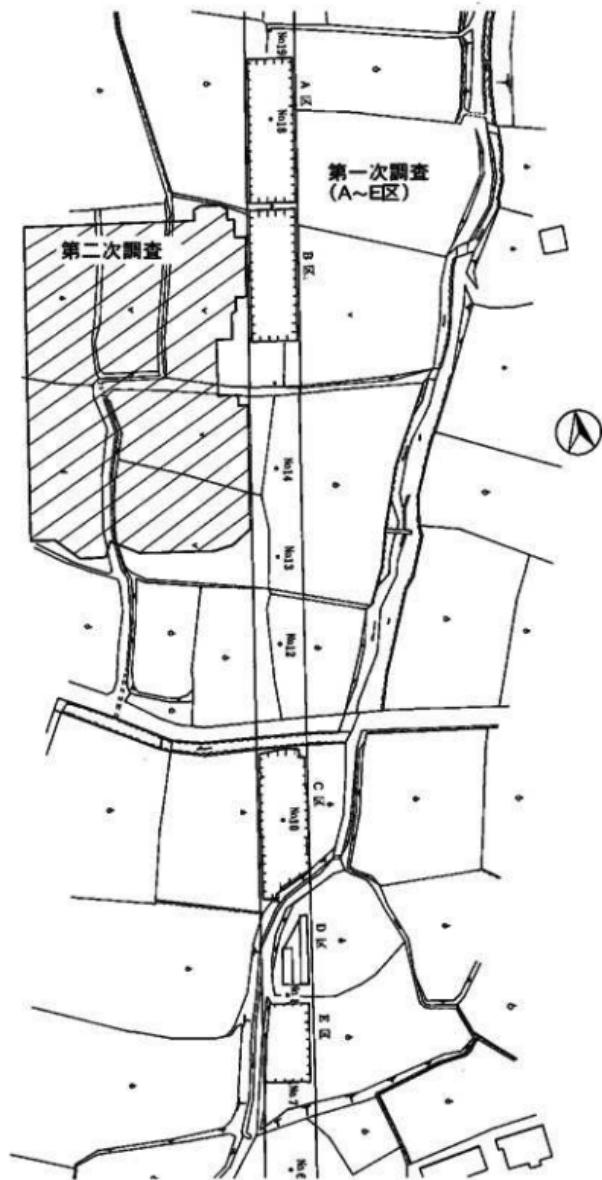
西田遺跡の所在する塩山市は、甲府盆地の北東部に位置する。おおよそ北を秩父山地を挟んで埼玉県秩父郡大滝村、西を三富村、牧丘町、山梨市、南を勝沼町、大和村、東をやはり秩父山地を挟んで都内地域の大月市、小菅村、丹波山村などと接する北東から南西方向に細長い市域を持つ。中央本線塩山駅の南南西約2kmの果樹地帯にある。現在は山梨県警察塩山警察署になって



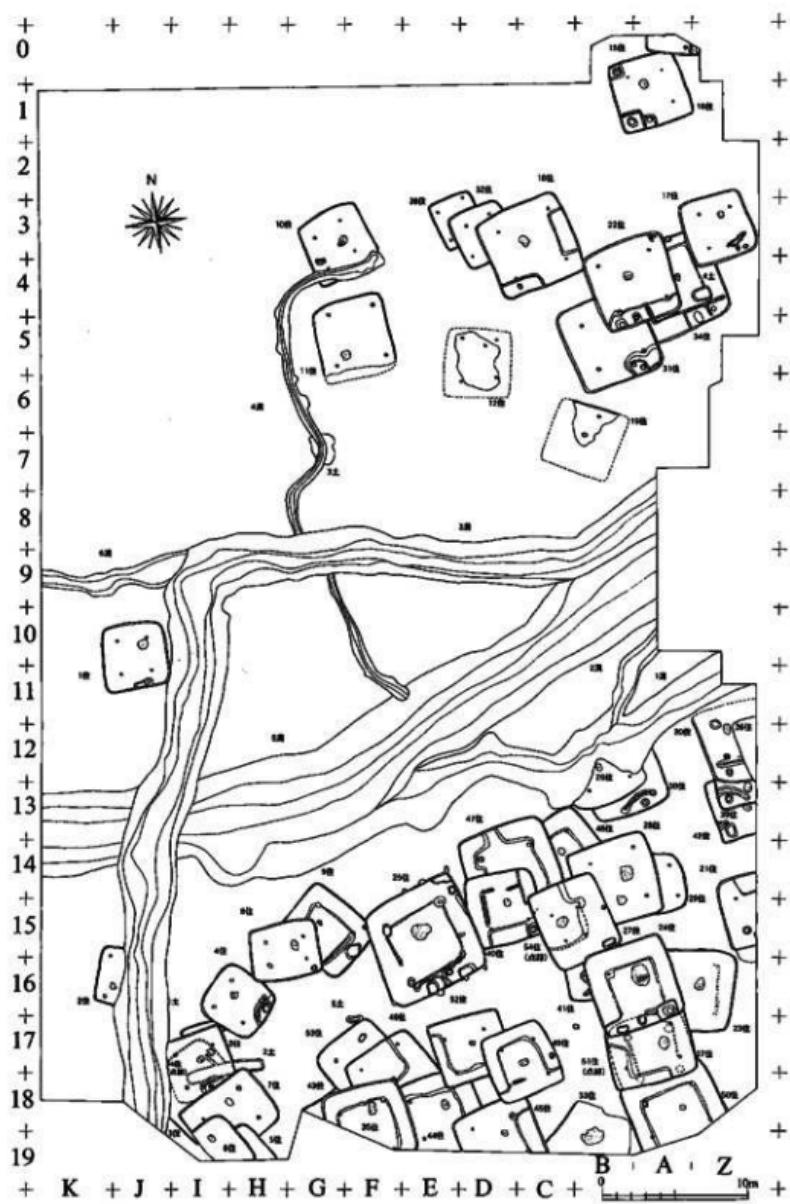
第1圖西田遺跡位置圖

- 1.西田遺跡 2.東田遺跡 3.芦原田遺跡 4.西脇道路 5.住蓮木平遺跡 6.村北遺跡 7.向原遺跡 8.頸田B遺跡
9.原田A遺跡 10.王十前遺跡 11.原田C遺跡 12.町可遺跡 13.風間氏家遺跡 14.正泉A遺跡 15.下伏曾八反田遺跡
16.荒堀遺跡 17.ケカチ遺跡 18.坂の上・后畠遺跡 19.熊野社遺跡 20.梶畠A遺跡 21.中道遺跡 22.深沢氏姫埋
23.熊野前田遺跡 24.熊野A・坂田遺跡 25.下笠田遺跡

※斜線部分は古墳時代の分佈分布地域



第二図 第一次、第二次調査の位置関係図



第3図 西田遺跡全体図

いる。

塩山市は、市域のおおよそ南西側半分が平地、北東側半分が山間地的様相をみせる地域で、さらに北東側はその背後の秩父山系へと続く。本遺跡は、秩父山系の大菩薩嶺、柳沢峠に源を発する重川によって形成された扇状地上の右岸扇央部、標高364m付近に立地する。重川が市域の中央付近を南下し、市南端近くで南西に向きを変えた右岸にみられる南西向きの傾斜面微高地上有る。

第2節 歴史的環境

西田遺跡の所在する塩山市地域は、原始時代より古代に至る間の遺跡が濃密に分布する地域で、特に前者の時期に顕著な地域といえる。しかし、本遺跡を中心とした半径1.5km周辺に限ってみると、むしろ縄文時代の遺跡は町田遺跡はじめ幾つかの遺跡が知られる程度であり、この限りでは濃密といった感は見られない。逆に古墳時代から奈良・平安時代の遺跡は比較的密に分布している傾向が確認できるのであって、古墳時代以降に隆盛をみた地域と言えよう。このようなかで特に古墳時代の遺跡については、本遺跡の西側を南西から北東方向に流れる塩川の、左岸に沿った幅700mほどの帯状に集中する傾向がみられる。この帯状の地域の地形をみると、一本の尾根ないし微高地を形成しているのが確認できることから、尾根を中心として開発の行われたことを想定できる。さらに周辺地域にも、同様な状況が考えられる。しかし、活発な開発が想定される一方で、当地域において古墳時代前期の方形周溝墓が本遺跡に接した東側の塩山バイパス部分で確認されているものの、明確な古墳の存在はいまだ確認されていない状況にあり、政治的・社会的態様の注目される地域といえる。

中世以降になると、北々東1.7kmにある於曾屋敷を初めとして風間氏屋敷、深沢氏屋敷など館跡ないし屋敷跡の多く見られる地域である。特に於曾、塩後地域の西街道沿に軒を連ねたような状況での存在が見られ、黒川金山の開発に携わった金山衆の屋敷群とされている。中・近世の遺跡の存在は、県内の他地域に比べて多くみられ、中世以降に特に隆盛をみせる地域といえる。

第3章 遺構・遺物

第1節 住居跡

1号住居跡(図版第1・60)

J・K10~11グリッドで単独で検出された。南北に主軸をもつもので、規模は東西4.48m、南北4.64mほどのやや矩形の隅丸方形を呈する。壁は50cm前後の高さが確認される。床は堅くたたき締められ、住居の中央当たりで多少高まりを見せている。なお、周溝、ベッド状遺構はみられなかった。柱穴は4本主柱穴で、直径20cm、深さ50cmほどである。炉は北東の柱穴近く見られ、床を掘りくぼめた地焼炉である。南壁の中央やや東寄りで入り口の施設の一部と考えられる落ち込みと、併せて深さ1mほどの貯蔵穴が確認された。また貯蔵穴の脇から、白色粘土塊を確認した。

遺物には土師器のS字状口縁台付甕(以下S字甕とする)(図版第60-6、7)、台付甕(同8)、壺(同1~5)、小型壺(同11)、甑(同9、10)、高坏(同12~13)などがある。

2号住居跡(図版第2・61)

J・K15~16グリッドで単独で検出された。住居の東側三分の二ほどを3号溝によって切られているが、東西に主軸をもつ住居と考えられる。規模は東西の残存部分が1.9m、南北が4mほどであり、やや矩形の隅丸方形を呈するものであろう。床は堅くたたき締められ、住居の中央付近で多少高まりをみせる。なお、周溝、ベッド状遺構はみられなかった。柱穴は4本主柱穴であろうが、西側の2本が確認でき、これらは直径15cm、深さ10cmほどである。炉は南西の柱穴寄りにみられ、床を掘りくぼめた地床炉である。

遺物には土師器の甕(図版第61-1、2)、高坏(同3)などがみられるが、いずれも住居の時期より後出の形態であり、3号溝などからの混入品と考えられる。

3号住居跡(図版第3・61)

H・I・J17~18グリッドで7・13・14号住居跡、1・2号土壙、そして3号溝と重複して確認された。新旧関係は13・14号住居跡および1・2号土壙を切り、7号住居跡および3号溝によって切られている。南北に主軸をもつもので、規模は東西4.67m、南北4.37mほどの隅丸方形を呈する。床は堅くたたき締められ、ほぼ水平に造られている。周溝、ベッド状遺構はみられなかった。柱穴は4本主柱穴で、直径15~40cm、深さ40~60cmほどである。炉は北東の柱穴寄りにみられ、床面を掘りくぼめた上に粘土を張った粘土敷炉である。また、燃焼面の脇に枕石の代用として高さ3cm、幅8cmほどの土手を粘土で造っている。南壁の中央あたりにU字状に高さ5cmほどの土手がまわり、土手と壁の中間に直径30cm、深さ38cmほどの梯子受けの穴がみられる。

遺物は、土師器の甕(図版第61-4)、器台(同5)片が出土している。

4号住居跡(図版第4・61)

H・I16~17グリッドで3・8号住居跡、1号土壙と重複して確認された。新旧関係は3号住

居跡と接し、かつ3号住居跡とともに1号土壙を切り、さらに8号住居跡によって切られている。南北に主軸をもつもので、規模は東西4.08m、南北4.5mほどの隅丸方形を呈する。床は堅くたたき締められ、中央付近で少し低まり、かつ北から南へ向かい傾斜している。なお、周溝、ベッド状造構はみられなかった。柱穴は基本的には4本主柱穴である。しかし、南壁側については2個ずつみられ、しかも片方が深く、もう片方が浅いものであり補強などが考えられる。直径25cm、深さ20~60cmほどである。炉は北西の柱穴寄りにみられ、床面を掘りくぼめた地焼炉で枕石がみられる。東壁の中央から南東コーナにかけて、U字状に高さ8cm前後の土手が回る。中に長方形の穴が穿たれ、大きさから貯蔵穴と考えられる。炉の南側で、白色粘土の塊が確認された。

遺物には土師器の甕(図版第61-6)、壺(同8-10)、鉢(同7)、高杯(同9)などがある。

5号住居跡(図版第5)

H18~19グリッドで6・7号住居跡と重複して確認された。重複関係は7号住居跡を切り、6号住居跡に切られている。6号住居跡に大きく切られており、東壁とそれに続く床がわずかに残っているにすぎない。床は堅くたたき締められ、ほぼ水平に造られている。周溝は無いようである。遺物は、土師器片が出土しているが図化できるものはなかった。

6号住居跡(図版第5・61)

H・I18~19グリッドで5・7・13号住居跡、3号溝と重複して確認された。新旧関係はいずれの住居跡をも切り、3号溝に切られている。住居の半分ほどが確認され、主軸は南北をとるものと思われる。隅丸方形と考えられ、現存部で南北4.2m、東西2.55mほどである。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。周溝は無いようである。柱穴と炉が住居の北東隅付近で確認された。柱穴は2個が近接しており、補修なしし補強されたものであろう。炉は地焼炉である。

遺物は土師器のS字甕(図版第61-11)、高杯(同12、13)などがある。

7号住居跡(図版第6・62)

H・I17~19グリッドで3・5・6・13・14号住居跡、そして2号土壙と重複して確認された。新旧関係は3・13・14号住居跡、2号土壙を切り、5・6号住居跡に切られている。南北に主軸をもつもので、規模は東西5.12m、南北4.56mほどの隅丸長方形を呈する。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らに造られている。なお、周溝、ベッド状造構はみられなかった。柱穴は4本主柱穴で、直径30cm、深さ50cmほどである。炉は地焼炉で、枕石がみられる。南および北壁の西壁寄りに、それぞれ棒状で高さ6cmほどの土手がみられる。南壁側のものには、壁との間に貯蔵穴がみられる。

遺物には土師器のS字甕(図版第62-6)、甕(同1)、口唇部に刻み目をもつ甕(同4)、楕(同2)、高杯(同3、5)それに土玉(同9)などがある。

8号住居跡(図版第7・62)

G・H15~16グリッドで4・9号住居跡と重複して確認された。新旧関係は、本住居跡がいずれも切っている。南北に主軸をもつもので、規模は東西4.57m、南北3.79mほどの隅丸長方形を呈する。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。なお、周溝、ベッド状造構はみられなかった。柱穴は4本主柱穴である。直径15~30cm、深さ30~45cmほどである。炉は北東主柱穴寄りにみられ、地焼炉である。枕石はみられない。また、南東隅に貯蔵穴がみられる。

遺物は土師器の壺(図版第62-10)、土製勾玉(同11)である。

9号住居跡(図版第8・62)

F・G・H14~16グリッドで8・25号住居跡と重複して確認された。新旧関係は、本住居跡がいずれにも切られている。南北に主軸をもつもので、規模は東西4.45m、南北5.47mほどの隅丸長方形を呈する。周溝はみられない。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。柱穴から壁際までのうち東壁、北壁まわりには、床より3cmほど高くベッド状遺構(L字状)が造られている。一方、南壁側には壁沿いの柱を結び、さらに西cm壁に至る間を高さ5cm、幅30~50cmほどの土手がみられる。さらに、この土手と南壁の間を三等分するかのように、同様な土手が造られている。そしてこの中央の区画に長さ0.9m、幅0.8m、深さ0.52mの長方形の穴が、南壁から北側に向かい菱形になるよう掘られている。大きさから貯蔵穴と考えられる。さらに貯蔵穴の底には直径20cm、深さ13cmほどの小穴がみられ、貯蔵穴を兼用した梯子受けの穴と考えられる。柱穴は4本主柱穴であるが、北西のものは確認できなかった。炉は北東の柱穴寄りにみられ、枕石をもった地焼炉である。

遺物は土師器の折り返し口縁壺(図版第62-12)がある。

10号住居跡(図版第9)

F・G3~4グリッドで4号溝と重複して確認された。新旧関係は、4号溝に切られている。南北に主軸をもつもので、東西4.7m、南北4.8mほどの隅丸方形を呈する。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。周溝、ベッド状遺構はみられない。柱穴は4本主柱穴である。炉は中央やや東よりにみられ、地焼炉である。南西の柱穴の脇あたりに貯蔵穴ではないかとみられる小穴がある。

遺物は、土師器片が出土しているが図化できるものはなかった。

11号住居跡(図版第10・62)

F・G4~6グリッドで単独で検出された。一部南壁沿いを失っている。東西に主軸をもつもので、規模は東西5.27m、南北5.57m(推定)ほどの隅丸方形を呈する。床は堅くたたき締められ、中央付近で多少高くなっている。なお、周溝、ベッド状遺構はみらなかった。柱穴は4本主柱穴で、直径20cm、深さ20cm前後である。炉は南西の柱穴近くにみられ、地焼炉で炭化物や灰などの堆積がみられた。

遺物は、土師器の有段口縁壺(図版第62-13)、高坏(同14)、手捏土器(同15)、砥石(同16)などがある。

12号住居跡(図版第11)

D・F5~6グリッドで単独で検出された。床と炉、それに柱穴が確認されたのみで、残存状況は悪い。柱穴などから南北に主軸をもつもので、東西、南北とも5m前後の、恐らく隅丸方形を呈するものと思われる。残存している床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。柱穴は4本主柱穴で直径20cm、深さ25cm前後である。炉は地焼炉である。

遺物は、土師器片が出土しているが図化できるものはなかった。

13号住居跡(図版第11)

H・I・J17～18グリッドで3・5～7・14号住居跡、2号土壙、3号溝と重複して確認された。新旧関係はいざれにも切られている。確認された部分は西側の壁と、西壁沿いの床のごく一部である。主軸を南北に取る、隅丸方形を呈するものと思われる。柱穴、炉などは不明である。

遺物は土師器片が出土しているが、図化できるものはなかった。

14号住居跡(図版第12)

H・I・J17～19グリッドで3・7・13号住居跡、2号土壙と重複して確認された。新旧関係は7号住居跡に切られ、3・13号住居跡、2号土壙を切っている。東西に主軸をもつもので、規模は東西4.4m、南北4.15mほどの、隅丸方形を呈する。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。周溝、ベッド状造構はみられなかった。柱穴は4本主柱穴で、直径15～40cm、深さ25～64cmほどである。炉は南西の柱穴寄りにみられ、地焼炉である。東壁の中央あたりにU字状に高さ8cm前後の土手がまわる。中に縦50cm、横55cm、深さ18cmほどの穴がみられ、貯蔵穴かと考えられる。

遺物は、土師器片が出土しているが図化できるものはなかった。

15号住居跡(図版第12・62)

Z・A0グリッドで、16号住居跡と重複して確認された。新旧関係は16号住居跡を切っている。しかし確認されたのはごく僅かな部分であった。住居の平面形は、隅丸方形を呈するものと思われる。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。柱穴は南西隅のものが確認された。炉の位置は分からぬが、南西隅の柱穴あたりで焼土粒子や炭化物が確認されている。南壁の東よりには高さ7cmほどの土手がみられ、その内側に貯蔵穴かと考えられる直径30cm、深さ22cmほどの小穴が確認できる。

遺物は土師器の壺(図版第62-17)、榤(同18)などがある。

16号住居跡(図版第13・14・62)

Z・A・B0～1グリッドで、15号住居跡と重複して確認された。新旧関係は15号住居跡に切られている。南北に主軸をもつもので、東西4.93m、南北4.90mほどの隅丸方形を呈する。床はたたき締められ、ほぼ平らである。周溝、ベッド状造構はみられなかった。柱穴は4本主柱穴で、直径10cmほど、深さ35cm前後である。炉は北西の柱穴寄りにみられ、地焼炉である。南壁の中央付近に、U字状に高さ5cmほどの土手がめぐり、中に楕円形の梯子受けの穴がみられる。このU字状の土手の一部を共有して、南西隅にL字状の土手を造り、中に直径70cm、深さ52cmほどの貯蔵穴がみられる。同様な施設が北西隅にみられ、こちらは直径55cm、深さ27cmほどである。

遺物は土師器のS字甌(図版第62-21)、甌(同19)、高坏(同22)などがある。

17号住居跡(図版第15・16・63・73)

Z・A2～4グリッドで34号住居跡と重複して確認された。新旧関係は34号住居跡を切っている。南北に主軸をもつもので、規模は東西4.54m、南北4.52mほどの隅丸方形を呈する。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。なお、周溝、ベッド状造構はみられない。柱穴は4本主柱穴

で直径30cm、深さ40cm前後である。炉は北東の柱穴寄りにみられ、枕石をもち、壺を利用した土器敷炉である。南東隅あたりに丁字状に高さ5cmほどの土手が造られ、中央寄りに直径35cmほどの梯子受けの穴が、反対側の隅に直径50cmほどの貯蔵穴がみられる。

遺物には土師器の二重口縁壺(図版第63-1、2)、壺(同3)、S字壺(同4)、器台(同5)、手握土器(同6~11)それにムシロ編石器(図版第73-1~11)などがある。

18号住居跡(図版第17・18)

B・C・D 2~4グリッドで22・32・38号住居跡と重複して確認された。新旧関係は32・38号住居跡を切り、22号住居跡に南東隅を僅かに切られている。南北に主軸をもつもので、規模は東西6.26m、南北6.02mほどの隅丸方形を呈する。床は堅くたたき締められ、中央付近で多少高まっている。周溝はみられない。柱穴は4本主柱穴で、直径15cm、深さ60cm前後である。この柱穴の北東と南東との間から南壁際まで、床よりcm高さ5cmほど高いベッド状遺構がみられる。また南西すみにはL字状に高さ7cmほどの土手がめぐり、中に直径45cm、深さ50cmほどの貯蔵穴ないし梯子受けの穴がみられる。炉は北西の柱穴寄りにみられ、床を掘りくぼめた地焼炉である。

遺物は土師器片がみられるが、図化できるものはなかった。

19号住居跡(図版第18)

B 6~7グリッドで単独で確認された。隅丸方形を呈するものと考えられるが、北壁それに床が僅かに確認されたにすぎない。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らにつくられている。確認された床の南側において、炭化物の散布がみられ、地焼炉である。壁際には直径25cm、深さ26cmほどの穴が確認できる。やや位置からすれば、柱穴とするには躊躇する。

遺物は、土師器片が出土しているが、図化できるものはなかった。

20号住居跡(図版第19・63)

Z 11~12グリッドで36・39・42号住居跡と重複して確認された。新旧関係は39・42号住居跡を切り、36号住居跡に切られている。また、北壁については、1号溝の関係から明確にならなかった。南北に主軸をもつ、隅丸方形を呈するものと考えられる。規模は現状で東西4.63m、南北5.05mほどである。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。柱穴は、4本主柱穴と思われるが、西壁沿いの2本が確認されたのみである。直径50cm、深さ70cmほどである。炉は北西の柱穴寄りにみられ、地焼炉である。南西の柱穴と南壁との間に直線状の高さ6cmほどの土手が見られ、さらにその内側に梯子受けと思われる直径50cm、深さ56cmほどの穴がある。

遺物は、土師器のS字壺(図版第63-12~14)、鉢(同15)、高坏(同16)、器台(同17)などがある。

21号住居跡(図版第20・63・73)

Z 14~15グリッドで単独で確認された。住居跡は隅丸方形を呈するものと考えられるが、住居跡の東側(調査区外)を大きく欠く。また、南壁も搅乱をうけている部分がある。南北に主軸をもつもので、規模は東西3m(現存部)、南北4.95mほどである。床は堅くたたき締められ、ほぼ平

らである。柱穴は4本主柱穴と考えられるが、西壁沿いの2本だけが確認された。炉は確認できていないが、恐らく北東の柱穴寄りにあるのであろう。南西の柱穴の東側に直線状と思われる高さ4cmほどの土手がみられる。その内側には梯子受けの穴も確認できる。

遺物は、土師器の壺(図版第63-18・23)、S字甕(同-19)、甕(同20・22)、碗(同21)、器台(同24)、それにムシロ編石器(図版第73-12~16)などがある。

22号住居跡(図版第21・22・64)

A・B 3~5グリッドで18・31・34号住居跡と重複して確認された。新旧関係はいずれの住居跡をも切っている。南北に主軸をもつもので、規模は東西5.77m、南北5.92mほどの隅丸方形を呈する。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。壁回りに、幅15cm、深さ10cmほどの周溝が全周する。柱穴は4本主柱穴で、直径20~50cm、深さ60cm前後である。南壁に沿った柱穴と南壁との間には、床より高さ5cmほど高いベッド状造構がみられる。さらにこのベッド状造構の中央やや東寄りに深さ27cmほどの間仕切りと考えられる溝がみられる。さらにこの溝より西侧に梯子受けの小穴が、さらにその西側に方形に区画された中に貯蔵穴がみられる。また、南東隅の北壁に床を掘り込むように直線上の施設がみられ、内側に小穴がみられる。炉は北西の柱穴寄りにみられ、床を掘りくぼめた地焼炉である。

遺物は土師器のS字甕(図版第64-1~7)、甕(同9)、高坏(同8、10、11)などがある。

23号住居跡(図版第23)

Z・A15~17グリッドで24・37号住居跡と重複して確認された。新旧関係は、いずれの住居跡にも切られ、住居跡西側部分を大きく欠く。南北に主軸をもつもので、規模は東西4.95m、南北5.03mほどの隅丸方形を呈する。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らであるが検出状況は悪い。周溝はみられない。東壁に沿ってところどころに幅1m、高さ5cmほどのベッド状造構がみられる。これは、さらに北壁、南壁まで及んでおり、「コ」の字状に回る形態と考えられる。柱穴は4本主柱穴と考えられるが、確認できなかった。炉は住居跡中央の北東寄りにみられ、地焼炉である。

遺物は、土師器片が出土しているが図化できるものはなかった。

24号住居跡(図版第24・25・65)

A・B15~17グリッドで23・27・37・41・51号住居跡と重複して確認された。新旧関係は、このうち本住居跡が23・37・41・51号住居跡を切っている。そして27号住居跡との関係は、本住居跡から調査を実施したため、本住居跡が両住居跡を切って構築されたかのようになっているが、出土遺物からすれば本住居跡の古いことが確認され、両住居跡の貼床を掘り抜いて調査してしまった結果と考えられる。これから、本住居跡は27号住居跡によって切られていることになる。本住居跡は南北に主軸をもつもので、規模は東西5.8m、南北5.8mの隅丸方形を呈する。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。4本主柱穴で、直径15cm、深さ30cm前後である。周溝はみられない。東西ならびに北壁の回りには、柱穴より壁際にかけて「コ」の字状に高さ5cmほどのベッド状造構がみられる。ベッド状造構の北壁部分には、中央付近に後世にあけられたと考えられる土壙がみられる。南壁沿いには、中央付近に梯子受けの穴、西壁寄りに貯蔵穴と考えられる小穴がみられる。また、東壁寄りには高さ5cm程の土手が壁に平行して造られ、また土手

に接して長方形の落ち込みの中に貯蔵穴がみられる。炉は北東の柱穴寄りにみられ、地焼炉である。枕石は粘土を高く盛り上げて造られている。

遺物には、土師器の壺(図版第65-1)、S字甕(同2~4)、甑(同5)、鉢(同6)、高坏(同7~9)、蓋?(同10)などがある。

25号住居跡(図版第26・27・65)

D・E・F14~16グリッドで9・40号住居跡と重複して確認された。新旧関係は、9号住居跡を本住居跡が切っている。40号住居跡との関係は明確にならなかったが、遺物からみると40号住居跡が若干新しいものといえる。南北に主軸をもつもので、規模は東西7.17m、南北7.2mほどのやや矩形の隅丸方形を呈する。本遺跡で最大のものである。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らであるが東壁から西壁に向かって緩やかな傾斜をみせる。周溝はみられなかった。柱穴は4本主柱穴で、直径50cm、深さ60cm前後である。なお、主柱穴のほかに、壁回りに壁柱穴と考えられる小穴が8箇所で確認されている。東壁と北壁回りには、柱穴から壁際にかけて高さ5cmほどのベッド状遺構がL字状にみられる。この東壁がわの中央やや南寄りに間仕切りと考えられる溝がみられる。また、北東の柱穴近くに小穴がみられる。西壁沿いには、壁に平行して柱穴間に高さ5cmほどの土手がみられる。南壁側には、T字状の高さ5cmほどの土手が造られ、中央東側に梯子受けの小穴、その東側に長方形の貯蔵穴、中央西側に長方形の貯蔵穴が見られる。なお貯蔵穴のうちの西側のものは、中の埋没土が水平に堆積しており人为的に埋め立てられたと考えられるもので、東側のものが使われていた段階では使われていなかったものと考えている。炉は、北東の柱穴寄りにみられ、床を掘り廻めた地焼炉である。

遺物は、土師器の甕(図版第65-11)、S字甕(同-12)、壺(同13)、鉢(同14)などがある。

26号住居跡(図版第27)

A・B12~13グリッドで30号住居跡、1号溝と重複して確認された。新旧関係は30号住居跡を切り、1号溝によって30号住居跡とともに北側部分を大きく切られている。南北に主軸をもつもので、規模は東西4.94m、南北3m(現存長さ)ほどの隅丸方形を呈するものと思われる。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。周溝、ベッド状遺構は、ないものと思われる。柱穴は4本柱穴であろうが、確認できたのは南側2本である。直径20cm、深さ35cmほどである。炉は床を掘り廻めた地焼炉で、東側に沿って枕石が置かれていたような小穴がみられる。

遺物には、土師器片が見られたが、図化できるものはなかった。

27号住居跡(図版第28・65)

B・C14~16グリッドで24・28・40・41・47・48号住居跡と重複して確認された。新旧関係は全ての住居跡を切っている。なお、24号住居跡との関係は24号住居跡で述べたとおりである。南北に主軸をもつもので、規模は東西4.86m、南北5.52mほどである。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。周溝はみられない。柱穴は4本主柱穴であるが、その位置が相対的に西壁寄りにみられ、他の住居跡と違いをみせる。直径20cm、深さ35~86cmほどである。高さ5cmほどのベッド状遺構が、北西隅より4本の柱穴あたりまで広がっている。また、南東隅あたりに貯蔵穴と思われる長方形の穴がみられる。炉は西壁沿いの柱穴のほぼ中間にみられ、枕石のか

わりに粘土で枕石状の土手を造っている。

遺物は、土師器のS字甕(図版第65-15)がある。

28号住居跡(図版第29)

A・B・C13~15グリッドで27・29・48号住居跡と重複して確認された。新旧関係は27号住居跡に切られ、29・48号住居跡を切っている。なお南壁付近の検出状況は悪い。南北に主軸をもつもので、規模は東西4.96m、南北5.72mほどの隅丸長方形を呈する。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。柱穴は4本主柱穴である。直径20cm前後で、北西隅を除き深さ55cm前後である。周溝、ベッド状造構などはみられない。北東と南西寄りの柱穴寄りの2箇所から焼土が確認されている。北東寄りの焼土は5cm前後の厚さが認められるもので、短径50cm、長径1.1mほどの楕円に近い不整形を呈している。もう片方の南西寄りの焼土は、5cm前後の厚さが認められるもので、直径50cmほどの円形に近い形態である。また焼土の東縁に僅かな高まりをもつ枕石状の土手が認められる。これら2箇所の焼土はいずれも地焼炉と考えて差し支えないものであろうが、他の住居跡例からすれば、北東寄りのものを主炉と考えたい。南西寄りの焼土は、燃焼の伴う何らかの作業に使われた副炉と考えておきたい。もっとも性能的には主炉と何ら変わらないものといえる。

遺物は、土師器片が出土しているが、図化できるものはみられなかった。

29号住居跡(図版第29・65)

A14~15グリッドで28号住居跡と重複して確認された。新旧関係は28号住居跡によって切られている。南北に主軸をもつもので、規模は東西4.11m、南北1.85m(現存部)ほどの隅丸方形ないし楕円形を呈する。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。周溝、ベッド状造構などはみられない。柱穴は4本主柱穴であろうが、確認されたのは東側の2本である。炉は確認されていない。

遺物は、高坏(図版第65-16)、小型甕(同17)などがある。

30号住居跡(図版第30・66)

A・B12~13グリッドで26号住居跡、1号溝と重複して確認された。新旧関係は、いずれにも北側部分を大きく切られている。南北に主軸をもつもので、規模は東西5.54m、南北4m(現存部)の隅丸方形を呈するものと思われる。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。周溝、ベッド状造構はみられないようである。柱穴は4本主柱穴である。北側列のものは溝の斜面から確認された。南壁の中央付近より土手が曲線を描き、南東の柱穴まで伸びている。そしてこの土手と南壁の間に梯子受けの小穴がみられる。炉は確認できなかった。

遺物は、甕(図版第66-1~2)、台付甕(同3~5)、S字甕(同6)、高坏(同7)などがある。

31号住居跡(図版第30・31・66・67)

A・B・C4~6グリッドで22・34号住居跡と重複して確認された。新旧関係は22号住居跡によって切られ、34号住居跡を切っている。南北に主軸をもつもので、規模は東西6m、南北6.18mの隅丸方形を呈する。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。柱穴は4本主柱穴であるが、北東のものは確認できなかった。直径35cm、深さ65cm前後である。周溝が一部南東隅あ

たりにみられ、これは、ごく浅いものである。南東隅に、柱穴から壁際まで高さ5cmほどのベッド状造構がみられる。そしてこのベッド状造構には、南壁中央寄りに長方形に盛んだ中に、いずれも深さ30cm前後の梯子受けの穴と貯蔵穴とがみられる。炉は確認されていないが、北西の柱穴と北壁との間に焼土と小規模の土手とがみられる。

遺物は、土師器のS字甕(図版第66-8~9、図版第67-1)、壺(図版第67-2)、直口壺(同3)などがある。

32号住居跡(図版第32・67)

D・E 2~4グリッドで18・38号住居跡と重複して確認された。新旧関係は18号住居跡に南東部分を大きく切られ、38号住居跡を切っている。南北に主軸をもつものと思われ、規模は東西4.02m、南北3.89mほどの隅丸方形を呈する。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。周溝、ベッド状造構はみられなかった。柱穴は4本主柱穴であるが、南東部のものは確認できなかった。直径15cm前後、深さ30cm弱ほどである。炉は確認できなかった。

遺物は、土師器の台付甕(図版第67-4)、S字甕(同5)などがある。

33号住居跡(図版第32・67)

B・C 18~19グリッドで45号住居跡と重複して確認された。新旧関係は、45号住居跡に切られている。なお、東側で50号住居跡と重複するものと考えられるが、切り合い関係をつかめなかつた。検出状況は悪く、北壁の一部と、それに続く床が東側で確認された。南東~北西に主軸をもつ隅丸方形ないし長方形を呈するものと考えられる。規模は現存部で東西5.06m、南北5.22mほどである。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らにつくられたものようである。周溝、ベッド状造構はみられない。柱穴は検出できなかった。炉は住居跡の中央やや北西寄りにみられ、地焼炉である。

遺物は土師器の甕(図版第67-6)と台付甕(同7)などがみられる。

34号住居跡(図版第33・34・67)

Z・A 3~5グリッドで17・22・31号住居跡、4号土塙と重複して確認された。新旧関係は、いずれの住居跡と土塙とによって切られている。南北に主軸をもつもので、規模は東西6.04m、南北6.39mほどの隅丸方形と考えられる。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。周溝が西側の壁を除いて確認されることから、全周していた可能性が高い。柱穴は南西隅のものが確認されたにすぎない。直径60cm、深さ40cmほどである。南壁の中央から東壁まで壁に沿って高さ5cmほどの土手が造られている(T字状)。さらに南壁の中央付近では壁から土手に向かう間仕切り溝がみられる。そして西側の区画には梯子受けの小穴、東側の区画には楕円形の貯蔵穴がみられる。この土手に引き続いて、北壁、東壁沿いには高さ5cmほどのベッド状造構がある。また南西隅の柱穴の回りを南壁から西壁に同様なベッド状造構がみられ、ベッド状造構は貯蔵穴付近を除き全周していたものと考えられる。炉は、住居跡中央やや北東寄りにみられる。地焼炉で、粘土による石枕状の土手がみられる。

遺物はS字甕(図版第67-9)、椀(同8)、加飾壺(同11、12)などがみられる。

35号住居跡（図版第35・67）

E・F・G18～19グリッドで43・44・46・53号住居跡と重複して確認された。新旧関係は、本住居跡がいずれの住居跡をも切っている。南北に主軸をもつもので、規模は東西5.86m、南北5m（現存部）ほどの隅丸長方形を呈する。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。柱穴は4本主柱穴で、直径25cm、深さ45cm前後である。周溝はみられない。柱穴からいずれの壁際まで、高さ5cm前後のベッド状造構がみられる。北東の柱穴寄りに、枕石をもった地焼炉がある。炉の近くには、作業台であろうか偏平な石が置かれていた。

遺物は、土師器の折り返し口縁壺（図版第67-12）、甕（同13）、S字甕（同14）、台付甕（同20）、小型丸底壺（同19）、高坏（同16）、器台（同17）、手握土器（同18）、土製勾玉（同15）、砥石（同21）などがある。

36号住居跡（図版第35）

Z11～12グリッドで20・39号住居跡と重複して確認された。新旧関係は、本住居跡がいずれの住居跡をも切っている。39号住居跡を掘り下げている途中で確認されたため、床の部分が確認されたにすぎない。南北に主軸をもつ隅丸方形と考えられるもので、西壁は現状で4.7mを測る。床は堅くたたき締められている。

遺物は、土師器片が出土しているが固化できるものはなかった。

37号住居跡（図版第36・37・68）

Z・A・B16～18グリッドで23・24・50・51号住居跡と重複して確認された。新旧関係は、24号住居跡によって北側を切られている。また、23・50号住居跡を切っている。さらに51号住の上に乗っている。南北に主軸をもつもので、規模は東西5.81m、南北4.75m（現存部）ほどの隅丸方形と考えられる。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。周溝はみられない。柱穴は4本主柱穴である。南西の柱穴を取り込んで、南西隅付近にL字状のベッド状造構がみられる。炉は中央や東寄りにみられ、地焼炉である。また、南西の柱穴付近の床に直径20cm前後的小範囲に焼土化した部分がみられる。何らかの作業に伴うものであろうか。

遺物は、S字甕（図版第68-1～2）、台付甕（同3）、小型甕（同8、9）、二重口縁小型壺（同10）、高坏（同5）、椀（同4）、甕（同6、7）などがある。

38号住居跡（図版第38）

D・E2～3グリッドで18・32号住居跡と重複して確認された。新旧関係は、いずれの住居跡によっても切られている。南北に主軸をもつもので、規模は東西3.14m、南北3.5mほどの隅丸長方形を呈する。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。周溝、ベッド状造構はみられない。柱穴は4本主柱穴で、直径15cm、深さ20cm前後である。炉は確認できなかつたが、東壁の中央あたりに炭化物などの飛散がみられるので、この付近にあったのであろう。

遺物は、土師器片が出土しているが固化できるものはなかった。

39号住居跡（図版第38・68）

Z12～13グリッドで20・36・42号住居跡と重複して確認された。新旧関係は42号住居跡を切り、20・36号住居跡によって住居の大半を切られている。南北に主軸をもつ、隅丸方形ないし長・

方形と考えられるものである。検出された床部分は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。周溝はみられない。南西隅に、高さ10cmほどの土手があり、その内側には貯蔵穴と思われる長方形の穴が掘られている。また、この土手に接するように地焼炉が造られている。柱穴は不明である。

遺物は、土師器のS字壺(図版第68-11、12)、高坏(同13)がある。

40号住居跡(図版第39・68)

C・D14~15グリッドで25・27・47・48号住居跡と重複して確認された。新旧関係は、25・27号住居跡に切られ、47・48号住居跡を切っている。南北に主軸をもつもので、規模は東西5.13m、南北5.13mほどの隅丸方形を呈する。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。周溝はみられない。柱は、4本主柱穴である。東壁の北東隅寄りと、南壁の中央付近にベッド状造構がみられる。また、南壁の南東隅寄りに貯蔵穴がみられる。西壁の柱穴間に土手が、また北壁の柱穴間に中央が途切れている土手がみられる。炉は住居跡の中央付近にあり、地焼炉である。

遺物は土師器の折り返し口縁甕(図版第68-14)、器台(同15)がある。

41号住居跡(図版第40)

B・C16グリッドで24・27号住居跡と重複して確認された。新旧関係は、いずれの住居跡によっても大きく切られ、住居の南西隅がわずかに残るにすぎない。周溝、ベッド状造構はみられない。南壁寄りに、高さ5cmほどの土手がみられ、この土手の北側に地焼炉がみられる。

遺物は、土師器片が出土しているが、図化できるものはなかった。

42号住居跡(図版第40・69)

Z12~13グリッドで20・36・39号住居跡と重複して確認された。新旧関係は、いずれの住居跡によっても切られている。南北に主軸をもつものと考えられるもので、規模は南北5.16m、東西2.91m(現存部)ほどの隅丸方形ないし長方形を呈するものと思われる。床は堅くたたき締められ、多少の凸凹がみられる。周溝、ベッド状造構は現存部分では認められない。柱穴は4本主柱穴と考えられ、西壁側の2本が確認された。西壁の南西隅寄りに、高さ5cmほどの土手が西壁から住居跡の内側に突き出ている。南西隅には貯蔵穴と考えられる長方形の穴が掘られて、その北東側に地焼炉がみられる。

遺物は、土師器のS字壺(図版第69-1)がある。

43号住居跡(図版第41)

G18グリッドで35・46・53号住居跡と重複して確認された。新旧関係は、いずれの住居跡によってもそのほとんどを切られ、壁際の一部が残っているにすぎない。このため平面形は把握できない。南北に主軸をもつ住居跡と考えられ、床は堅くたたき締められ、平らである。

遺物は、土師器片が出土しているが図化できるものはなかった。

44号住居跡(図版第41・69)

D・E・F17~19グリッドで35・45・46・52号住居跡と重複して確認された。新旧関係は、46号住居跡を切り、35・45・52号住居跡に切られている。南北に主軸をもつもので、規模は東西5.13m、南北5.66m(いずれも現存部)である。隅丸方形ないし長方形と考えられる。床は堅く

たたき締められ、ほぼ平らである。柱穴は4本主柱穴であると思われるが、西壁の2本が確認された。周溝はみられない。北壁と東壁沿いに、高さ8cmほどのベッド状造構がみられる。住居跡中央やや北東寄りに枕石を持つ地焼炉がある。

遺物は、土師器の口唇部に刻み目をもつ甕(図版第69-2)、S字甕(同3)、高坏(同4)などがある。

45号住居跡(図版第42・69)

C・D E18~19グリッドで33・44・49号住居跡と重複して確認された。新旧関係は、33・45号住居跡を切り、49号住居跡に切られている。南北に主軸をもつもので、規模は東西5.57m、南北4.55m(現存部)ほどの、隅丸方形を呈するものであろう。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。柱穴は、4本主柱穴であろう。東壁沿いに高さ5cmほどのベッド状造構がみられ、また東壁際に周溝もみられる。北東隅が一段低くなっている、中に貯蔵穴であろう方形の穴が掘られている。炉は住居跡の中央やや北東寄りにみられ、地焼炉である。また炉の近くの北西には偏平な石が置かれていた。

遺物は、土師器の壺(図版第69-5、6)、S字甕(同7)、小型壺(同8)、直口壺(同9)、高坏(同10、11)などがある。

46号住居跡(図版第43)

E・F17~18グリッドで35・43・44・52・53号住居跡と重複して確認された。新旧関係は43・53号住居跡を切り、44・35・52号住居跡に切られている。南北に主軸をもつもので、規模は5.51m、南北4.1m(現存部)ほどの隅丸方形ないし長方形を呈する。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。柱穴は4本主柱穴と思われるが、北壁側の2本が確認された。周溝はみられない。高さ5cmほどのベッド状造構が、東壁と南壁に沿ってL字状にみられる。炉は住居跡の中央付近にあり、地焼炉である。

遺物は、土師器片が出土しているが図化できるものはなかった。

47号住居跡(図版第44・69)

C・D13~14グリッドで27・40・48・54号住居跡と重複して確認された。新旧関係は、48・54号住居跡を切り、27・40号住居跡に切られている。南北に主軸をもつもので、規模は東西6.39m、南北7.08mほどの隅丸長方形を呈する。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。柱穴は4本主柱穴である。ベッド状造構が北壁の中央付近を境にして、高さ5~10cmほどで東壁と西壁沿いにL字状に造られている。南壁側には柱穴付近から壁に沿って土手がみられる。そして南壁際には2段に掘られた長方形の貯蔵穴がみられる。周溝はみられない。炉は住居跡中央やや北寄りにみられ、床を僅かに掘り込んだ地焼炉である。

遺物は、土師器のS字甕(図版第69-12)、高坏(同13)などがある。

48号住居跡(図版第45・70)

B・C13~14グリッドで27・28・40・47号住居跡と重複して確認された。新旧関係は、いずれの住居跡によっても切られている。南北に主軸をもつもので、規模は東西5.48m、南北6.18mほどの、隅丸長方形を呈する。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。壁際には周溝が巡っ

ている。柱穴は4本主柱穴である。北壁と東壁に沿って「コ」の字状に、また南壁の中央あたりから西壁に向かってベッド状造構がみられる。このうち北壁沿いのところには、一段低い長方形の区画がみられる。南壁の中央あたりから東壁にかけて、高さ5cmほどの土手がみられ、壁際に方形の貯蔵穴が掘られている。また、南壁中央付近のベッド状造構と土手との間に梯子受けとみられる小穴がある。炉は住居跡の中央やや北寄りにみられ、地焼炉である。なお、枕石様に、粘土で高まりが造られている。

遺物は、土師器の甕(図版第70-1)、S字甕(同2)、台付甕(同3)、鉢(同4)、器台(同5)などがある。

49号住居跡(図版第46・70)

C・D17~18グリッドで45・52号住居跡と重複して確認された。新旧関係は、いずれの住居跡をも切っている。南北に主軸をもつもので、規模は東西4.72m、南北4.99mほどの隅丸方形を呈する。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。柱穴は4本主柱穴である。周溝はみられない。高さ5cm前後のベッド状造構が南壁の柱穴付近から、壁沿いに北壁まで「コ」の字状にみられる。また南西隅の柱穴から東壁に向かって高さ5cmほどの土手がみられる。炉は、ほぼ中央にみられ、床をわずかに掘りくぼめた地焼炉である。

遺物は、土師器の有段口縁甕(図版第70-6)、甕(同7)、S字甕(同8、9)、高坏(同10)などがある。

50号住居跡(図版第47・70)

Z・A・B17~19グリッドで37・51号住居跡と重複して確認された。いずれの住居跡によつても切られている。なお、33号住居跡との切り合い関係は不明である。南北に主軸をもつもので、規模は東西6.3m、南北5.2m(現存部)ほどの隅丸方形ないし長方形を呈する。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。柱穴は4本主柱穴で、直径15~30cm、深さ25~60cmほどである。周溝はみられない。高さ数センチメートルのベッド状造構が、東西および北壁にかけて柱穴付近から見られ、現状では「コ」の字状を呈している。炉は、北東の柱穴寄りにみられ、床を掘りくぼめた地焼炉である。

遺物は、土師器の折り返し口縁甕(図版第70-11)、二重口縁甕(同12)、甕(同13)、S字甕(同14、15)、台付甕(同16)、碗(同17)、高坏(同18)などがある。

51号住居跡(図版第48・71)

Z・A・B16~18グリッドで23・24・37・50号住居跡と重複して確認された。新旧関係は、全ての住居跡に切られている。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。柱穴は4本主柱穴で、直径40cm、深さ50cm前後である。周溝はみられない。高さ数センチメートルのベッド状造構が、東西および北壁にかけて柱穴付近からみられ、現状では「コ」の字状を呈している。炉は、北東の柱穴寄りにみられ、床面を二段に掘り窪めた地焼炉である。

遺物は、土師器の二重口縁甕(図版第71-1)、直口甕(同2)、高坏(同3)、甕(同4)などがある。

52号住居跡（図版第49～51・71・72）

D・E16～18グリッドで44・46・49号住居跡と重複して確認された。新旧関係は、44・46号住居跡を切り、49号住居跡に切られている。南北に主軸をもつもので、規模は、東西4.98m、南北4.61mの、やや矩形の隅丸長方形を呈する。床は、堅くたたき締められ、ほぼ平らである。柱穴は、4本主柱穴であり、直径15cm、深さ50cm前後である。本住居跡の柱穴のうち、北西と南東の位置のものには、柱の部材が炭化して残っていた。この柱の部材は丸太である。このため柱の構築状況を確認するため、柱間を東西に切断して観察した。この結果、4本とも柱穴の挿入された状況が明確にとらえられ、柱穴の太さにそれぞれ土層の変化がみられた。柱は、荒掘をしたのち立ち上げ、土を埋めこみ、柱の脇まで床面を貼っている様子が分かる。西壁から北壁沿いに高さ5cmほどのベッド状造構が、柱穴付近から壁際にかけて造られている。南東隅付近は回りよりも一段低まって、その中に貯蔵穴と考えられる長方形の穴が掘られ、その北側には、粘土塊が東壁に接してみられる。炉は、北東の柱穴寄りにみられ、床面を僅かに掘り込み、かつ枕石を設置した地焼炉である。なお、炉の北側に、偏平な台石と思われる石がみられる。

遺物は、貯蔵穴の周辺に土師器の台付甕（図版第71-5、6）、甕（図版第72-1）、高杯（同3）、ベッド状造構の南壁中央あたりに椀（同2）が、また、北壁の西寄りにムシロ縞石器（図版第73-17～27）がみられる。このほかにS字甕（図版第71-7）がある。なお、台付甕の口縁形態は、S字状を呈しておりS字甕の影響を受けたものであろうか。

53号住居跡（図版第52・72）

E・F・G17～18グリッドで35・43・46号住居跡、5号土壙と重複して確認された。新旧関係は、43号住居跡を切り、35・46号住居跡、5号土壙に切られている。南北に主軸をもつもので、規模は東西4.88m、南北5.07mほどの隅丸方形を呈する。床は堅くたたき締められ、ほぼ平らである。柱穴は4本主柱穴であり、このうちの3本が確認された。周溝、ベッド状造構はみられない。南東隅あたりが、床より一段低くなってしまっており、その中の南壁寄りに長方形の貯蔵穴がみられる。炉は住居跡の中央やや北東寄りにみられ、床面を掘り窪めた地焼炉である。焼土面に土師器甕の破片がみられた。

遺物は、土師器の甕（図版第72-5）、手捏土器（同6）、それに覆土からであるが鉄鏃（同4）などがある。

54号住居跡（図版第53・72）

B・C14～15グリッドで27・28・40・47号住居跡と重複して確認された。いずれの住居跡によても切られており、ちょうど27号住居跡のベッド状造構の直下あたりに存在する。南北に主軸をもつもので、規模は東西3.24m、南北3.13m（現存部）ほどの隅丸方形横円形を呈する。南壁の東寄りに壁に沿って土手がみられ、中に梯子受けの小穴が掘られている。また、北西隅近くに長方形の穴が掘られている。住居跡の大きさから、また位置的にも多少の違和感はあるが、とりあえず貯蔵穴と考えておきたい。

遺物は、土師器のS字甕（図版第72-7、10）、台付甕（同8）、高杯（同9）などがみられる。このうち前二者は南壁の中央付近、後者は貯蔵穴の中からの出土である。

第2節 溝

1号溝(図版第54・55・74)

遺跡の中央東端にあり、26・30号住居跡を切っている。東北東から西南西方向に流れ、まず2号溝、そして5号溝と順次合流する。5号溝が最も古く、次に1号溝、最も新しいものが2号溝である。溝は底が緩やかに落ち込み、幅2.2m、深さ0.65mほどの規模で、幅の広い割には浅い溝といえる。溝の中より、土師器の壺(図版第74-4)、小形壺(同5、9)、器台(同7、8)、直口壺、甕(同6)、高坏(同10~12)などが出土している。このうち前三者が古墳時代前期、後二者が古墳時代後期の所産である。

2号溝(図版第54・56・75)

遺跡の中央東端にあり、当初は北北東から南南西に向かって流れ、1号溝に合流してからは1号溝の流路の中を流れる。底が緩やかに落ち込むもので、幅は1.9m、深さ0.30mほどの小規模な溝である。

遺物には、古墳時代前期の土師器壺(図版第75-4~6)、高坏(同2)、甕(同3)、古墳時代後期の土師器甕(同1)、平安時代後半以降の土師器皿(同11~13)、須恵器長頸瓶(同17)、平安時代末期の土師器杯(同14)、柱状高台坏(同8~9)、皿(同15)、白磁鉢(同18)、それに平安時代と考えられる土鍾(同16)などがある。

3号溝(図版第54・55・75)

遺跡の中央あたりにあり、4・5・6号溝、2・3・13・14号住居跡などと重複している。いずれの溝及び住居跡をも切っており、他に流入する溝はなく、単独の流路をもつ溝のようである。最初は東から西に向かって流れ、遺跡の西部で大きく南側に折れまがり向きを変える。溝の断面はU字状を呈するものである。幅3.3m、深さ1m前後を測る。

遺物には、古墳時代前期の土師器大甕(図版第75-20)、甕(同21)、高坏(同22)、器台(同23)、平安時代後半頃の坏(同25)、平安時代末期頃の土師器杯(同24)、白磁鉢(同19)などがみられる。

4号溝(図版第54・56・58・76~78)

おおよそ遺跡の北側から南側に向かう細い溝である。3・5号溝と10号住居跡と重複する。10号住居跡を切り、3号溝に切られている。5号溝を切り込んでいるが、5号溝に流れ込むように接続しているものである。他の溝と趣が違っており、幅0.95m、深さ0.55mほどの断面V字状の小規模な溝である。

遺物は第1層から完全な形に近い土器や、土器の大型破片が大量に確認され、それ以下の層では極端に少なくなり、また細片のものがほとんどであった。加飾壺(図版第76-1)、壺(同2~4)、甕(5、6、10、11)、台付甕(同9、10)、S字甕(同8、図版第77-1~3)、甕(同4)、鉢(同5)、小型壺(同6~9)、直口壺(同10)、高坏(同11~14、図版第78-1~2)、器台(同3~6)などであった。

5号溝(図版第54・57・78~105)

遺跡の中央当たりにあり、おおよそ東北東から西南西に向かって流れる大溝である。1・2・3・4号溝と重複する。1・2・3号溝に切られ、4号溝は流れ込むように接続された溝である。溝の上部には1・2号溝の流路がみられる。規模は幅5m、深さ1.9mほどの、本遺跡における最大規模の溝である。この溝の断面はV字状に掘りこまれ、さらに底に至ってU字状を呈している。ただし、U字状の部分については、流路が侵食されてできたものと考えられる。この大溝からは夥しい遺物が発見され、本遺跡で発見された遺物の7割近くを占める状態である。またその出土層位は、28層付近から底の部分での出土がほとんどを占めている。そして取りあげの段階で便宜上28層から20層あたりを上部、28~41層あたりを中部、41~49層あたりを下部として取り上げた。この位置からの出土遺物は、縄文時代の土偶(図版第105-1)、弥生時代の斐形土器(図版第104-1)などが少量みられる程度で、そのほとんどが古墳時代前期の土師器で占められていた。なお、20層より上には新しい時期の溝の流路の流れ込みが確認されており、このため平安時代ころの土師器などがみられる。

遺物には土師器の加鉢壺(図版第78-7、図版第79-1~2、図版第80-5~8)、有段口縁壺(図版第79-3~8、図版第80-1~3)、棒状浮文の有段口縁壺(図版80-4)、折り返し口縁壺(図版第81)、單口縁壺(図版第82、83、84-1~9)、口唇部に刻み目をもつ壺(図版第84-10、11、図版第104-2~16)、幅広の口縁部の壺(図版第87-1、2)、折り返し口縁壺(図版第87-3~11)、單口縁壺(図版第88、89)、S字壺(図版第90、91、92-1~4)、台付壺(図版第92-5~8)、小形壺(図版第93-1~5)、榙(図版第93-6~12)、鉢(図版第93-13~18、図版第94-1~14)、甑(図版第94-15~20、図版第95-1~11)、直口壺(図版第95-12~15、図版第96-1~2、図版第97-4、5、10)、小形壺(図版第96-3~12、図版第97-1~3、6~9、11~17)、高杯(図版第98、99、100、101-1~10)、器台(図版第101-11~21、図版第102-1~6)、手捏土器(図版第102-7~24)、片口(図版第103-1)、台付榙(図版第103-2)、杏形土器(図版第103-3)、土製紡錘車(図版第105-2)、土玉(図版第105-3)、土製鐵(図版第105-4)と考えられるものがある。また拓影として掲載しものものは、装飾の見られる壺、壺(図版第104)類である。このほか縄文時代中期の土偶や縄文土器などがみられる。

6号溝(図版第54・105)

3号溝が南に向きを変える部分から西側に向かって流れる溝である。幅0.8m、深さ25mほどの小規模な溝である。

遺物は平安時代末頃の土師器壺(図版第105-5、6)と灰釉陶器高台壺(同7)などがみられる。

第3節 土壙

1号土壙(図版第59)

H・I 17グリッドで3・4号住居跡と重複して確認された。2軒の住居跡によって切られている。細長い長方形を呈する。長さ3,75m、幅0,70m、深さ0,75mほどで、底は中央付近が高くなっている。遺物は確認されなかった。

2号土壙(図版第59)

H・I 17～18グリッドで3・7・14号住居跡と重複して確認された。いずれの住居跡によつても切られている。細長い溝状で、長さ5,55m、幅0,5m、深さ0,4～0,96mほどである。底は2箇所で高くなっている。遺物は確認されなかった。

3号土壙(図版第59)

G 6～7グリッドで4号溝と重複して確認された。新旧関係は、4号溝を切っている。長径1,08m、短径0,86m、深さ0,45m程の楕円形に近い形態である。中にさらに一回り小さい土壙が掘られている。遺物は確認されなかった。

4号土壙(図版第59)

Z 4グリッドで34号住居跡と重複して確認された。新旧関係は、本土壙が住居跡を切っている。長さ1,23m、幅0,84m、深さ0,5mほどの長方形を呈する。遺物は確認されていない。

5号土壙(図版第59・74)

F 16～17グリッドで53号住居跡と重複して確認された。新旧関係は、53号住居跡を切っている。長さ0,85m、幅0,48m、深さ0,15mほどの不整形の長方形を呈する。

遺物は平安時代末期の土師器壙(図版第74-1、2)、高台付壙(同3)などがみられる。恐らく墓壙であろう。

第4節 その他

グリッドから鉄製品が出土している。いずれも刀子でI 19グリッド(図版第105-8)、J 15グリッド(同9)からの出土である。

また、各グリッドから縄文土器片(図版第106)が出土している。1～4が縄文時代前期、5～21が縄文時代中期、22～27が縄文時代後期に属するものであろう。

第4章 各 説

第1節 出土土器と遺構の時期

1 住居跡

西田遺跡の住居跡より出土した土器は、それぞれの住居跡から良好な形で、かつ、まとまった数量で確認されたものばかりではない。むしろ検討できる資料の皆無、あるいは微々たる数のものが大半を占めているといってよい状況の中にあり、これから住居跡の時期を決定することは非常に難しいものがある。といって避けて通る訳にも行かず、限られた資料からではあるが、土器の縦年位置付けと住居跡の時期について考えてみたい。

西田遺跡の住居跡から出土した土器は、大きく見ればほぼ一時期の中に納まるものである。特に本遺跡から顕著に確認される愛知県伊勢湾地域に出自を求める口縁部がSの字状を呈するS字状口縁台付壺(以下S字壺)が有効な指標となるものといえる。このS字壺は現在0、A~Dの5類に区分され、さらに各類が細別されているなかで、0類からD類へ変遷することが確認されている(赤塚次郎 1990『週間遺跡』ほか)

これに従えば本遺跡の住居跡で最も古いS字壺の例は、54号住居跡の口縁部に刺突文がみられず、肩部に横走する刷毛目があり、かつ頸部調整のないB類である。この手はこの住居跡のみのようである。この住居跡からはこのほかに単純口縁(以下単口縁)の台付壺、半球形の壺身をもつ高壺が確認されている。なお本住居跡の平面形態は壁の縁線が丸みを帯びた隅丸方形を呈しており、同様な形態をとる29号住居跡も良好な土器資料はないものの、住居跡形態から類推すればB類の時期であろう。

C類はB類に似た形態で、B類に頸部調整が加わったものである。次のD類を伴わず単独と考えられるものに25・48号住居跡例があげられるが、B類同様に少ない。これに組み合う器種としては、単口縁台付壺、単口縁壺、折返し口縁壺、鉢、器台などがある。住居跡の平面形態は壁の縁線がほぼ直線状を呈する隅丸方形である。

C類と次のD類とが一緒に確認できる住居跡としては、24・31号住居跡がある。やはり数量的には少ない状況にある。住居跡の平面形態は、C類の時期と同じ形態であり、以後踏襲される。これに組み合う器種としては単口縁壺、鉢、半球形の壺身をもつ大小の高壺、甑、直口壺などがである。

D類はC類の肩に横走する刷毛目を無くしたもので、本遺跡の住居跡で最も多く確認される形態である。D類のみ認められる住居跡としては、1・6・20・22・27・30・32・35・37・39・45・49・50・52号住居跡がある。これらの中には資料的に少ない住居跡もみられ確実とはいえないが、本遺跡の最も栄えた時期を表しているのものと捉えることができる。これに組み合う器種として単口縁台付壺、単口縁壺(平底)、単口縁壺、折返し口縁壺、有段口縁壺、底部形態が平底なのか否か不明な大型の壺(図版70-13)、甑、半球形の壺身をもつ大小の高壺、脚部が棒状の高壺、器台、副部下間に小孔をもち、竈のような機能を考えられる小形壺、小形丸底壺、直口壺、碗、小型手握土器などがある。

以上、S字壺を基準にして作出の確認される器種をみてきたが、これらを表にしたのが第4図

である。これまでと重複する部分もあるが、編年表に従って若干の検討をしてみたい。

I期はS字型B類の時期で、土器の組み合わせについては資料が少なく明確にならないが、住居跡の形態からは壁の線の平面形態が曲線を取るもので次の時期との間に大きな違いが認められ、時期を画するものと捉えられる。ただし住居跡の規模は小規模のようである。

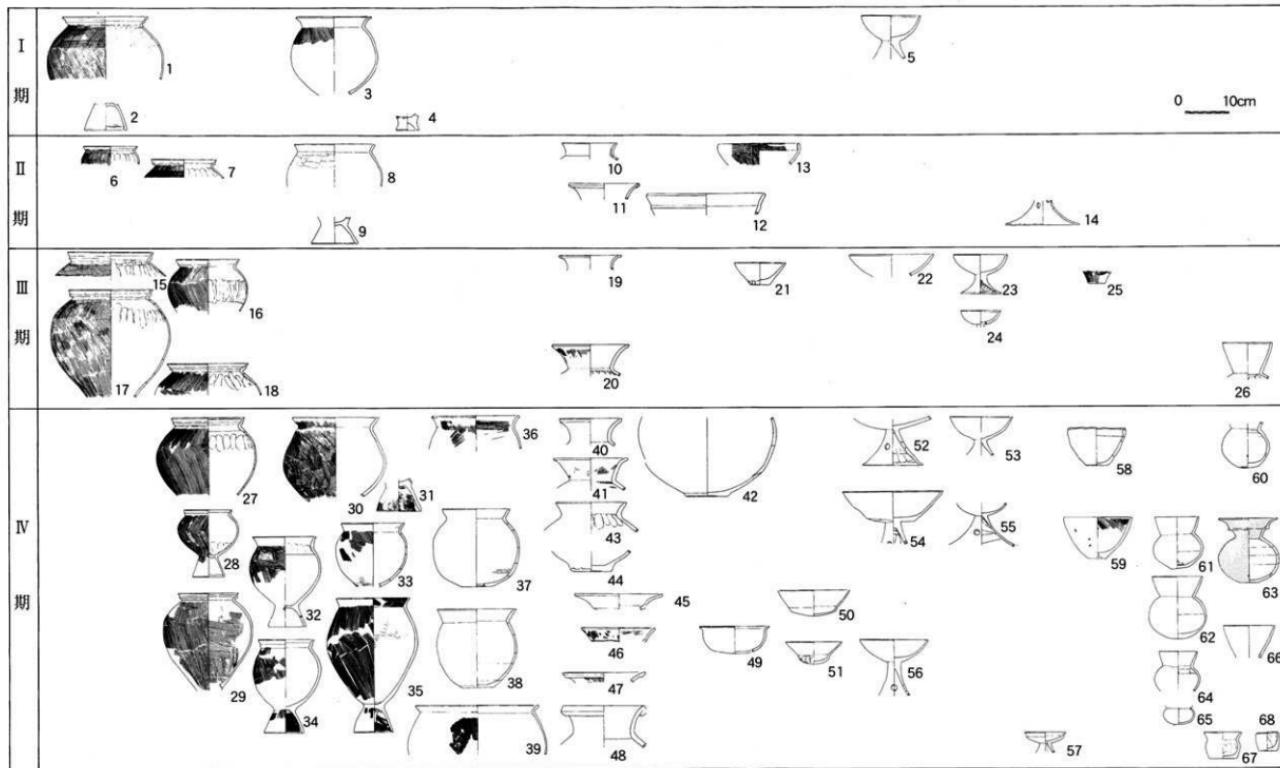
II期はS字型C類の時期である。前後の時期の台付壺が刷毛目整形を基調とするのに対し、ここでは範削り整形(第4図8、9)のものがみられる。

III期はS字型C類とD類とが重なる時期としたが、基本的にはD類に入るのであろう。台付壺については確認されていないが、前後の状況から存在することは間違いない。高杯については、杯身の大きさで大小の2形態(同22、23)がみられ、大きさによる使い分けが考えられる。この点が前段階にもあったのか否か不明であるが、次の段階には引き続き存在することが確認できる。壺は上部を大きく欠いているが底部形態から三角形を呈するもので、口縁部形態が単口ないし折り返し口縁のものであろう。このほか直口壺が確認できる。

IV期はS字型D類の時期である。S字型の形態は球胴(同27)から縦に細長くなる傾向(同29)がみられ、これに伴い単口縁台付壺の胴部(同35)も細長くなるようである。この時期には平底の単口縁壺(同37、38)が確実にみられるが、前段階からのもののか否か本遺跡の中では分からぬ。高杯は前段階同様に大小の2形態が引き続き確認される。さらに高杯には本段階で脚部が棒状化する形態(同56)のものがみられるようになる。また同伴する単口縁台付壺(同34)の口縁部形態にS字型の影響を受けたような状況もみられ、高杯の脚部の棒状化とともに来るべき新しい時期の到来を考えさせるものである。前段階に引き続き壺がみられる。口縁部はいずれも単口縁のものでこれがS字型D類の段階の基本的形態と考えられる。壺にこのほか5号溝から口縁部形態が折り返し口縁のものが確認されている。単口縁形態が溝の上部を中心に出土しているのに対して、折り返し口縁のものは溝の下部を中心とした出土が捉えられており、前段階の形態といえよう。厳密に言えば折り返し口縁の壺はS字型B～C類の段階までの形態ではないかと考えられる。この他この時期は小型壺や直口壺が顕著に認められるようである。特に胴部下端に小孔を穿った形態(同60、63)は本時期からのものと考えてよさそうであり、あるいは壺のように使われたとすると須恵器との関係も出てくるのであろうか。

住居跡における土器編年について述べてきたが、S字型相互の関係を知り得る資料として54・48・27号住居跡の切り合い関係があげられる。それほど良好ではないが、54号住居跡(B種)－48号住居跡(C種)－27号住居跡(D種)といった切り合いによる変遷がとらえられ、S字型の変遷と一致するところである。なお、これら編年の年代は古墳時代前期におかれ、I～II期が4世紀中葉から後葉、III～IV期が4世紀後葉から5世紀前葉頃と考えている。

住居跡の時期について、土器編年と住居跡の切り合い関係から検討した結果は第1表のとおりである。切り合い関係、土器の確認できないもの5軒を除きI期2軒、II期6軒、III期16軒、IV期25軒である。曖昧なところも多々あるが、IV期がもっとも多く本遺跡の盛行した時期といえる。



第4図 西田遺跡土器編年表

1~5 (54号住居跡), 6, 10~12 (25号住居跡), 7~9, 13, 14 (48号住居跡), 15, 16, 19, 21~25 (24号住居跡), 17, 18, 20, 26 (31号住居跡), 27, 40~42, 52, 53, 58, 60 (1号住居跡), 28, 32 (32号住居跡), 29, 33, 50, 59, 61~63 (37号住居跡), 30, 31, 36 (30号住居跡), 34, 35, 38, 51, 56 (52号住居跡), 37, 48, 65, 68 (35号住居跡), 39, 46, 47, 49 (50号住居跡), 43, 44, 64, 66 (45号住居跡), 45 (49号住居跡), 54, 55 (22号住居跡), 57, 67, (20号住居跡)

第1表 西田遺跡住居跡時期一覧表

住居跡	時期	住居跡	時期	住居跡	時期	住居跡	時期
1号住	IV	15号住	IV	29号住	I	43号住	IV
2号住	-	16号住	IV	30号住	IV	44号住	IV
3号住	III	17号住	IV	31号住	II	45号住	IV
4号住	III	18号住	IV	32号住	IV	46号住	IV
5号住	III	19号住	-	33号住	III	47号住	III
6号住	IV	20号住	IV	34号住	II	48号住	II
7号住	III	21号住	IV	35号住	IV	49号住	IV
8号住	IV	22号住	IV	36号住	IV	50号住	IV
9号住	II	23号住	III	37号住	IV	51号住	III
10号住	III	24号住	III	38号住	III	52号住	IV
11号住	-	25号住	II	39号住	IV	53号住	IV
12号住	-	26号住	-	40号住	IV	54号住	I
13号住	II	27号住	IV	41号住	II		
14号住	III	28号住	III	42号住	III		

2 溝

溝などから出土した土器を住居跡の土器編年と照らしながら以下検討を加えてみたい。

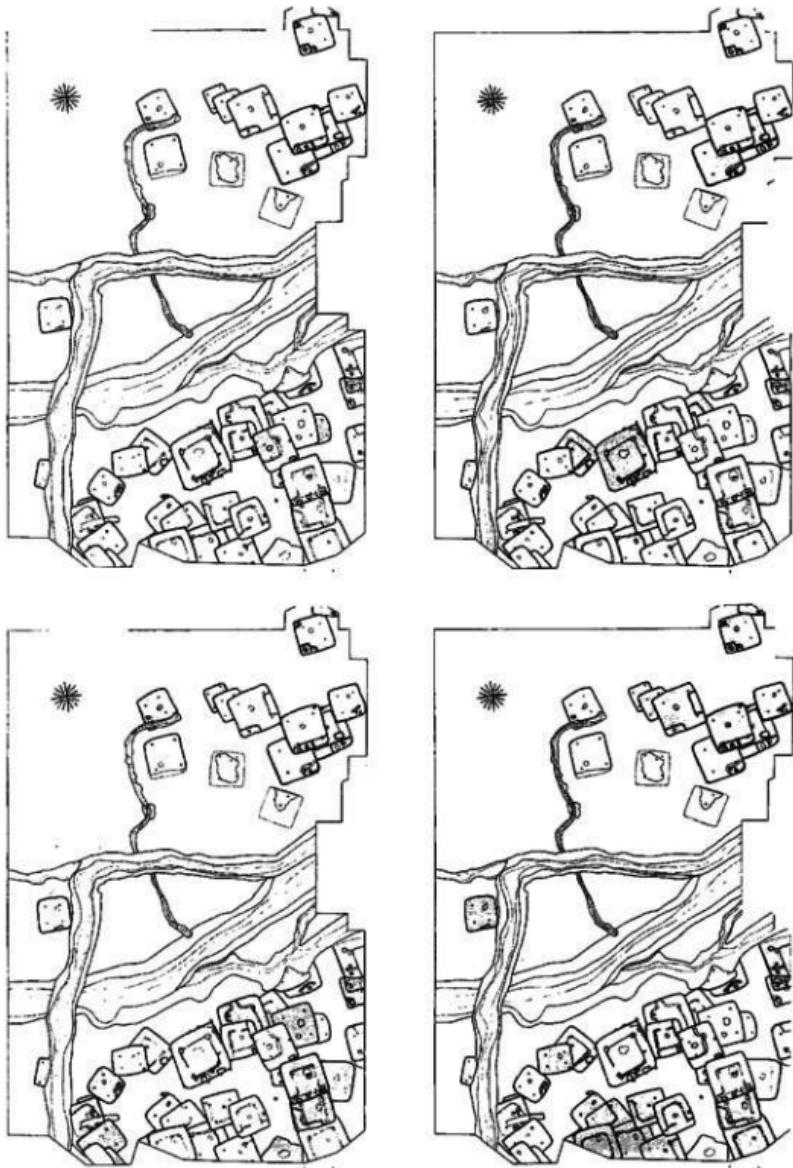
1号溝は土器から見る限り2つの時期が認められる。一つは住居跡と同様のS字甕の時期(図版第74-4、5、7~9)であり、今一つは古墳時代後期の時期(同6、10~12)である。このうち本溝は切り合い関係から後者の時期に形成されたものである。

2号溝は1号溝よりさらに時間幅のある土器が確認されている。S字甕の時期(図版第75-2~6)、古墳時代後期(同1)、それに白磁碗(同18)を含む平安時代末期頃の時期(同7~16)の3時期が確認される。このうち本溝は、切り合い関係から平安時代末期頃に形成されたものである。

3号溝は2号溝に近い時期の土器がみられる。S字甕の時期(図版第75-20~23)、それに白磁碗(同19)を含む平安時代末期(同24~25)の時期が確認されている。やはり切り合い関係から平安時代末期に形成されたものであろう。

4号溝は、S字甕の時期の10号住居跡を切って造られているが、溝の中から出土した土器はS字甕の時期に限られており、また3号溝に切られながらその先端は5号溝まで達している。何らかの重要な機能を果たすために計画的に造られた溝と考えられる。

土器はS字甕(図版第76-8、図版第77-12~13)を見る限り、D類の單一である。これからすれば他の土器も同一時期と考えて差支えないであろう。器種としてS字甕D類のほかに単口縁



第5図 西田遺跡集落変遷図

壺(図版第76-1~7)、加飾壺(同1)、單口縁台付壺(同9)、瓶(図版第77-15)、椀(同16)、小形壺(同17、20)、直口壺(同18、21)、高坏(図版第77-22~25、図版第78-26、27)、器台(同28~31)などがある。この組み合わせは同期の住居跡と同様で、高坏も大きさのうえで大小の2形態が確認できる。

5号溝は溝の上層部に中央付近で合流する平安時代末期頃の流路(1、2号溝)がみられる。しかしそれ以下はパックされた状態で、S字壺の時期の土層が厚く堆積しており、本遺跡出土土器の80%ほどを占めている状況である。土器の取り上げは上部、中部、下部と分けて行い、同一器種の破片が上部、中部、下部で接合する例もみられるなど一様でないが、全般的には上部のものがより新しく下部のものがより古いという傾向は認められた。

S字壺には住居跡でみられたB類(図版第90-5、8、9、11、12)、C類(同6、7、10、図版第92-1、2)、D類(図版第90-1~4、図版第91、図版第92-4)が認められる。量的にはB類、C類が少なくD類が半数以上を占め、住居跡で見られた傾向にほぼ近い状況をみせている。また、既に述べたが瓶にも口縁部が単口縁の形態(図版第94-15~20、図版第95-1)のほか、中・下部において折り返し口縁の形態(図版第95-2~10)が多数確認され、土器編年の傾向に近いことが分かる。これらからこの5号溝は、住居跡の存在していた期間には口を開け流路として利用され、そこに不要になった土器類が捨てられたことになろう。

このほかの器種としては加飾壺(図版第78-7、図版第80-6~8、図版第104-19、20)、有段口縁壺(図版第79-2~8、図版第80-1~3)、棒状浮文をもつ有段口縁壺(図版第80-4)、折り返し口縁壺(図版第81)、單口縁壺(図版第82、83、図版第84-1~9)、口唇部に刻目をもつ(台付)壺(図版第84-10、11、図版第104-2~16)、幅広の口縁部をもつ台付壺(図版第87-1、2)、折り返し口縁壺(図版第87-3~11)、單口縁壺(図版第88、89)、單口縁台付壺(図版第92-5~8)、椀(図版第93-6~12)、鉢(図版第93-13~18、図版第94-1~14)、小形壺(図版第96-3~12、図版第97)、高坏(図版第98~100、図版第101-1~10)、器台(図版第101-11~21、図版第102-1~6)、手捏土器(図版第102-7~24)、台付椀(図版第103-2)、片口(図版第103-1)、杏形土器(図版第103-3)などがある。さらに縄文時代の土偶(図版第105-1)、古墳時代の土製紡錘車(図版第103-2)、土玉(図版第105-3)、土製鐵(?) (図版第105-4)なども確認される。なお、これら器種の中に周辺地域から持ち込まれたと考えられるものがある。加飾壺では図版第78-7が駿河ないし西相模地域、図版第80-6、7、図版第104-19、20が東海系、二重口縁壺では図版第104-32~37が伊勢湾系のものと考えられるものである。しかし、量的には少なく、在地産の土器が大半を占めている。

6号溝は、柱状高台付皿(図版第105-5、6)などが確認され、平安時代終末期の時期のものであろう。

3 土壙

土壙は5基確認された。このうち遺物から直接時期の推定できるものは5号土壙にすぎない。それ以外は切り合い関係からおおよその時期が求められるにすぎない。

1・2号土壙は、いずれも古墳時代前期の住居跡によって切られており、これより古い時期の所産といえるが、どこまで逆上るかは不明である。

3・4号土壙は古墳時代前期の住居跡ないし溝を切って掘られており、住居跡以降の時期がもとめられる。これも、1・2号溝とは逆に実際どこまで下がるものか不明である。

5号土壙は、唯一遺物から時期の求められる土壙である。5号土壙から出土した土師器には坏(図版第74-1、2)、柱状高台皿(同3)などがみられ、時期としては平安時代終末期の12世紀後半代が考えられる。これらは副葬品と考えられるものであり、造構から人骨の確認はなかったが、形態から墓と考えるのが最も妥当といえよう。県内における平安時代の墓は、これまでの発掘調査によって確認できた例は極稀のようである。一宮町狐原遺跡において、9世紀中頃と推定されている2基の墓壙が確認されている程度であり、貴重な資料と言える。

第2節 住居跡と集落

本遺跡から確認された住居跡は、合計54軒にのぼる。これらの住居跡は単独で確認されたものも6軒ほどみられるが、残りは全て幾つかの住居跡と重複した状況で確認されている。これは数時期にわたって立て替えなどが行われた結果であり、一時期に存在したであろう住居跡数は当然これ以下の数字となる。住居跡から得られた土器資料が乏しいため明確な時期の判断を下せないものもあるが、以下本集落跡の変遷などについて若干の検討を行ってみたい。なお、5号溝は、最も古い住居跡と同時の存在が確認されている。

I期の住居跡は、5号溝の北側地域からは確認されなかった。29号住居跡と54号住居跡はともに5号溝の南側地域からの確認であり、この限りにおいては本集落はまず5号溝の南側を中心に建設された集落と考えられる。

II期になり5号溝の北側地域において34・31号住居跡が確認され、この時期に集落の拡散した状況が窺える。といっても34号住居跡と31号住居跡とは重複しており、基本的には同時存在是不可能であり、いずれか1軒の存在となる。もちろんこの時期に5号溝の南側地域においては、9・13・25・41・48号住居跡が確認されている。一部で重複する住居跡もみられるが、やはり南側地域を中心にした集落を捉えられる。

III期とした時期は、住居跡がS字型のC・D類の両者を出土する住居跡で、前後の両者を分離する過渡的時期といえる。ここでは北側地域で2軒、南側地域で15軒ほどの住居跡が確認されている。南側地域のものは重複するものもあるが、この段階でも引き続き前段階同様に南側地域に優位性のある集落であることが確認できる。

IV期は26軒ほどが確認されているが、北側地域と南側地域の比率は北側地域で6軒、南側地域で20軒と前段階を踏襲している。従って、本集落は東北から南西方向に伸びる微高地に掘られた5号溝に沿って形成された集落跡であり、かつ終始南側地域が中心に置かれていたことが想定できる。なお、III・IV期とも同時存在は重複の関係から、先程の数字を下回るのは当然のことである。

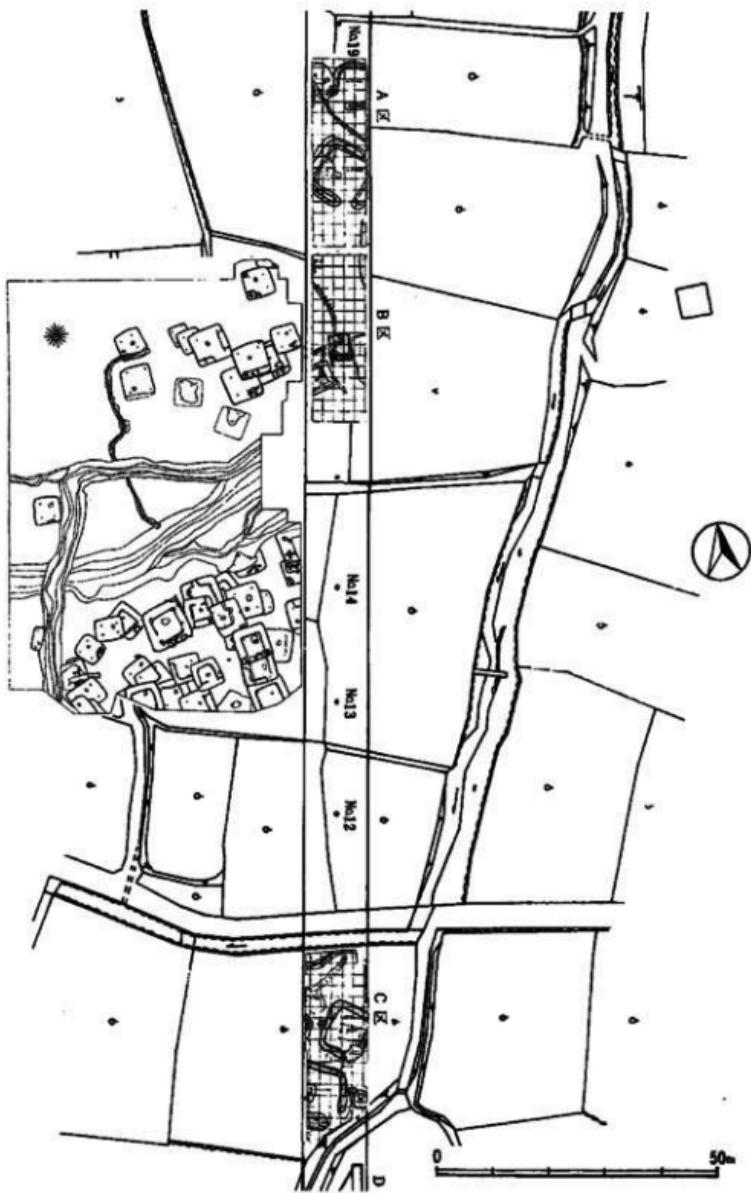
以上、本集落の変遷について検討を加え、数のうえから南側地域の優位性を抽出してきたが、この点については住居跡の規模のうえからも肯定できるのではないか。北側と南側地域との住居跡の大きさは、相対的に見ても南側地域が優位にあり、また最大規模の住居跡も南側地域に存在しているのである。

次に本遺跡の住居跡の中において、特徴的につか色濃くみられるベッド状遺構について考えてみたい。まず、ベッド状遺構の形態としては、L字状、コの字状、一の字状の3形態を基本的形態として、他はこれらの変形と考えられるものである。次にベッド状遺構の住居跡に占める割合は、54軒中20軒において確認されており、比率としては37%、およそ3軒に1軒の割合となる。また、地域別では北側地域が約28%、南側地域が42%の存在率で、ベッド状遺構を持つ住居跡も南側地域が多く、また併せて住居跡の規模もベッド状遺構をもつ住居跡の規模が大きい点からも、南側地域に優位性のあった集落と捉えることができる。その存在状況は、北側地域では18・22・31・34号住居跡、南側地域では23・24・37・50号住居跡、9・25・27・40・47・48号住居跡、35・44・45・46・49・52号住居跡といったごく限られた地域にブロック状に確認できる。そしてこれらブロック内で、重複関係をもちながら連続と造り続けられていることが確認できる。また、南側地域の3ブロックはそれぞれが近接、一部で重複した位置関係にあり、さらに大きな一つのまとまりをみせている。おそらく、この3ブロックを核とした集落であり、短期間にうちに何回もの立て替えのなされたことを重複関係が示しており、この場所が集落内において重要な位置を占めているものと考えられる。

他の住居跡は今後厳密な先後関係の位置づけをしなければならないことは言うまでもないが、それでも相対的にみた場合ベッド状遺構をもつ住居跡を取り囲むような状況で、しかもベッド状遺構をもつものと、もたないものとの住居跡の規模についてもやはり相対的であるが違いが認められるようである。言い換えればベッド状遺構をもつ大規模住居の回りにやや小規模な住居跡が追従する形態と捉えることができる(第3図)。

このような大規模の住居跡を小規模の住居跡が取り囲むような形態の存在理由を考えると、これらが集落内における階層制を、あるいは家族構成などを表しているものと考えることもできるのである。すなわちベッド状遺構をもつ住居跡が、集落内における有力者の階層の存在を示しているものと結論してもよいのではないだろうか。本遺跡におけるベッド状遺構を持つ住居跡の出現はⅡ期の時期からみられ、Ⅲ期、Ⅳ期と引き続きその存在が確認できる。Ⅱ期の時期に本遺跡最大の住居跡でかつベッド状遺構を持つ25号住居跡が南側地域に造られ、併せて北側地域にやはりベッド状遺構をもつ34号住居跡が造られる。34号住居跡は、南側地域の有力者の居住空間が手狭になったのであろうか、家族構成などにおいて新たな地域を確保する必要性に迫られ、増やされた地域と考えることもできる。なお、この時点ではまだ取り巻きの小規模な住居跡は顕著ではないが、次の段階以降になると顕在化していくようにみうけられるのである。いずれにしてもベッド状遺構をもつ、4ブロックの住居跡を中心に成り立つていた集落と考えられる。

山梨県下においてベッド状遺構を持つ住居跡なし集落跡の確認されている遺跡は未だ少なく、韮崎市坂井南遺跡、同立石遺跡、柳形町村前東A遺跡、中道町立石遺跡、同米倉山B遺跡などの遺跡で多少確認されているに過ぎない。これらは整理途上にあり明確な結論をだせないが、集落内に1、2軒程度と少ないようである。韮崎市立石遺跡6号住居跡は、縁線がやや波状をみせるベッド状遺構がほぼ四周の壁を全周する形態でみられる。出土土器のS字甌は全てD類の形態に限られており、西田遺跡のⅣ期にあたる。6号住居跡の周囲には同時期の住居跡1軒が存在し



第6図 西田遺跡住居跡と方形周溝墓位置図

ているのみで、取り巻き状況までは確認できない。米倉山B遺跡39号住居跡のベッド状遺構は、L字形を呈するものである。出土したS字甕はD類と考えられるもので、やはり西田遺跡IV期の時期にあたる。垂崎市坂井南遺跡19号住居跡は入り口部の施設かもしれないが、南壁の中央付近に長方形のベッド状の施設がみられる。S字甕の出土がなく時期は明確にならない。他の遺跡の住居跡については前述のような訳で明確にならず西田遺跡との比較は今後有待より他はないが、少なくとも西田遺跡期の段階には数の多少はあるにしても、ベッド状遺構が県内各地の集落内に見られることが確認できる。この中で集落内における特定的な状況を抽出できるのは西田遺跡のみであるが、西田遺跡のこの状況は前述のように有力者層を表しているものとみてよいであろう。

集落跡と関係ある遺構として方形周溝墓があげられる。西田遺跡においても前年度に実施された1次調査において、東側の近接した場所からその存在が確認されている。集落の北側に2基(第1・2号方形周溝墓)、南側に2基(第3・4号方形周溝墓)の合計4基がそれらである。これら方形周溝墓はS字甕でみると、1・2号方形周溝墓がD類、4号方形周溝墓がB～D類の時期である。3号方形周溝墓はS字甕からの直接な確認はできないが、甕の底部などの形態からすれば同時期の所産と考えられる。従ってこれら方形周溝墓はS字甕のB～D類の時期前後に造られたもので、今回の調査で確認された住居跡、5号溝の時期と全く重なることになる。一方、この地域は周辺において前期古墳の存在が現在まで全く確認されていない。また、今後も確認される可能性の極めて小さい地域とも考えられている。とすれば、これら方形周溝墓に葬られた人物は、集落内の人物とみるのが極普通の考え方だろう。幸いにも本集落跡内には、4ブロックから有力者層の住居と考えられるベッド状遺構を伴った住居跡が確認されており、これら4ブロックの長が方形周溝墓の主とみるのは短絡的すぎるであろうか。県内では未だ確認されていないが、全国でこの時期頃の首長居館が相当数確認され、古墳との結び付きが指摘されている。古墳および居館の確認されていないこの地域において逆にこのことは、方形周溝墓が集落内の有力者層の一般的墓制であることを強く示唆するものと考えてみたい。従ってこれまで県内で確認されている方形周溝墓のほとんどが、集落単位の枠を出ていないことを再確認することができる。今後、県内の前期古墳との関係、さらには周溝墓はもちろん低墳丘古墳(周溝墓に近く、副葬品も須恵器と鉄刀ないし剣などと貧弱な感をもつ古墳)などとの関係について検討が必要となってこよう。

第3節 編物石

本遺跡の17・52号住居跡などから、同じような形態、大きさの縦長の礫がまとまって確認されている。石材は砂岩、花崗岩、安山岩、流紋岩、千枚岩など多様であり、これといって石材にこだわって使われた様子はみうけられない。また、これら石材は遺跡周辺の河川で容易に入手できるものであり、こだわっているのは“縦長の礫”という一点にあり、これは使いがってによる選択の結果であろう。

17・52号住居跡から出土した礫を観察すると17号住居跡出土品11点中の2点、52号住居跡出土品11点中5点に縦長の辺の中央当たりの片側ないし両側に人工的な抉りがみられること、52号住居跡のようにまとまって確認される例が多いことから、抉りのないものも含めて石の道具であることが確認でき、さらにそれは多数の数で成立立つ道具といえる。このような形態の石器は、これまでにムシロ編石器とか、編石とかいわれているものである。

このような縦長の礫を使った道具はつい最近まで見られたもので、俵や、天秤棒の両端に吊り下げて農作物などを運搬するのに使われ山梨県の東八代郡下で“てれん”と呼ばれた収納容器などを作る時に使われた道具の一部である。二股の馬の上に横棒を渡し、縦長の礫に俵などの芯となる繩紐を巻き付け一か所につき2個一組として、複数組を横棒に取り付けワラを留めて編んで行くものである。

縦長の礫は芯紐を巻き付ける一方で、俵などを編む重りとなるものである。17号住居跡のものは最も軽いものが432 g、最も重いものが663 g、平均で523 gである。なお、図版第73の10、11は炉の枕石であるが形状、大きさ、縦長の辺の中央あたりに抉りがみられるなどから編物石を再利用したものと考えられる。一方の52号住居跡のものは最も軽いものが378 g、最も重いものが659 g、平均491 gと、ほぼ均一性をみせている。これに対して21号住居跡で確認された5点は、小さいもの3個が450 g前後、残りの2個が703 g、815 gと幾分均一性欠く大きさである。第3表はこれまで山梨県下で確認されている編石を出土した遺跡とその概要で、8遺跡、16遺構から確認されている。この重さをみると均一性にはほど遠いものが多々みられ、中には組み合わせの中に数個1 kgを越えるものもみられる。このように重さに関しては凸凹が一般的な傾向と考えられるものであり、21号住居跡の例も編石としてなんら差し障りないものとなる。

山梨県下で編石を確認できる住居跡は、南巨摩郡増穂町平野遺跡22号住居跡例が最も古いもので、弥生時代末頃のものであろう。その後古墳時代前半では韮崎市坂井南遺跡3軒、本遺跡の西田遺跡3軒、東八代郡八代町保ノ下遺跡1軒、同御坂町二之宮遺跡1軒、古墳時代後期では二之宮遺跡5軒、御坂町純塚遺跡2軒、甲府市桜井畠遺跡B地区1軒などが知られる。平安時代では北巨摩郡武川村宮間田遺跡、韮崎市宮ノ前遺跡でそれぞれ1軒づつが確認されている。これからすると古墳時代の遺跡からの出土が既立ち、奈良・平安時代の遺跡からは僅かな例が知られるに過ぎない。しかし、前述のように最近まで同様な形態のものがみられることから、奈良・平安時代以降も連綿と使われていたものであろう。編石は補助的な道具と思われるが、その製品は敷物や運搬用入れ物、収納具など農作業や生活の上に欠かせない製品を作り出していたものであり、重要な資料と言えよう。ただ、材料が身近で簡単に手にはいることから廃棄されたものも多いと考えられ、また加工痕の希少なものが多く調査の際に見過ごされやすい遺物ゆえ、発見例が少ないのでないだろうか。

第2表 編物石一覧表（図版第73）

番号	出土住居跡	石 材	重量 (g)	備 考
1	17号住居跡	砂 岩	560	抉りあり。
2	"	花崗岩	607	抉りあり。
3	"	安山岩	595	
4	"	砂 岩	511	
5	"	"	432	
6	"	花崗岩	481	
7	"	安山岩	458	
8	"	安山岩	504	
9	"	"	663	
10	"	砂 岩	476	抉りあり。炉の枕石
11	"	流紋岩	470	炉の枕石
12	21号住居跡	安山岩	703	抉りあり。
13	"	安山岩	815	抉りあり。
14	"	砂 岩	402	一部欠損
15	"	花崗岩	452	
16	"	花崗岩	541	
17	52号住居跡	安山岩	597	
18	"	花崗岩	450	
19	"	千枚岩	378	
20	"	花崗岩	493	
21	"	安山岩	511	
22	"	花崗岩	412	
23	"	花崗岩	462	抉りあり。
24	"	花崗岩	480	抉りあり。
25	"	花崗岩	659	抉りあり。
26	"	安山岩	546	抉りあり。
27	"	花崗岩	415	

編物石を確認できる本遺跡の住居跡は、17・21・52号住居跡の3軒であるが、これらの住居跡の規模に差ほどの違いはみられない。違いがあるとすれば、住居跡内にベッド状遺構をもつ52号住居跡に対して17・21号住居跡がもっていないことであろう。そして先にベッド状遺構をも

第3表 山梨県内出土編物石一覧表

遺跡名	時代	個数	材質	重さ(g)
平野遺跡第22号住居跡 (南群) (北群)	弥生時代末 "	18 11	砂岩ほか4種 砂岩・角礫凝灰岩	244~763 81~536
坂井南遺跡28号住居跡	古墳時代前期	19	ホルン・ヘルスほか9種	
" 29号住居跡	"	11	ホルン・ヘルスほか2種	
" 47号住居跡	"	7	ホルン・ヘルスほか4種	
保ノ下遺跡 1号住居跡	"	3		
二之宮遺跡68号住居跡	"	8	花崗岩・安山岩	280~ 580
" 60号住居跡	古墳時代後期	5	花崗岩類	450~1450
" 117号住居跡	"	16	花崗岩類ほか2種	270~ 800
" 206号住居跡	"	17	花崗岩類ほか2種	500~1600
" 294号住居跡	"	37	花崗岩・安山岩	240~ 960
" 295号住居跡	"	7	花崗岩	320~ 770
姥塚遺跡 60号住居跡	"	5	花崗岩類	450~1450
" 64号住居跡	"	22	花崗岩類	610~1310
桜井畠遺跡B地区 1号住居跡	"	20	ホルン・ヘルスほか5種	161~536
宮間田遺跡85号住居跡	平安時代前期	40		
宮ノ前遺跡342号住居跡	"	13	安山岩・砂岩	175~331

つ住居跡が、本集落跡の有力者の階層を示すものととらえた。しかし、編物石の所有状況からすれば、有力者の階層もその回りを取り巻く住居跡の居住者と同様な生活形態が窺われ、それほど隔絶した力関係は感じ取れない。これからすればあくまでも集落内の有力者ということになるが、一方ではこの階層が方形周溝墓を造ることができたということになり、方形周溝墓の被葬者像の一端が窺えるのではないだろうか。

おわりに

本遺跡は、既に述べたように18年前に発掘調査が実施されたものである。古い記録類をみなが
ら整理作業を行ってきたが、整理の中断した長い間に、この発掘調査にかかわった調査員の多く
が県内市町村などの職員となり、仕事の関係からほとんど本整理にかかわることができなか
った。このため、あるいは不適当な記述のところも多々みられることと思われるが、ご寛容願
いたい。

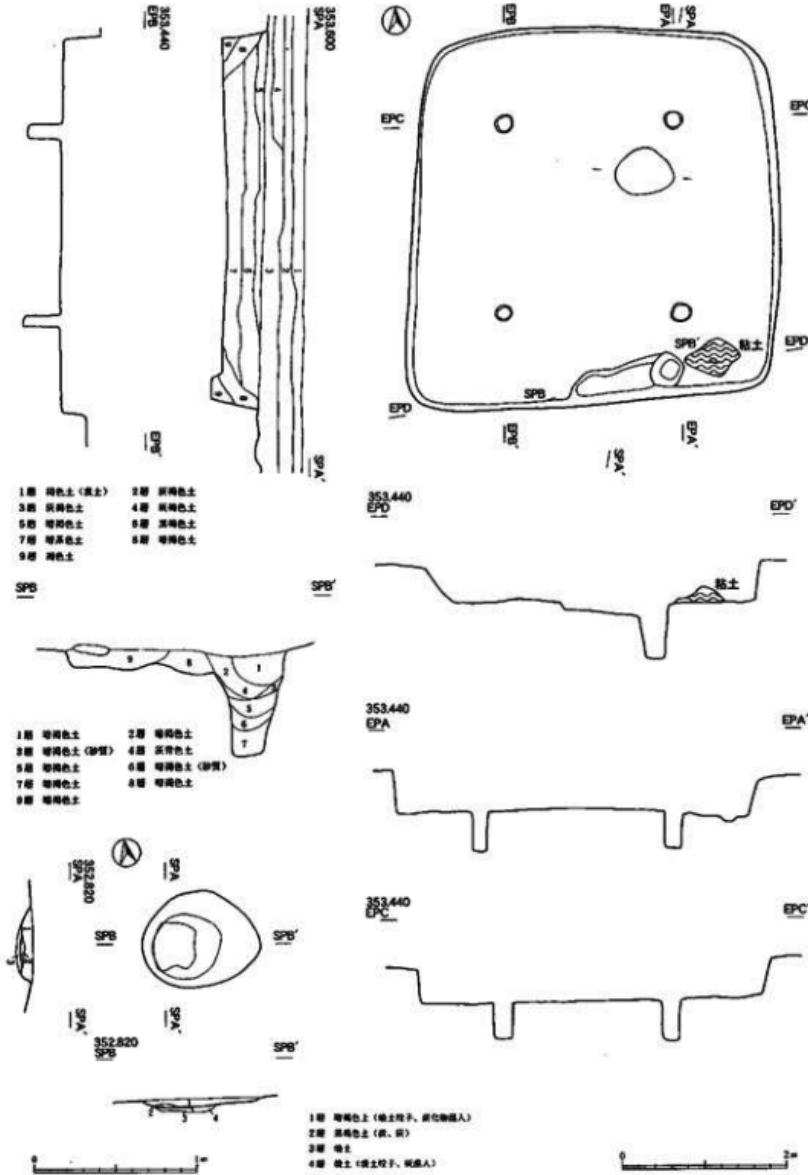
最後に、ご協力を賜った関係機関、ご教示願った多くの方々、また発掘調査、整理作業に従事
した多くの方々に厚くお礼申し上げます。

参考文献

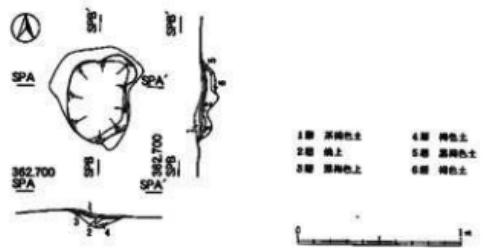
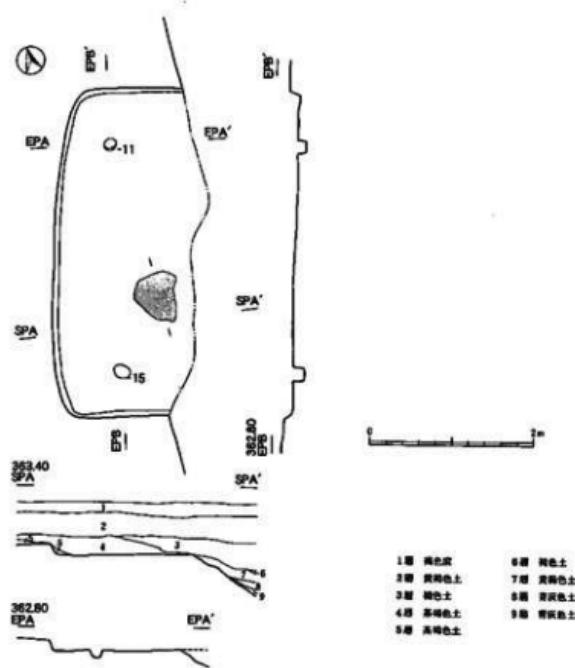
- | | | |
|----------|------|--|
| 中山誠二 | 1986 | 「甲府盆地における古墳出現期の土器様相」
『山梨県考古学論集』山梨県考古学協会 |
| 山下孝二 | 1988 | 「古墳時代前期の土器編年」『坂井南』韮崎市教育委員会 |
| 小林健二 | 1993 | 「山梨県域の土器様相」
『東日本における古墳出現過程の再検討』
日本考古学協会新潟大会実行委員会 |
| 韮崎市教育委員会 | 1988 | 『坂井南』 |
| " | 1994 | 『立石遺跡』 |
| 山梨県教育委員会 | 1984 | 『石橋条里制構、薰福遺跡、俾ノ下遺跡』
山梨県埋蔵文化財センター調査報告第3集 |
| " | 1987 | 『二之宮遺跡』 同第23集 |
| " | 1987 | 『姥塚遺跡、姥塚無名墳』 同第24集 |
| 武川村教育委員会 | 1988 | 『宮間田遺跡』 |
| 山梨県教育委員会 | 1989 | 『桜井畠遺跡(B地区)』
山梨県埋蔵文化財センター調査報告第50集 |
| 韮崎市教育委員会 | 1992 | 『宮ノ前遺跡』 |
| 山梨県教育委員会 | 1993 | 『平野遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第78集 |

図 版

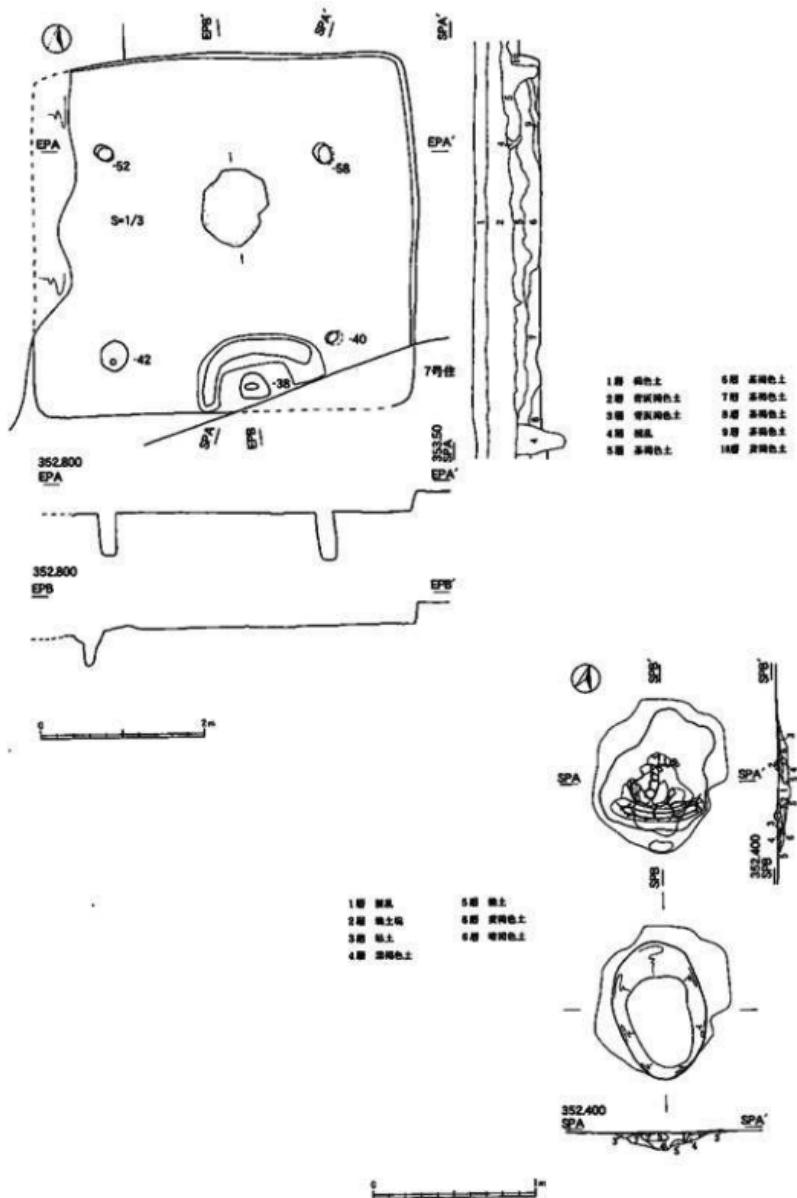
圖版第一 造構測量圖



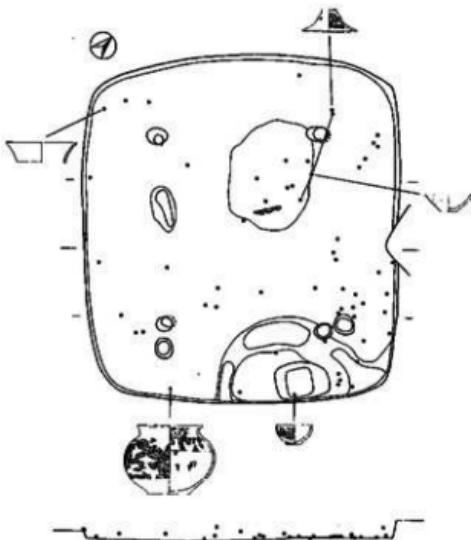
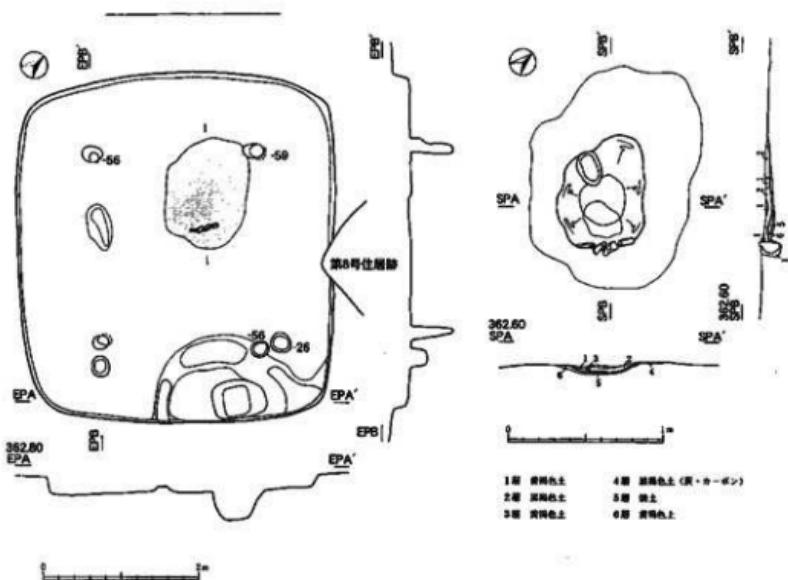
第1号住居跡・炉平面図



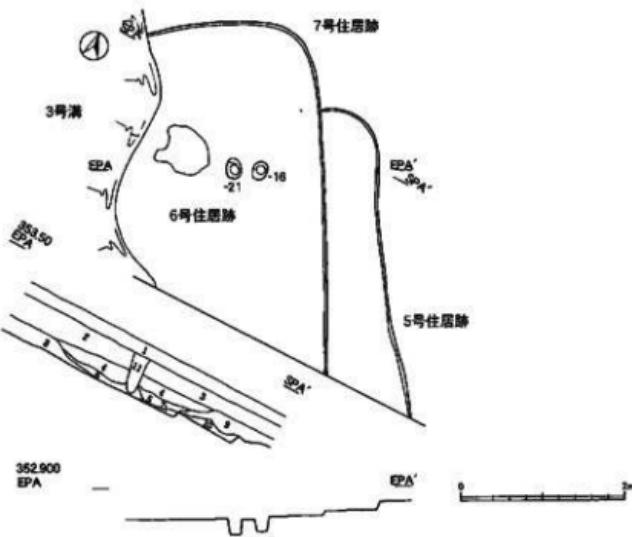
2号住居跡・炉平面図



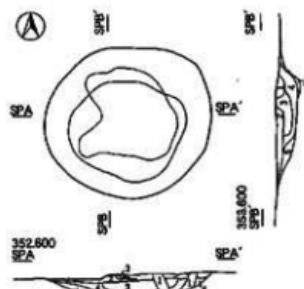
第3号住居跡・炉平面図



第4号住居跡・炉平面図及び遺物出土位置図

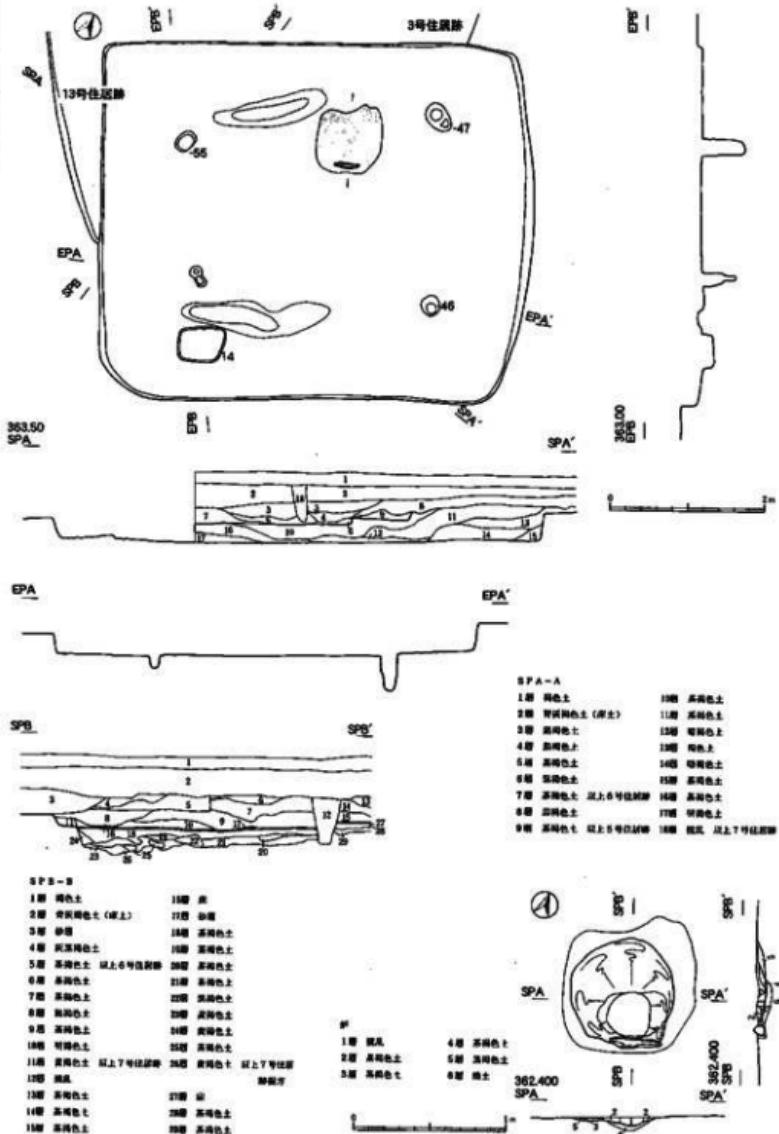


- | | |
|--------------|---------|
| 1層 棕色土 | 丁層 黑褐色土 |
| 2層 廉灰褐色土(灰土) | 3層 黑褐色土 |
| 3層 廉灰褐色土(灰土) | 4層 黑褐色土 |
| 4層 黑褐色土 | 5層 黑褐色土 |
| 5層 黑褐色土 | 6層 灰土 |
| 6層 黑褐色土 | |

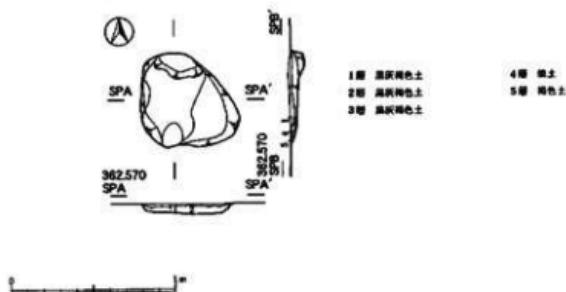
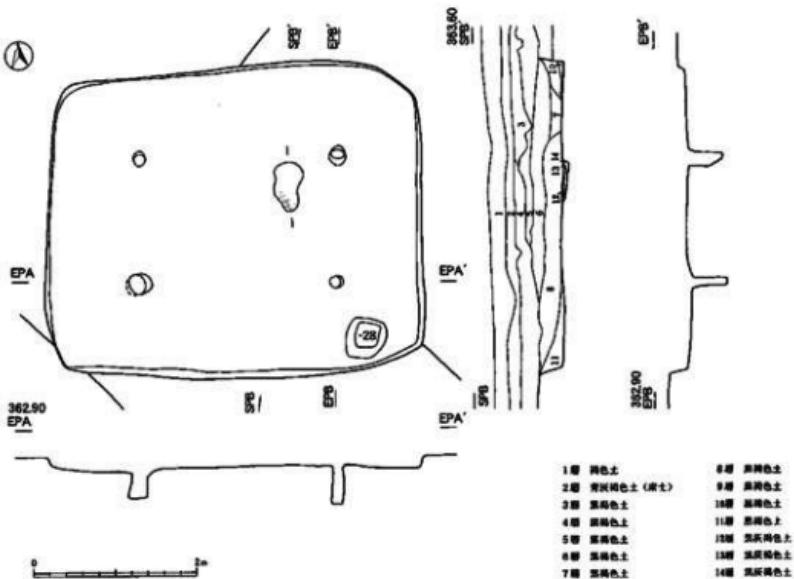


- | |
|----------------|
| 1層 灰土 |
| 2層 廉灰褐色土(灰土灰人) |
| 3層 灰土 |
| 4層 廉灰褐色土(灰土灰人) |
| 5層 黑褐色土 |

第5図 第5・6号住居跡・炉平面図

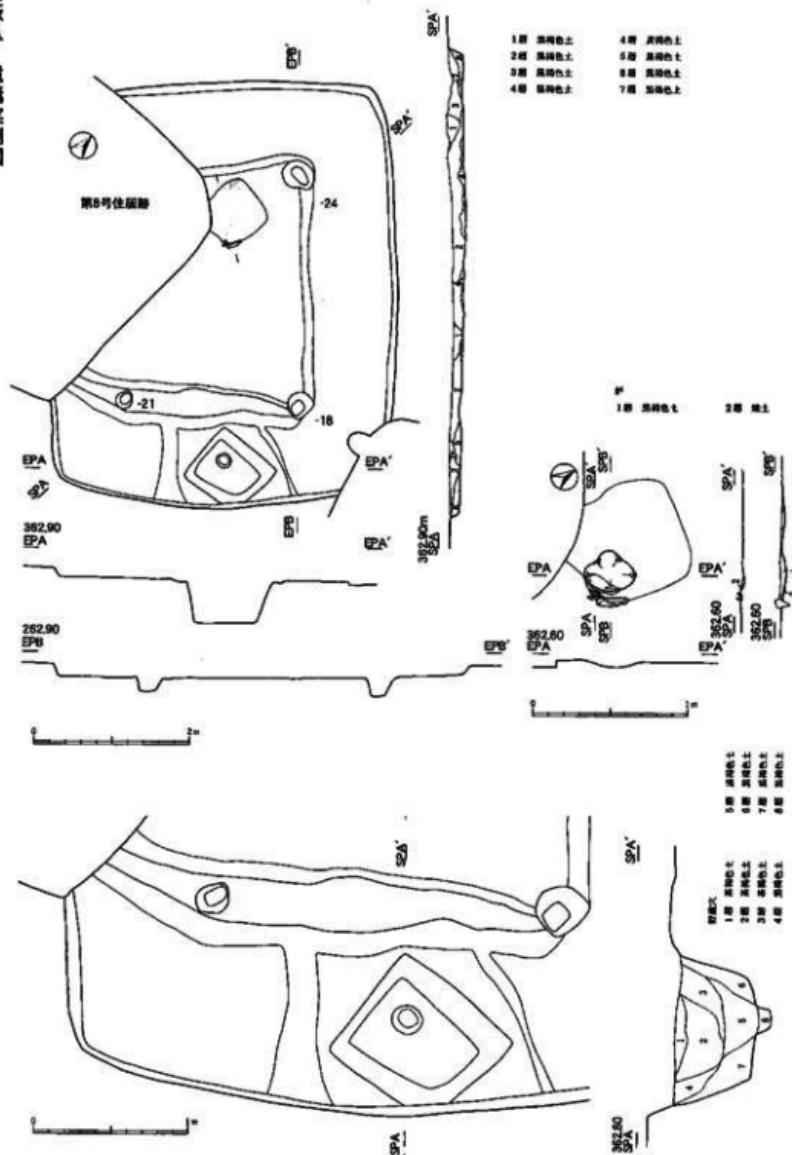


第7号住居跡・炉平面図

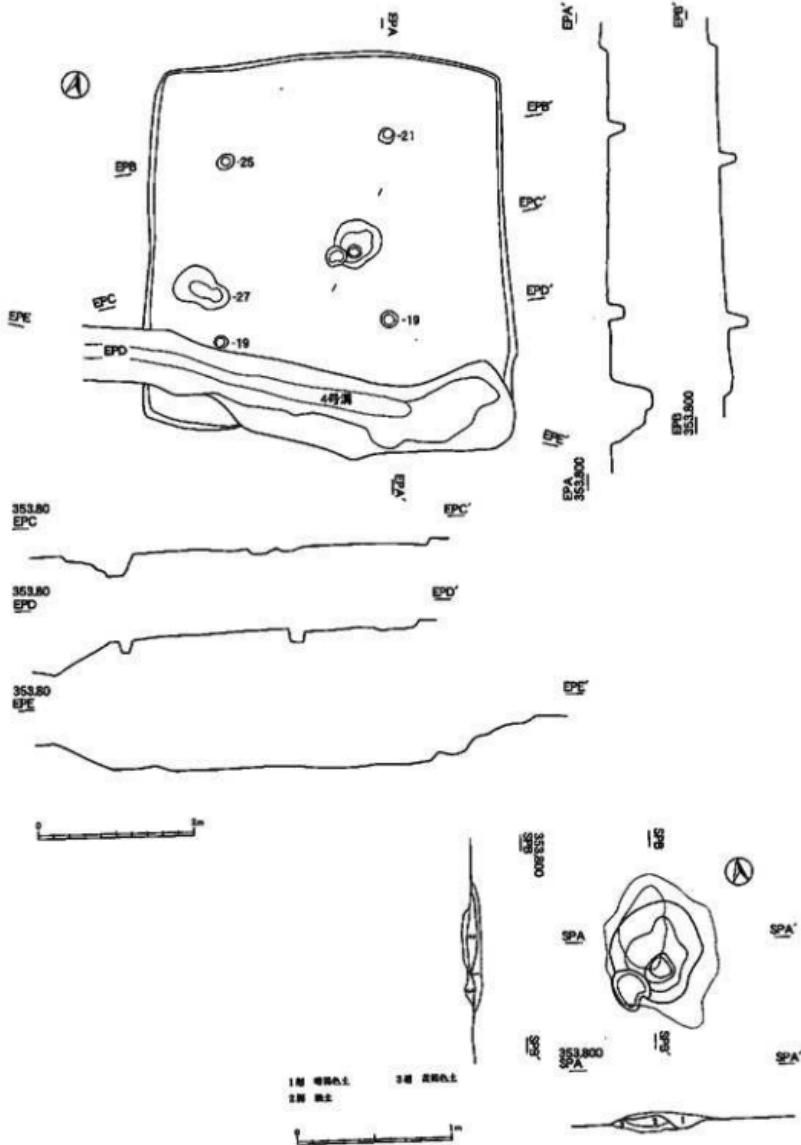


第8号住居跡・炉平面図

圖版八 遺構測量圖

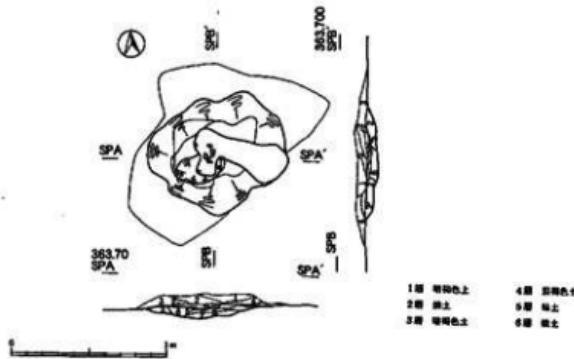
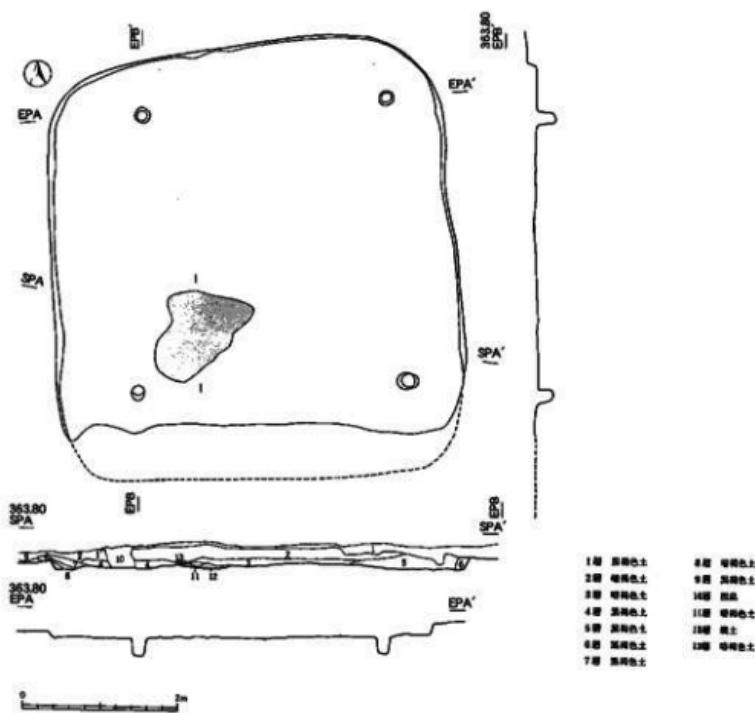


第9号住居跡・炉・貯藏穴平面図



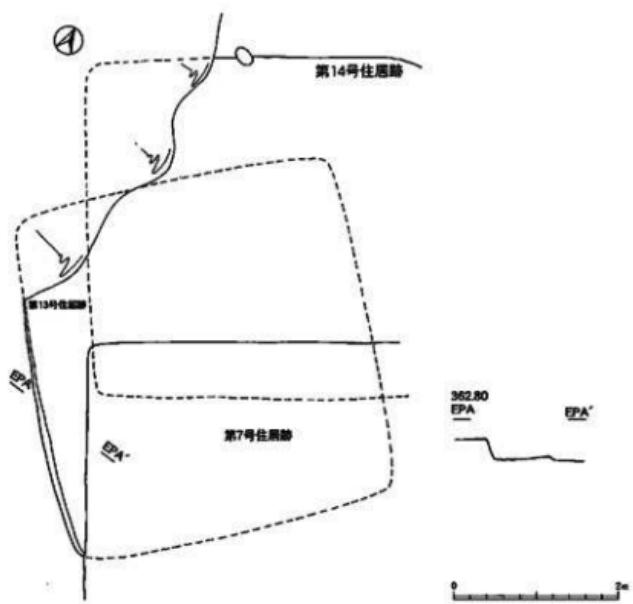
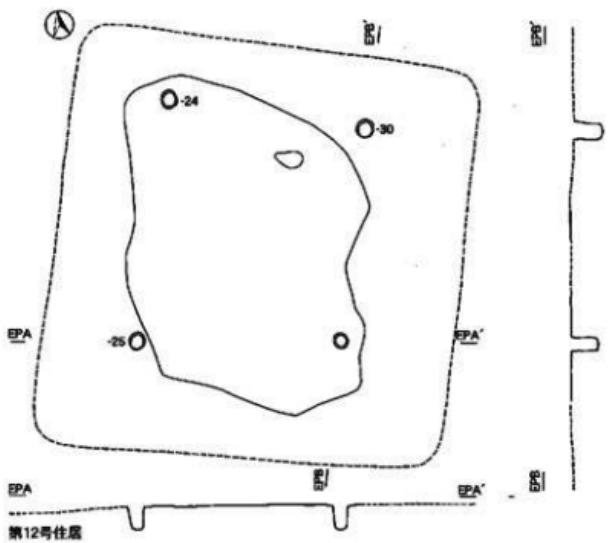
第10号住居跡・炉平面図

図版一〇 遺構実測図

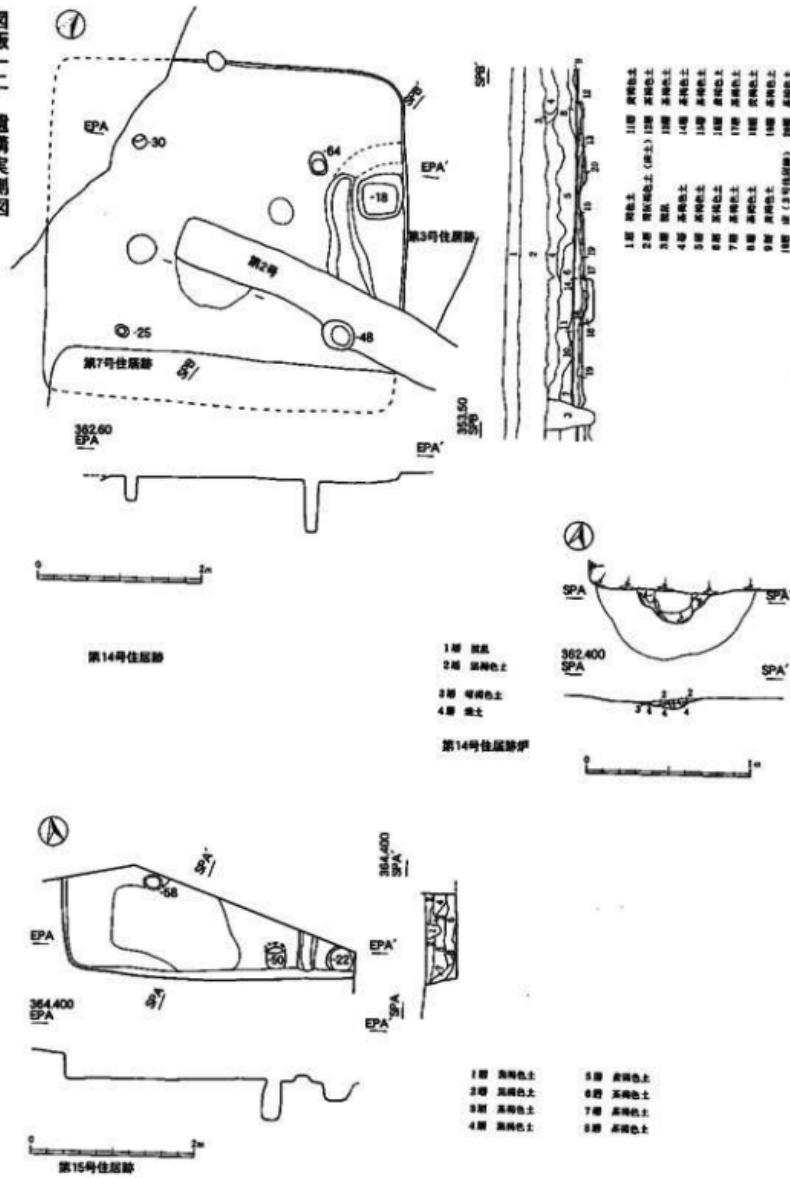


第11号住居跡・炉平面図

図版一 遺構実測図

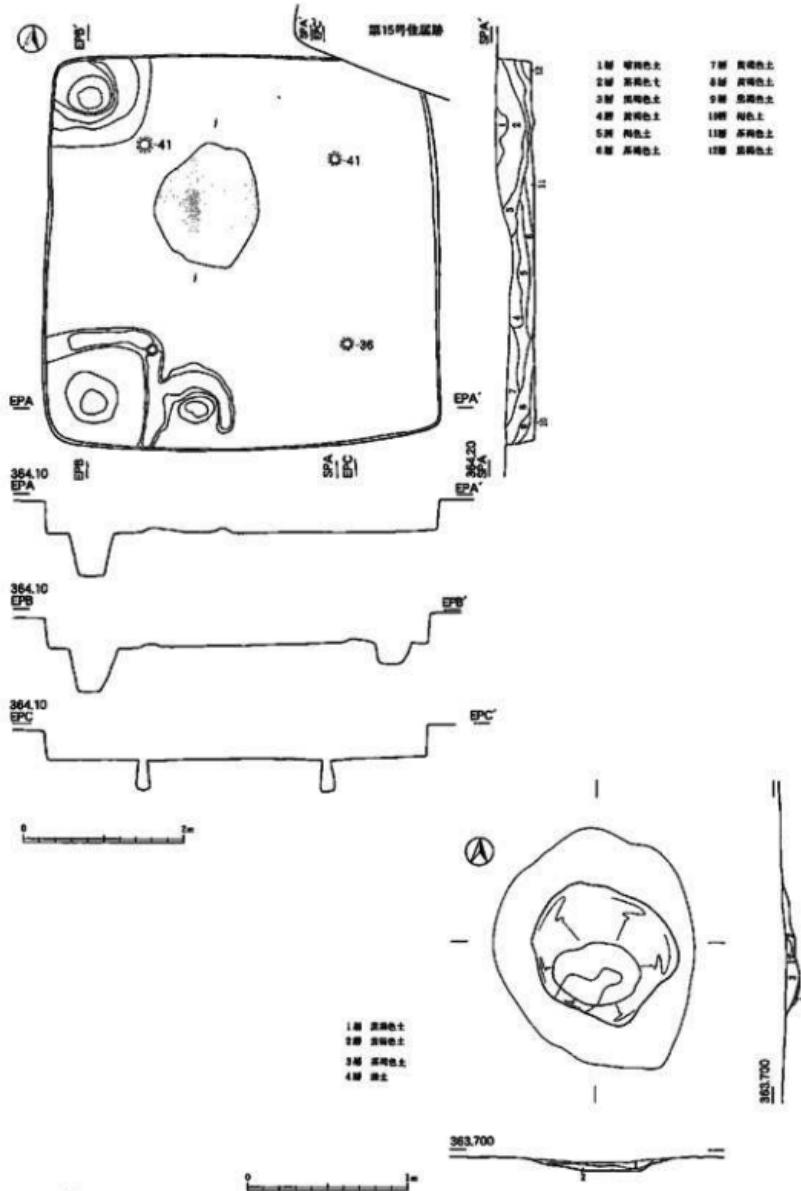


第12・13号住居跡平面図



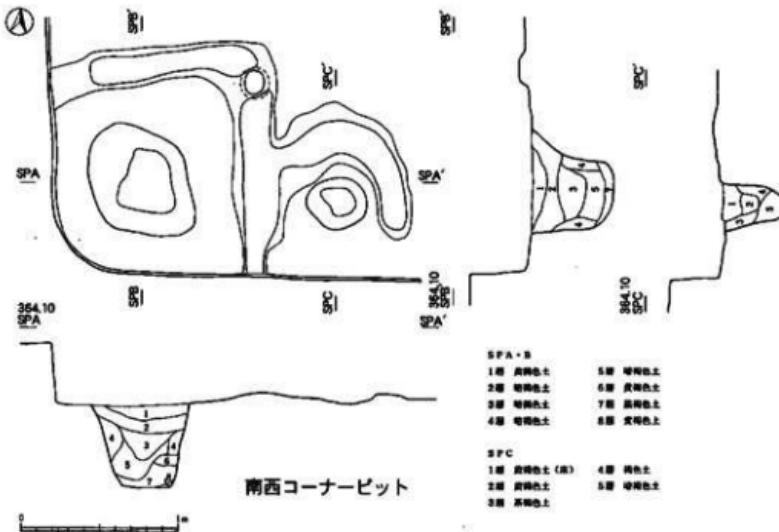
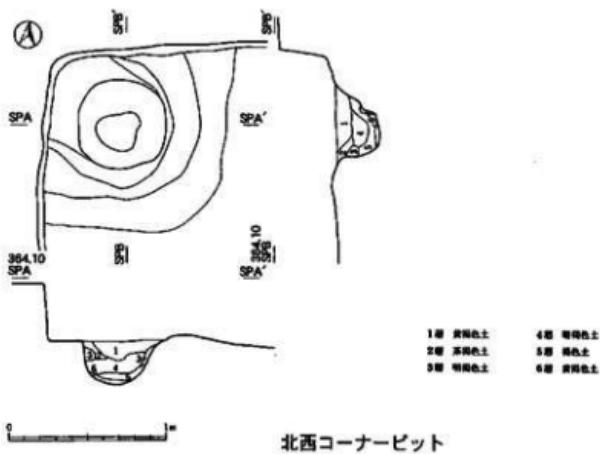
第14・15号住居跡・炉平面図

図版一三 造構実測図

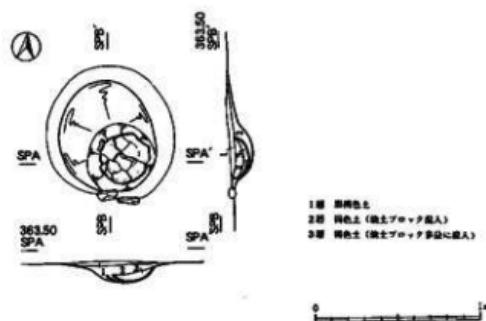
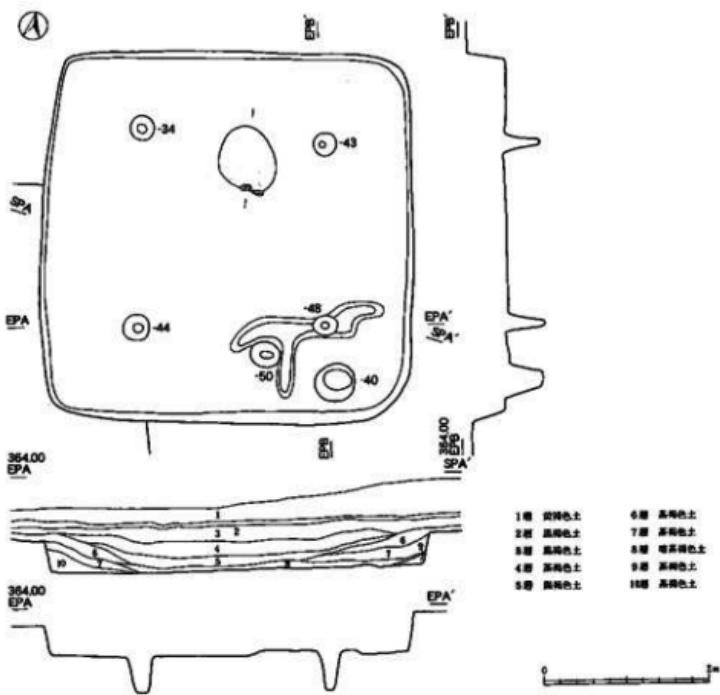


第16号住居跡・炉平面図

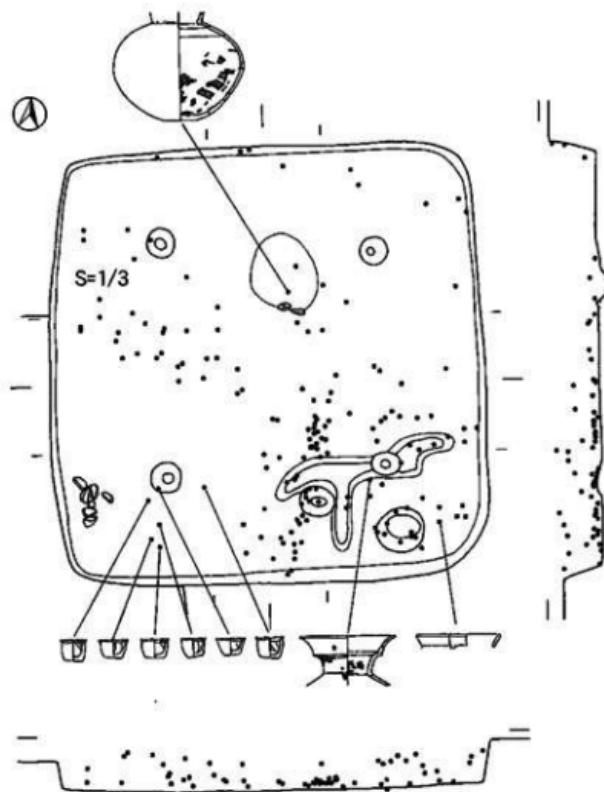
図版一四 遺構実測図



第16号住居跡ピット微細図

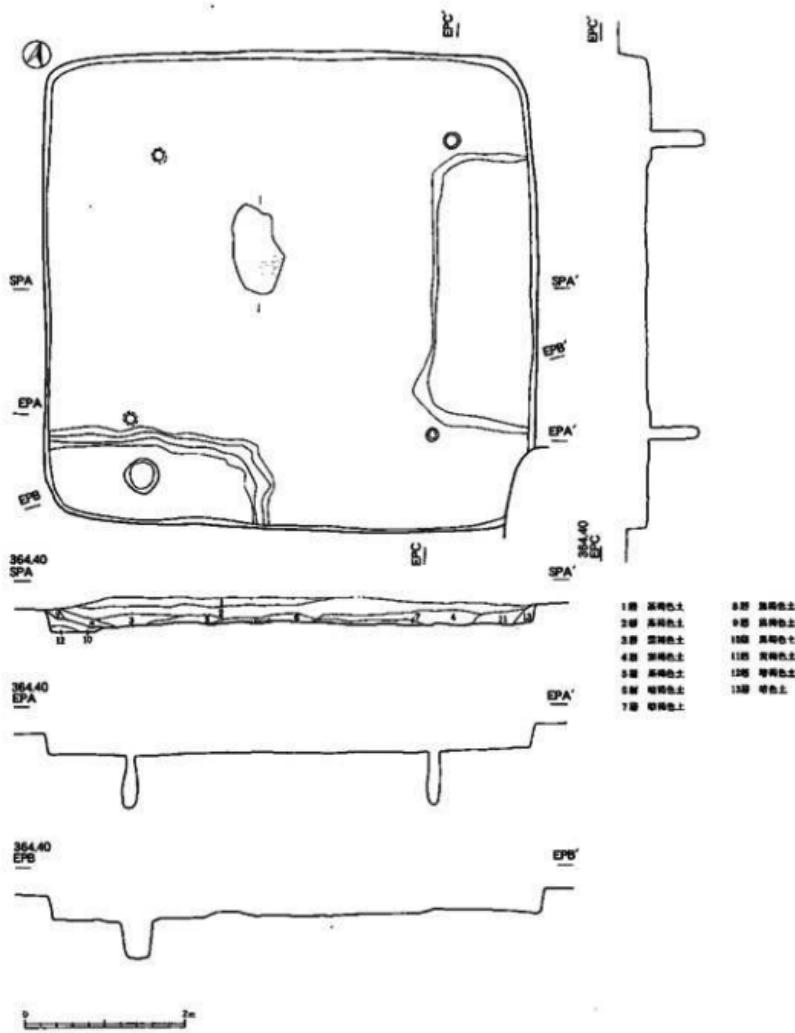


第17号住居跡・炉平面図



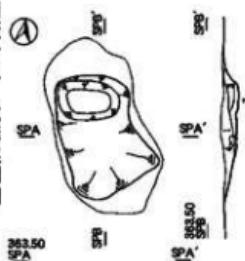
第17号住居跡遺物出土位置

图版十七 透槽实测图



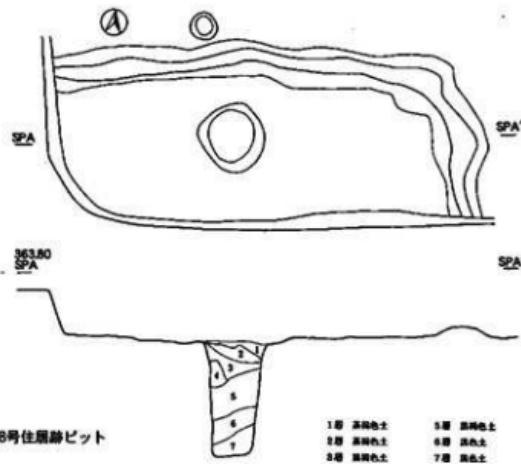
第18号住居平面图

四版十八 造構実測図

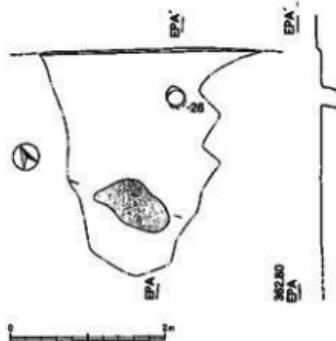


- 1層 黄褐色土 (粘土、ガーディン插入)
- 2層 黑褐色土 (-)
- 3層 灰褐色土
- 4層 黑褐色土ブロック

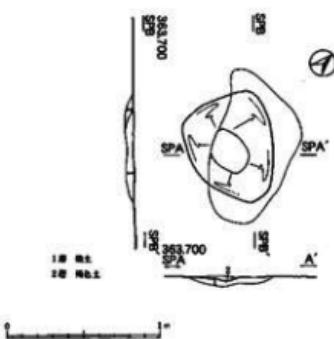
第18号住居跡炉



- | | |
|---------|---------|
| 1層 黄褐色土 | 5層 黑褐色土 |
| 2層 黑褐色土 | 6層 黑褐色土 |
| 3層 黑褐色土 | 7層 黑褐色土 |
| 4層 黑褐色土 | |

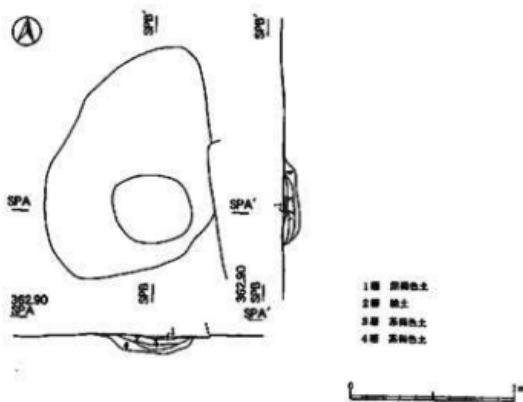
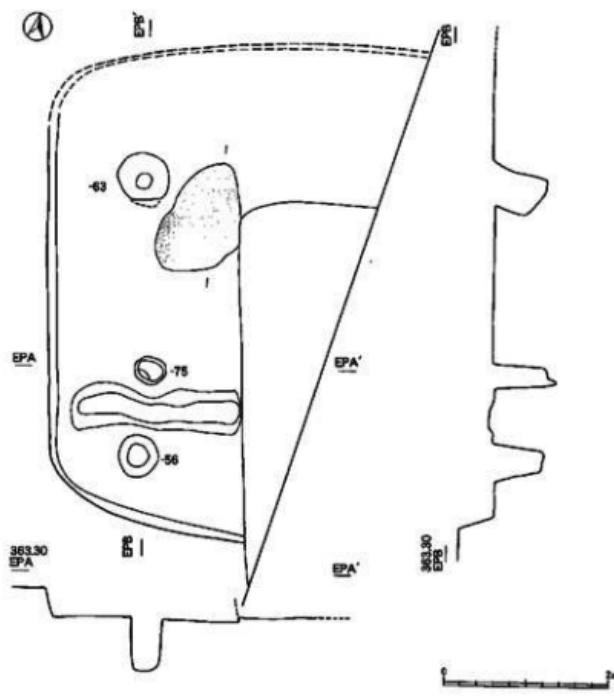


362.80
SPA

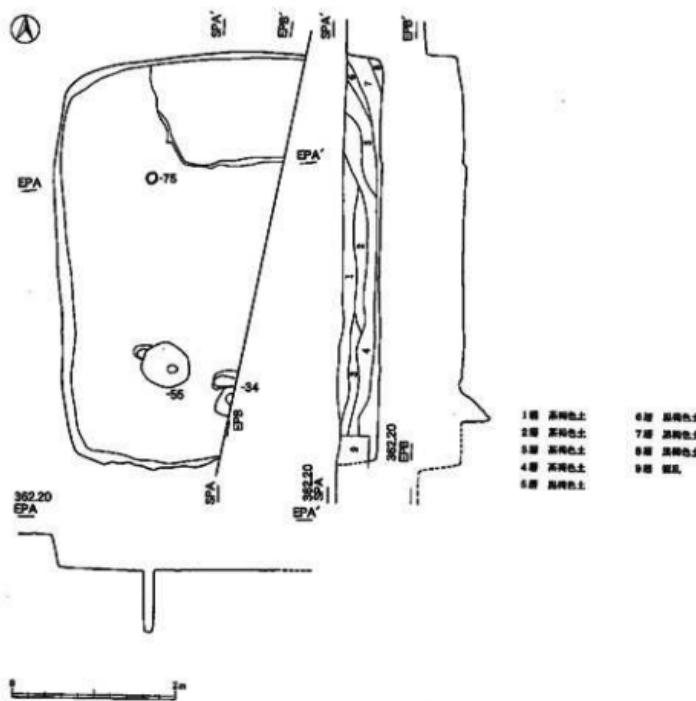


- 1層 黏土
- 2層 黑褐色土

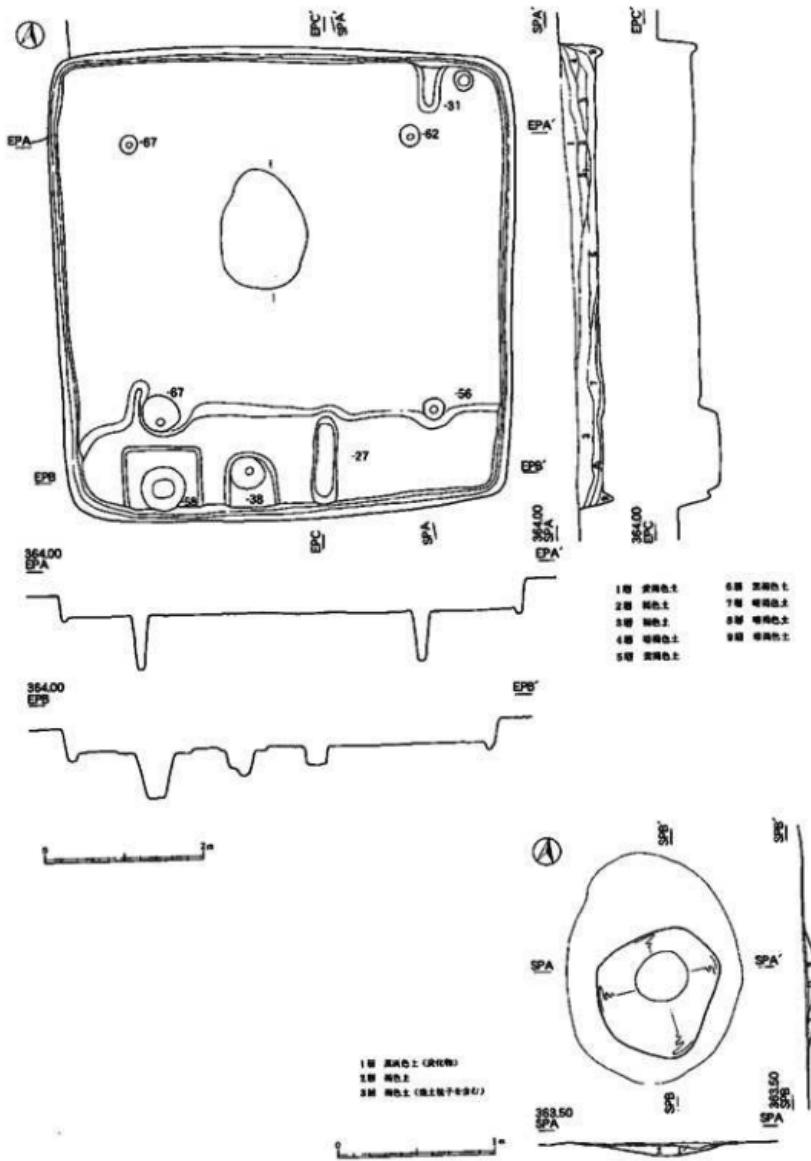
第18号住居跡炉・ピット、第19号住居跡・炉平面図



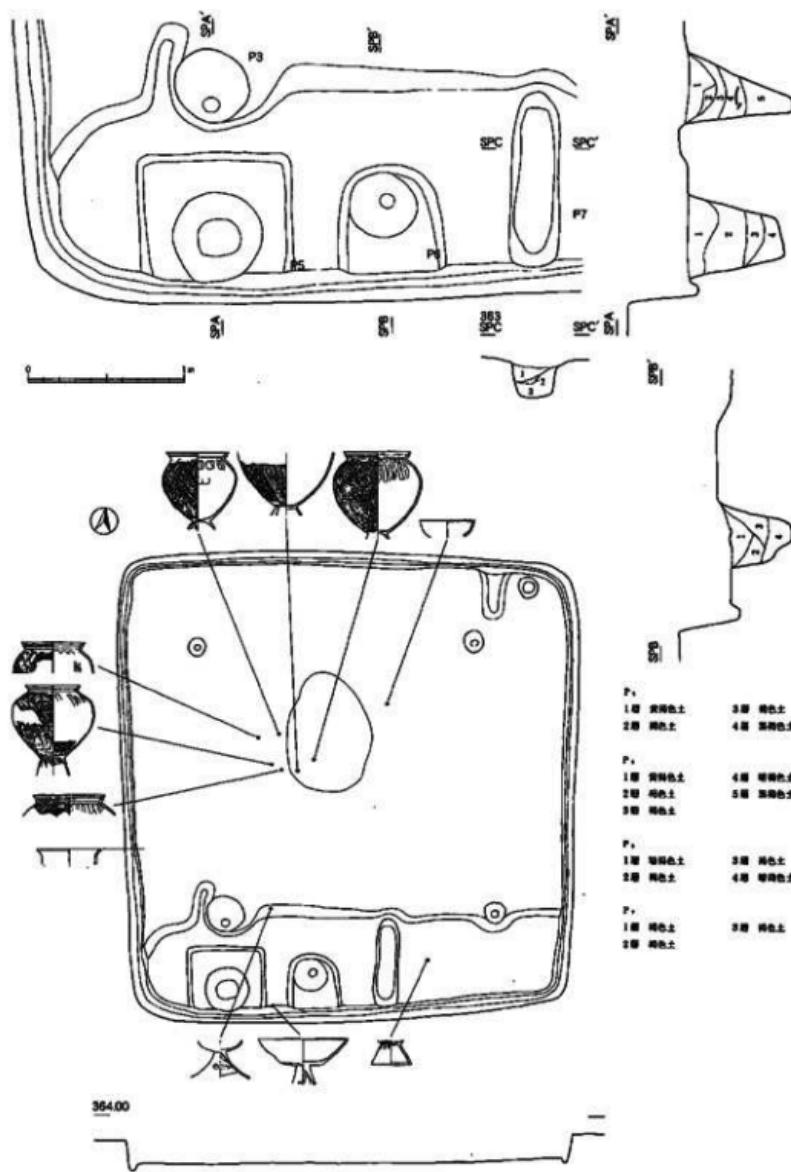
第20号住居跡・炉平面図



第21号住居跡平面図

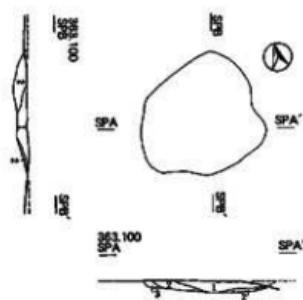
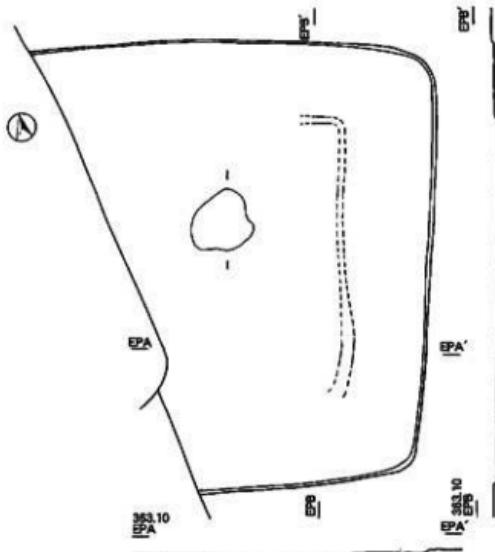


第22号住居跡・炉平面図



第22号住居跡ピット平面図・遺物位置図

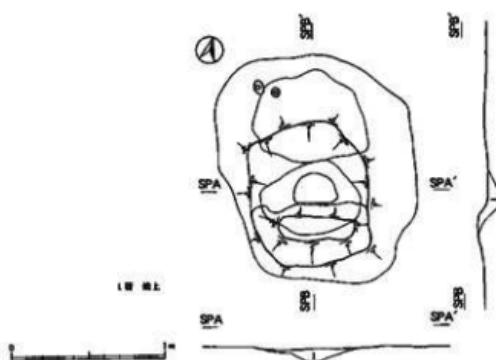
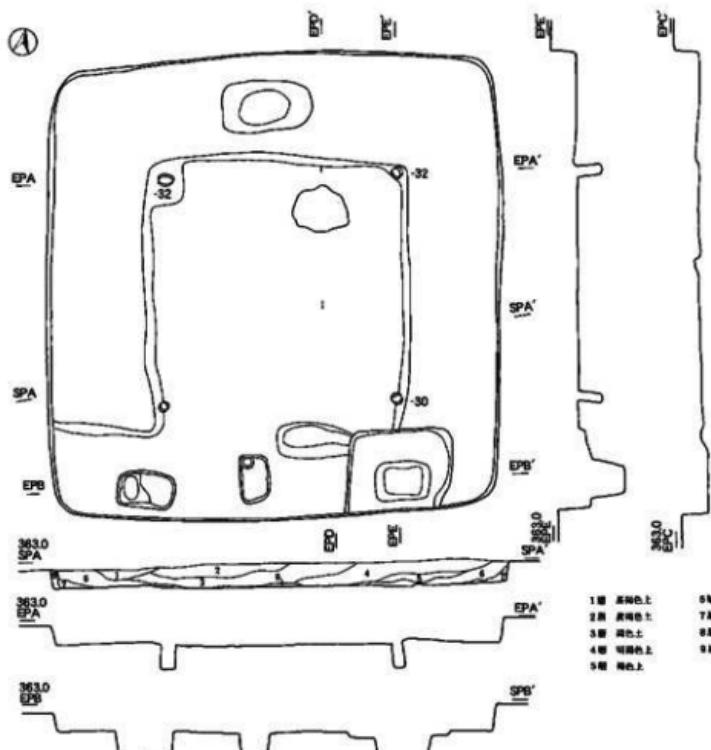
図版二三 造構実測図



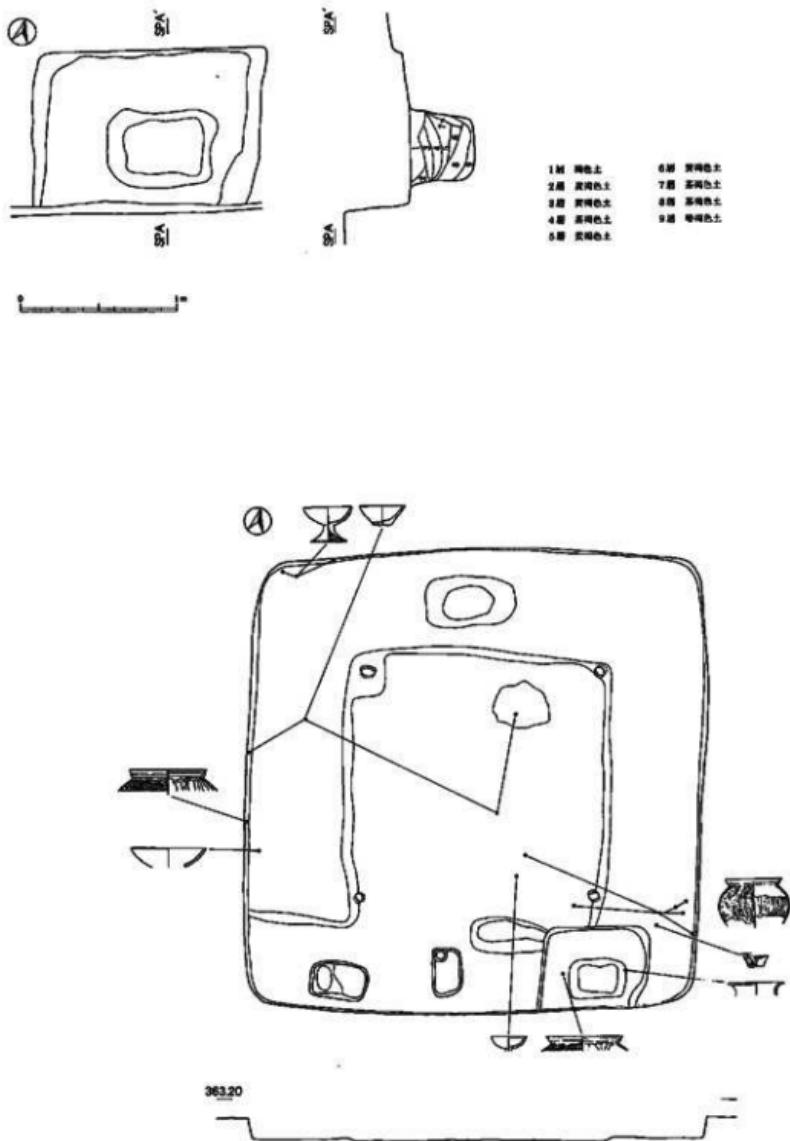
1層 土
2層 - (漆喰等が無い)
3層 - (漆喰等)



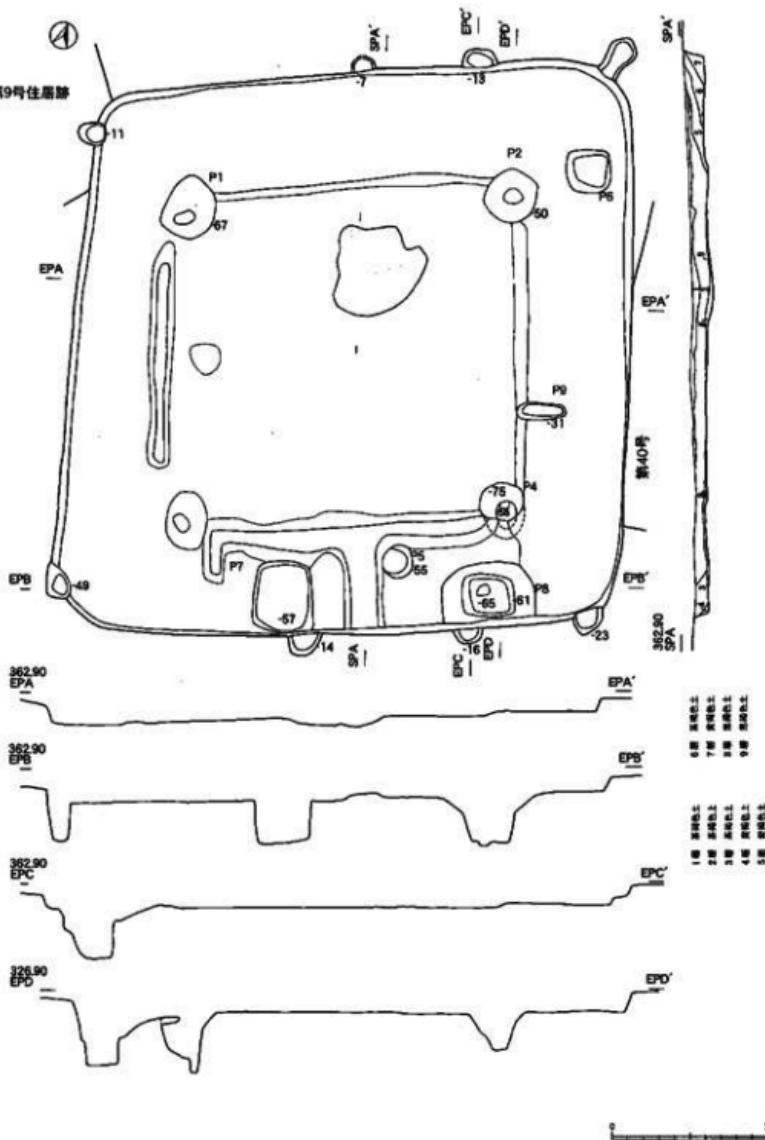
第23号住居跡・炉平面図



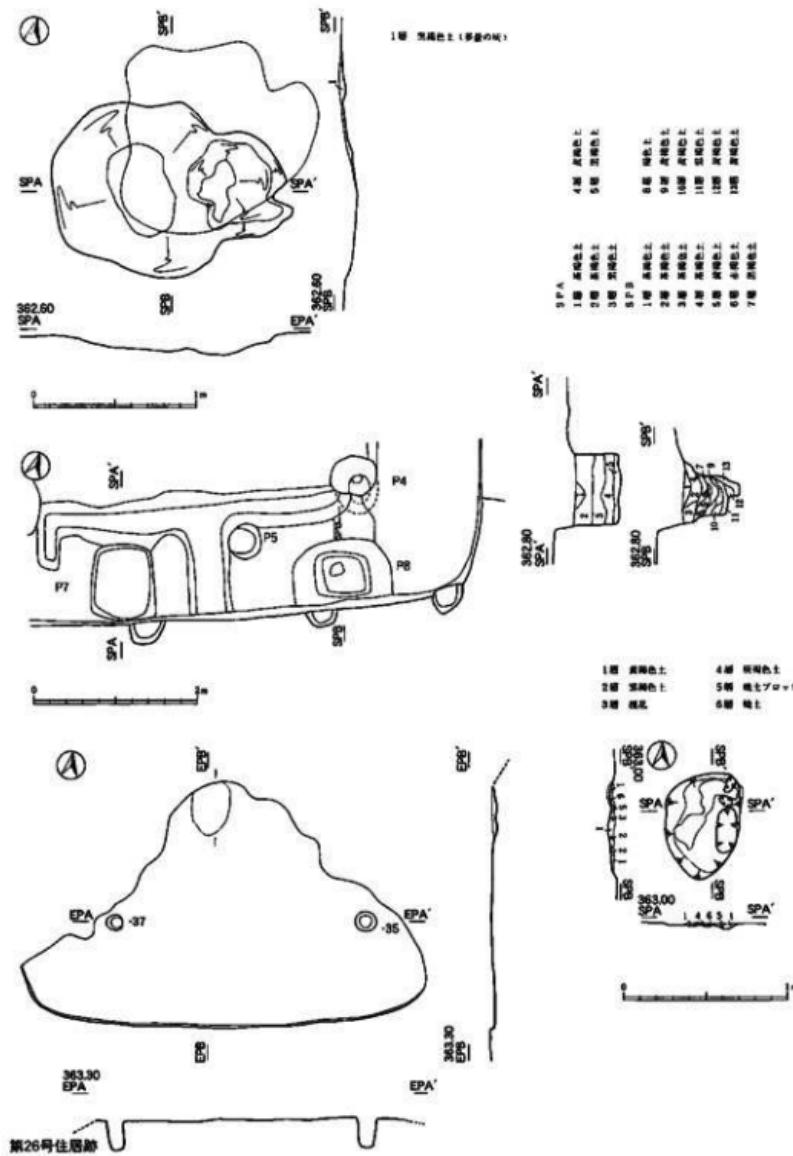
第24号住居跡・炉平面図



第24号住居跡・貯蔵穴及び遺物出土位置図

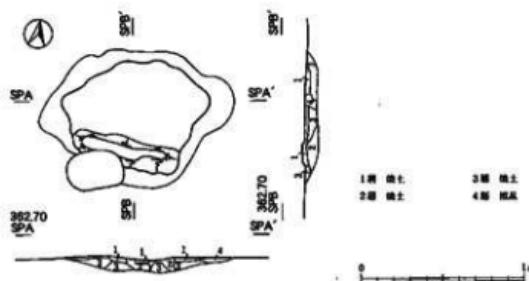
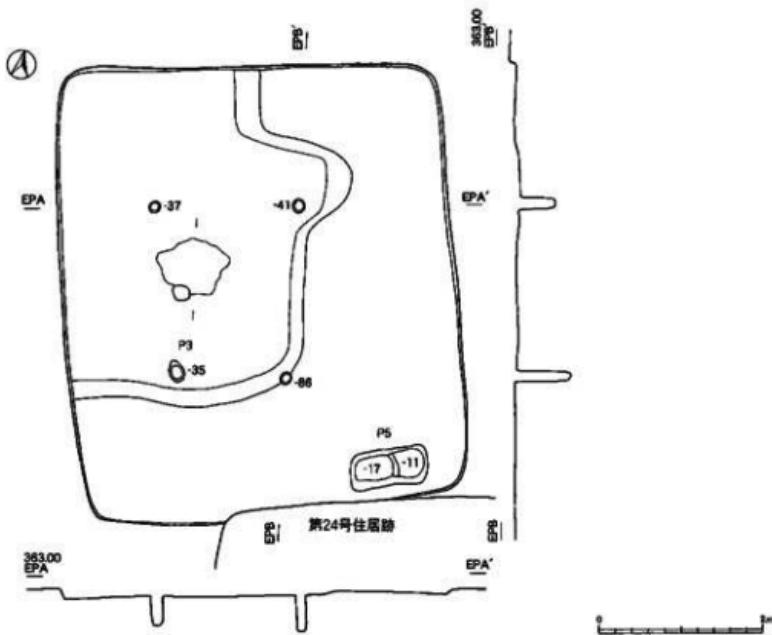


第25号住居跡平面圖



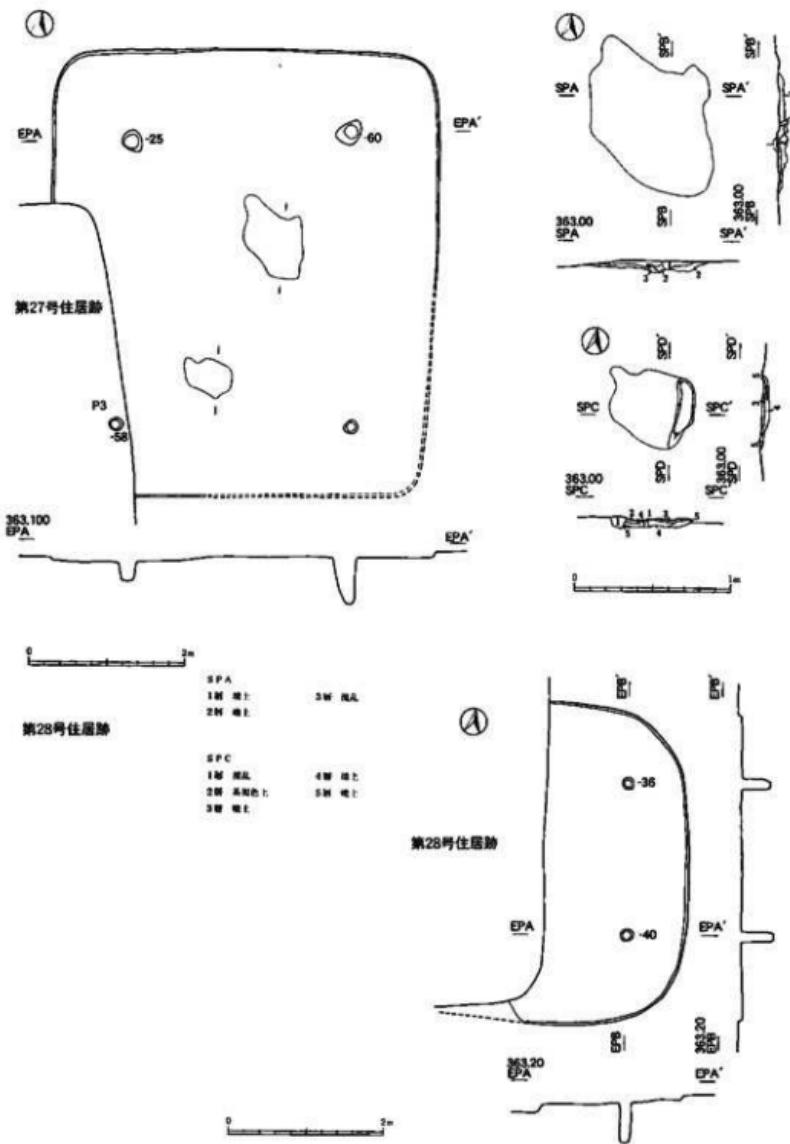
第25号住居跡炉・貯藏穴平面図 及び 第26号住居跡・炉平面図

图版二八 造構実測図

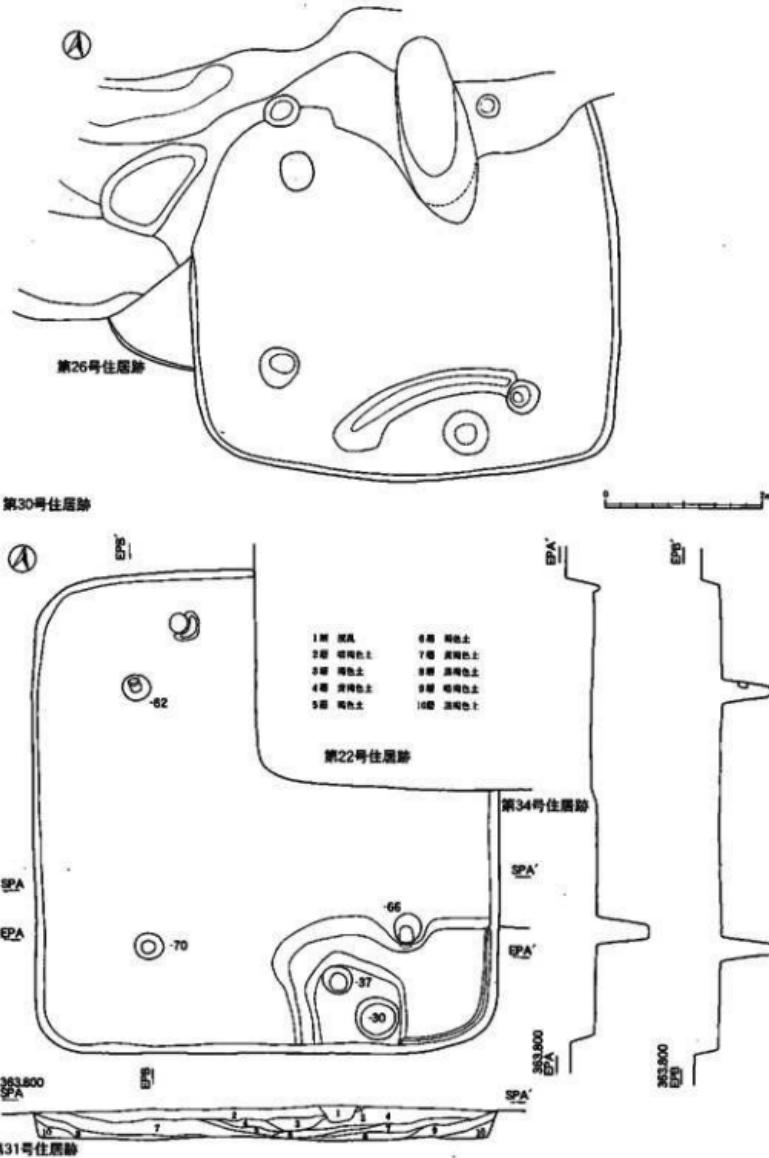


第27号住居跡・炉平面図

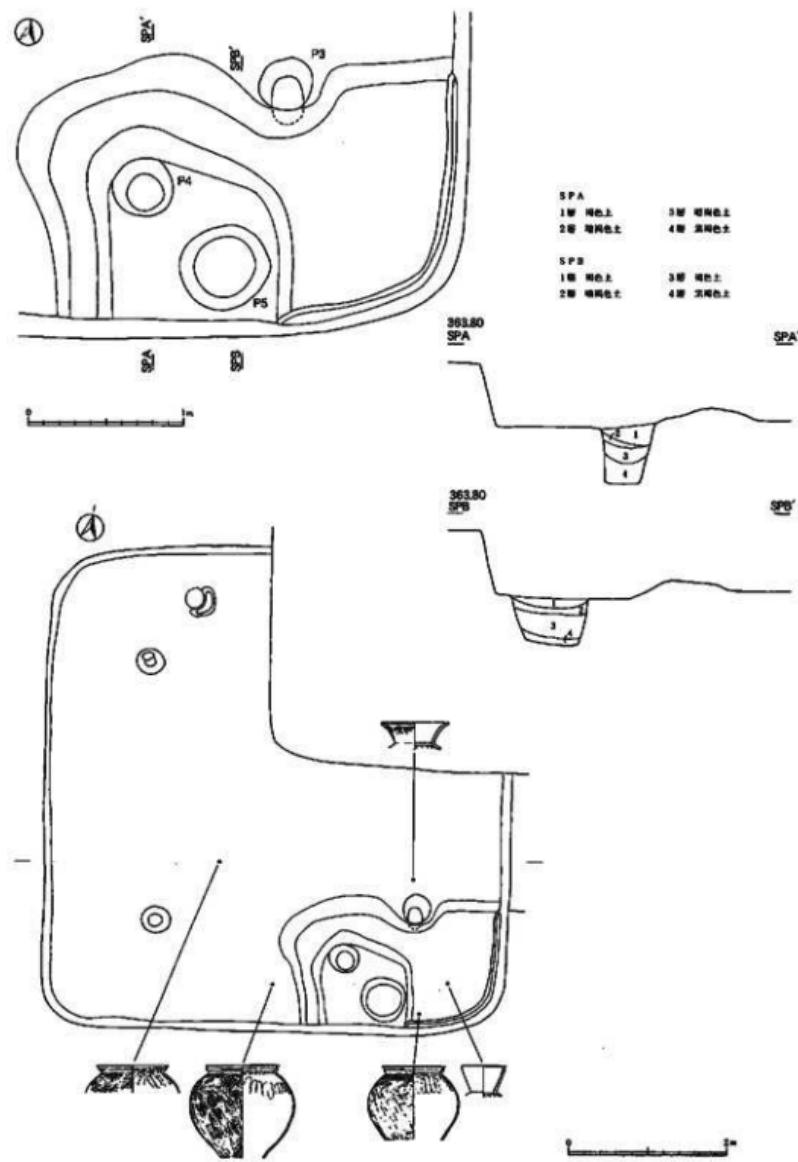
図版二九 造構実測図



第28号住居跡・炉平面図及び第29号住居跡平面図

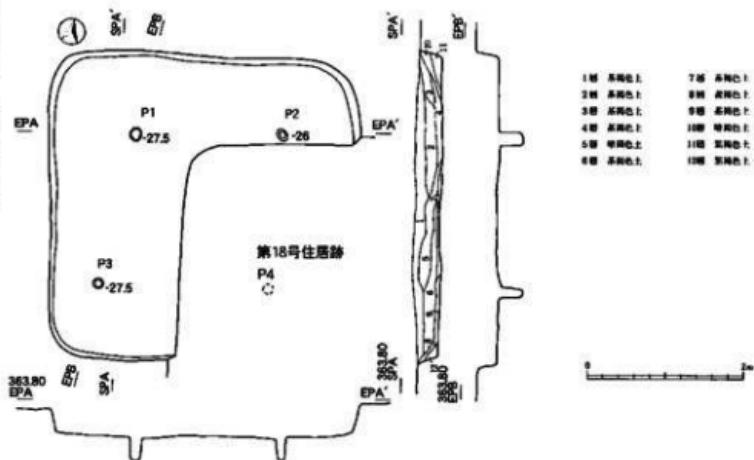


第30・31号住居跡平面図

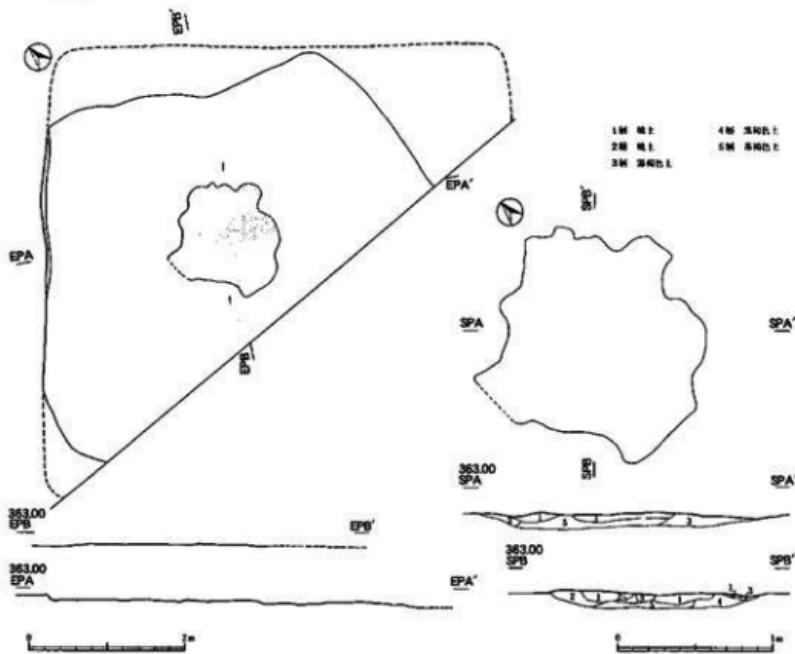


第31号住居跡ピット平面図及び遺物位置図

圖版三一
遺構實測圖

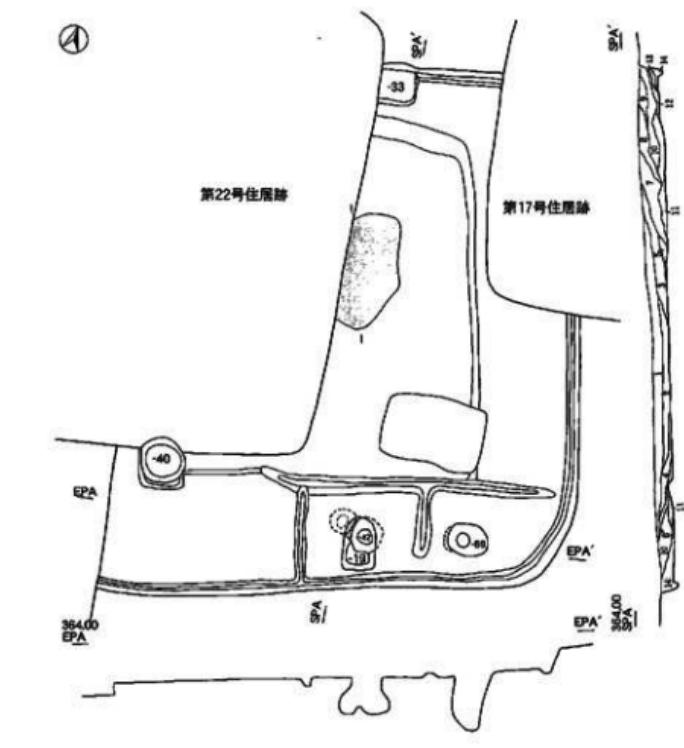


第18号住居跡



第32号・33号住居跡

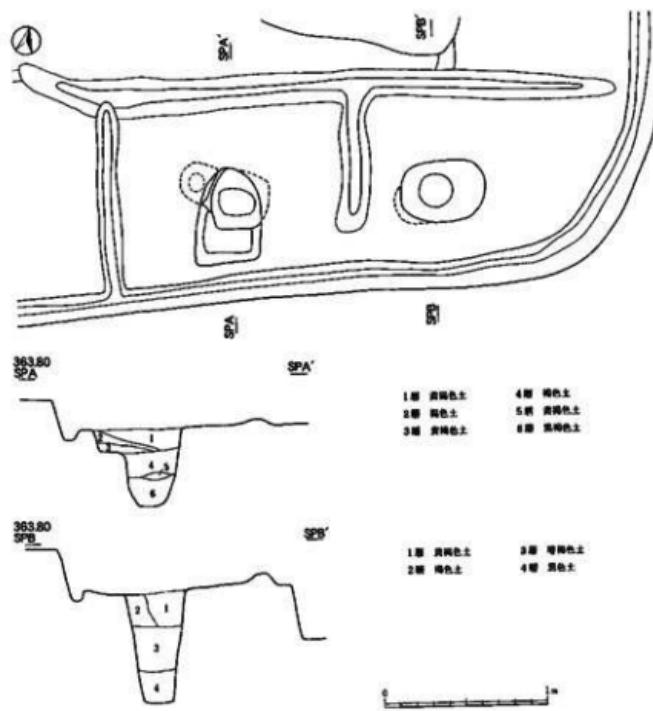
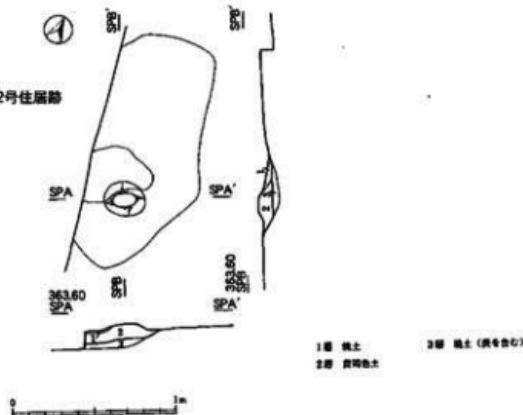
第32号・33号住居跡・炉平面図



1層	褐色土	8層	褐色土
2層	褐褐色土	9層	褐色土
3層	褐色土	10層	褐色土
4層	褐褐色土	11層	褐色土
5層	褐色土	12層	褐色土
6層	褐褐色土	13層	褐褐色土
7層	深褐色土	14層	深褐色土

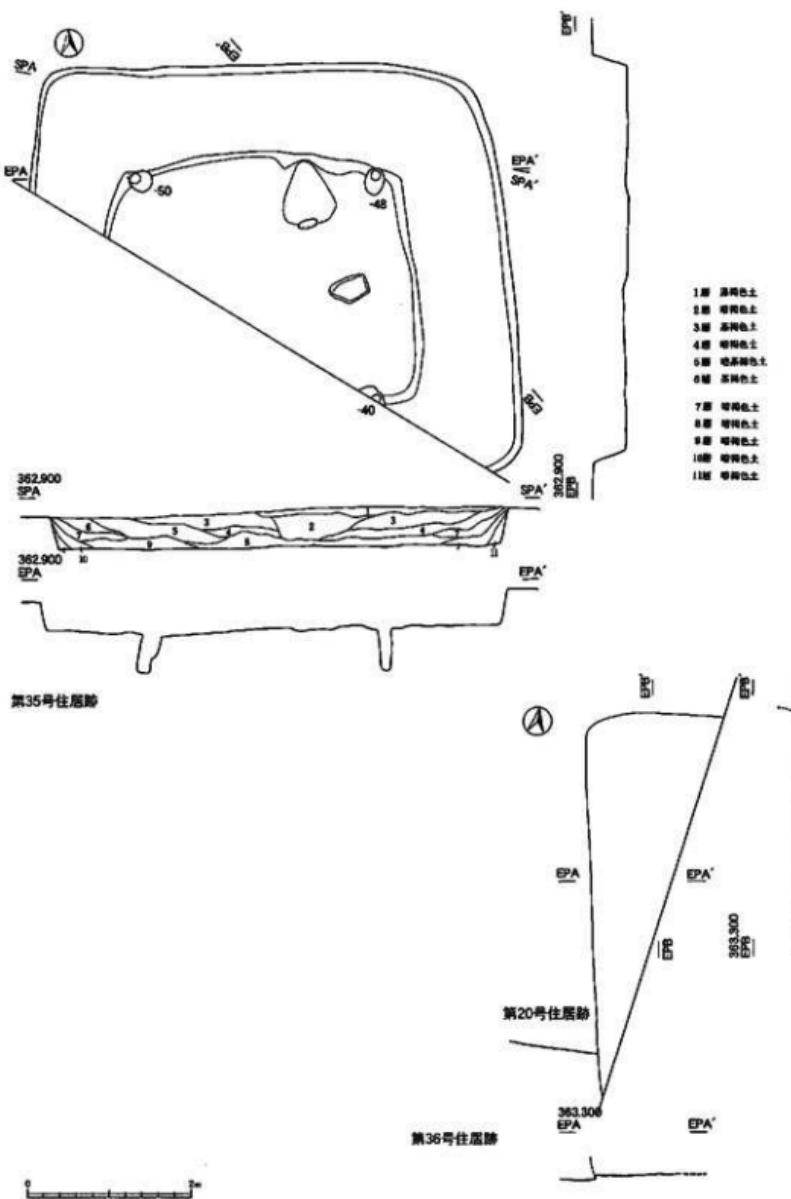
第34号住居跡平面図

図版三四
遺構実測図

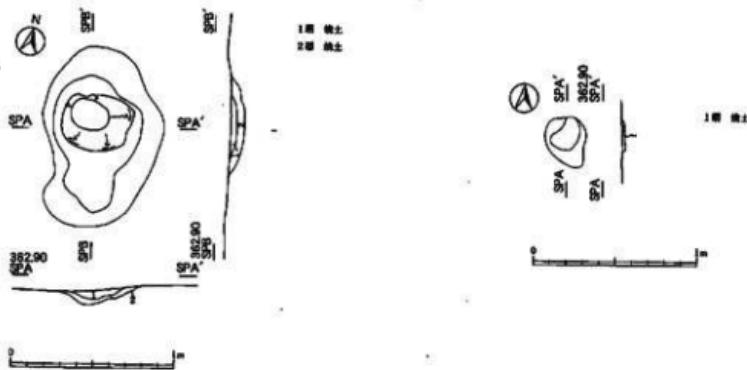
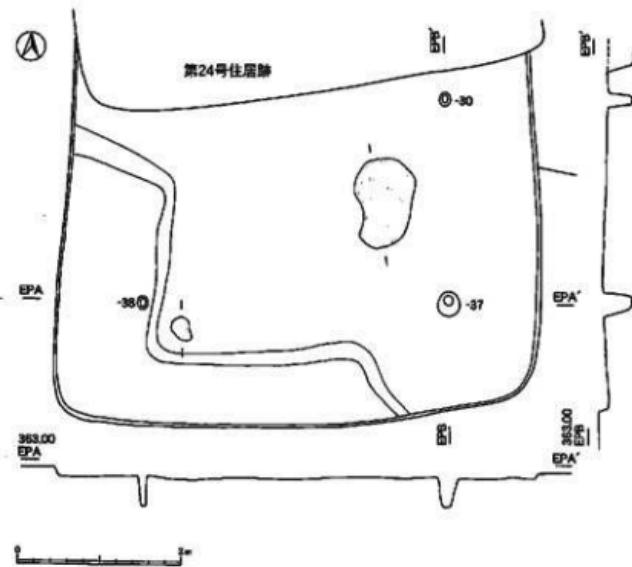


第34号住居跡炉・ピット平面図

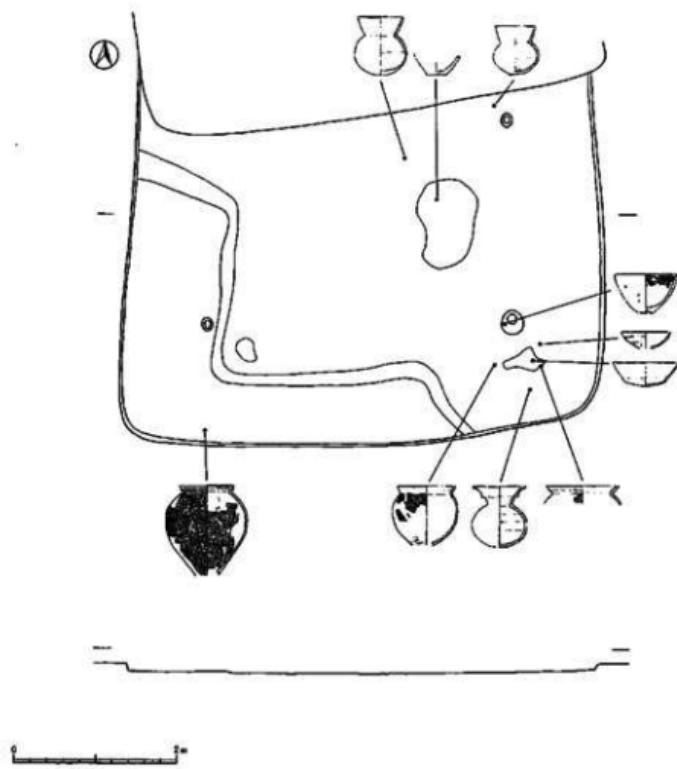
図版三五 遺構実測図



第35・36号住居跡平面図

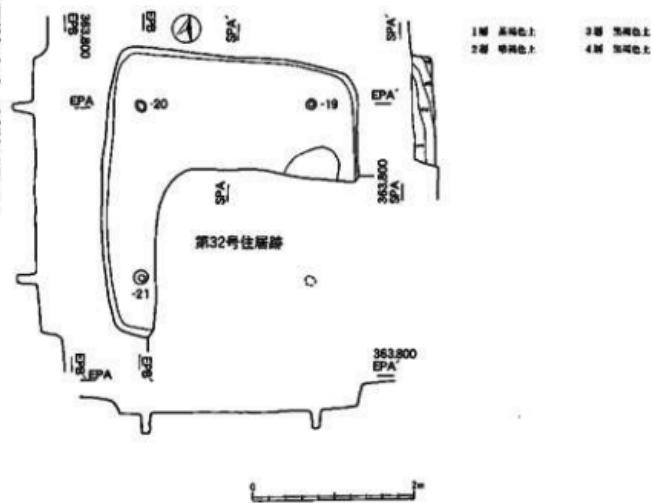


第37号住居跡・炉・焼土平面図

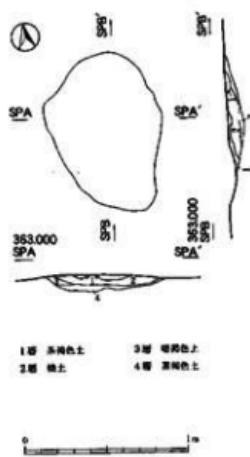
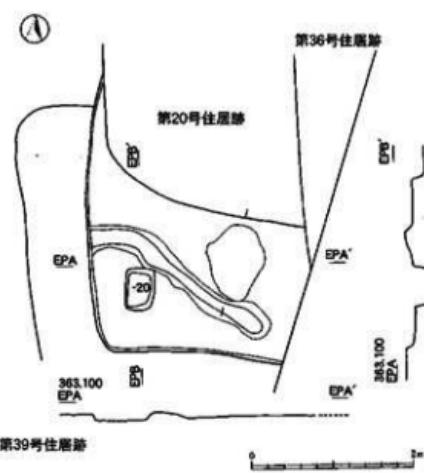


第37号住居跡遺物出土位置

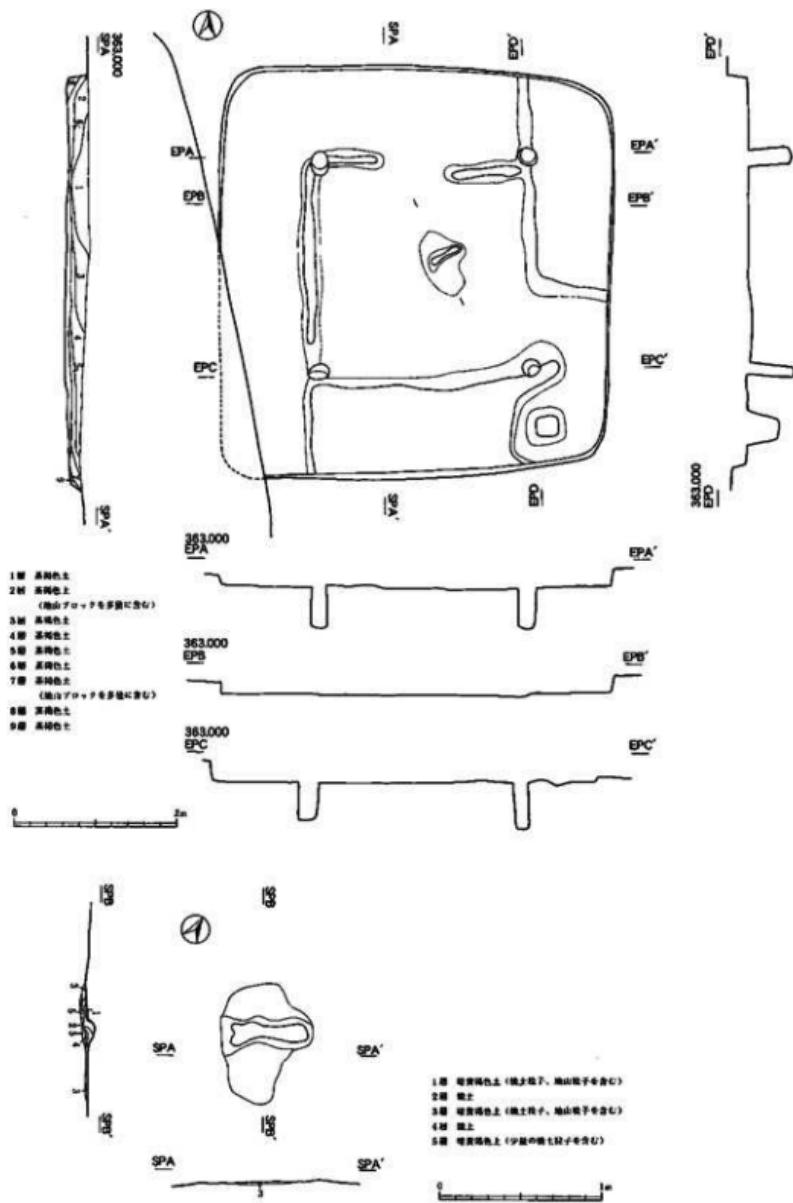
圖版三八



第38号住居跡

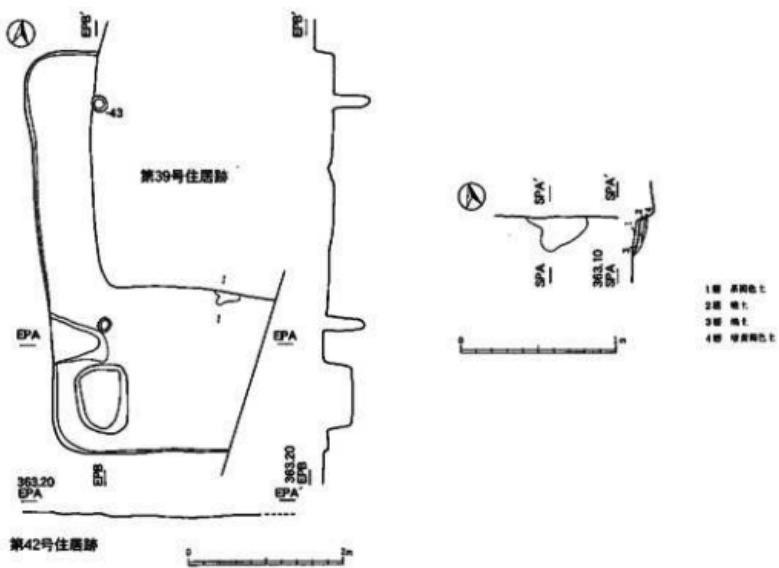
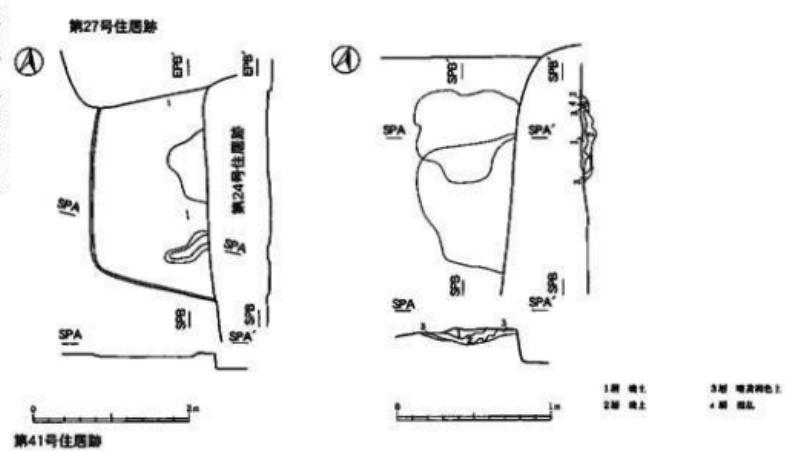


第38・39号住居跡・炉平面図

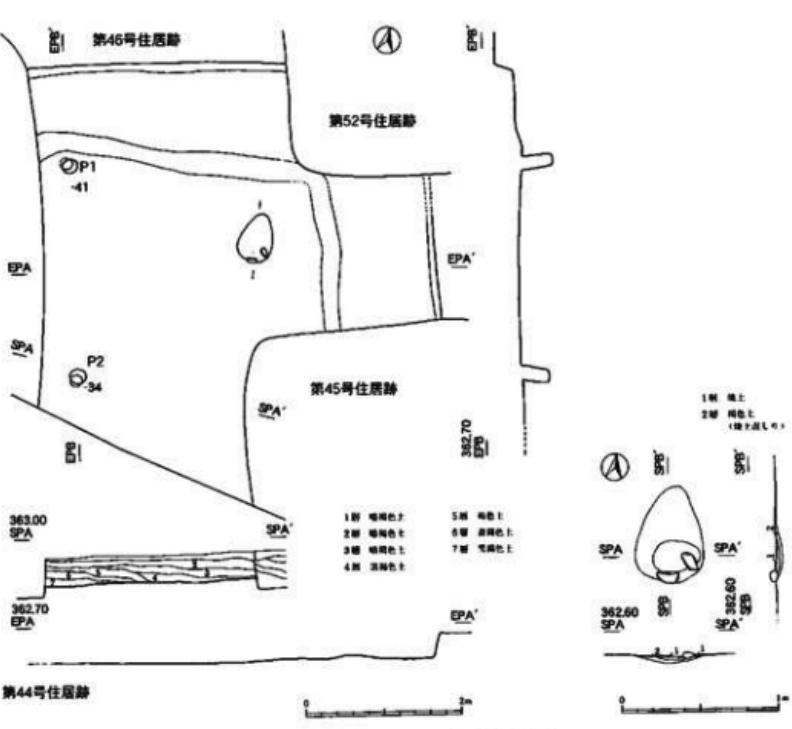


第40号住居跡・炉平面図

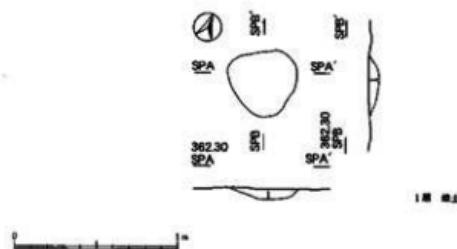
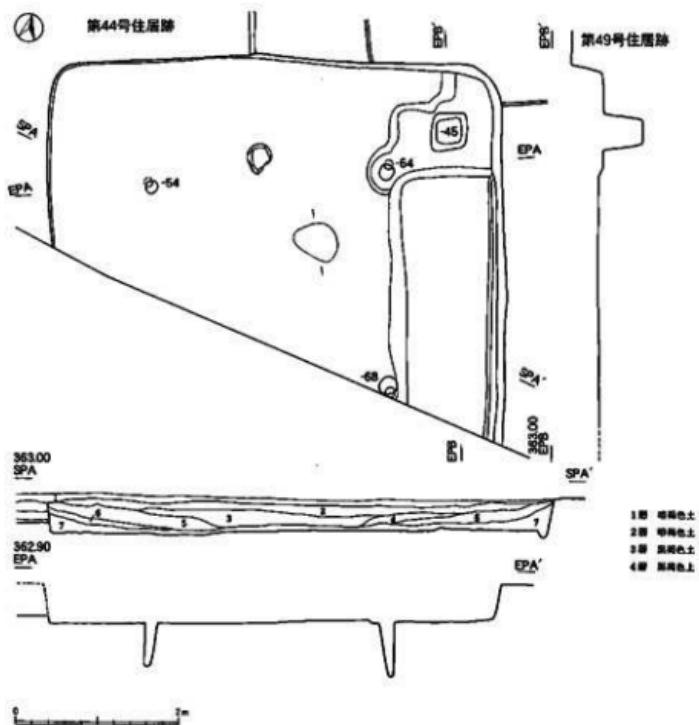
圖版四〇 遺構実測図



第41・42号住居跡・炉平面図

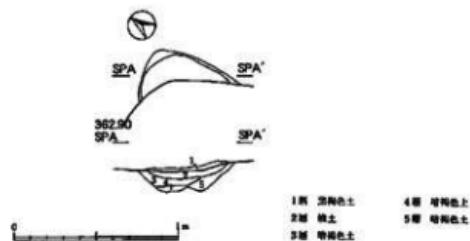
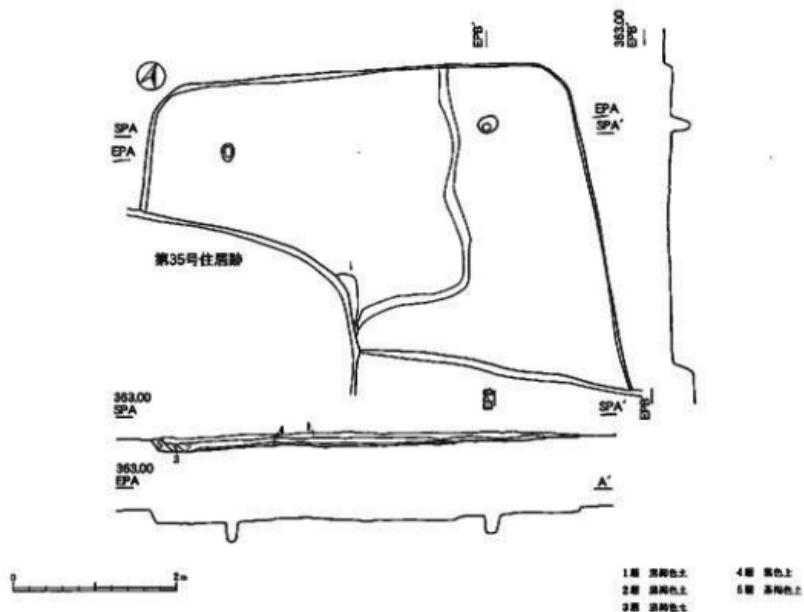


第43・44号住居跡・炉平面図



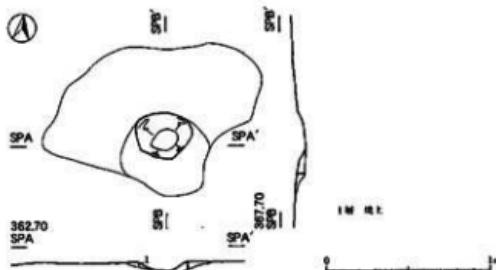
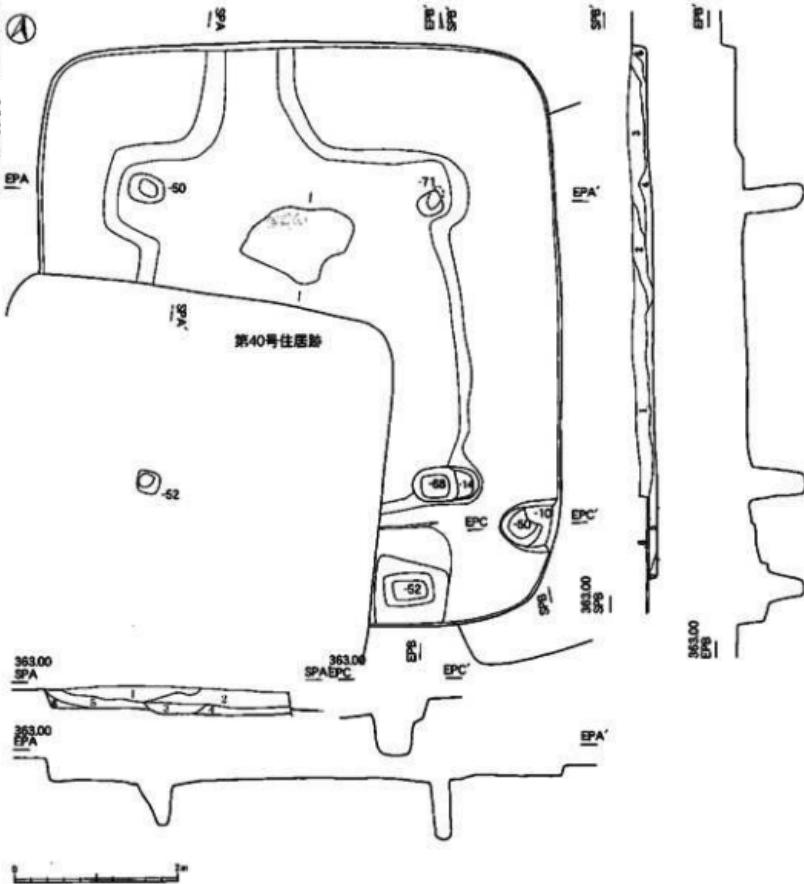
第45号住居跡・炉平面図

III 四断面
造構実測図

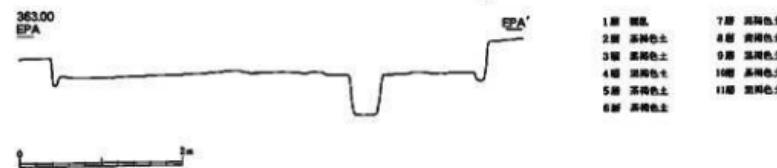
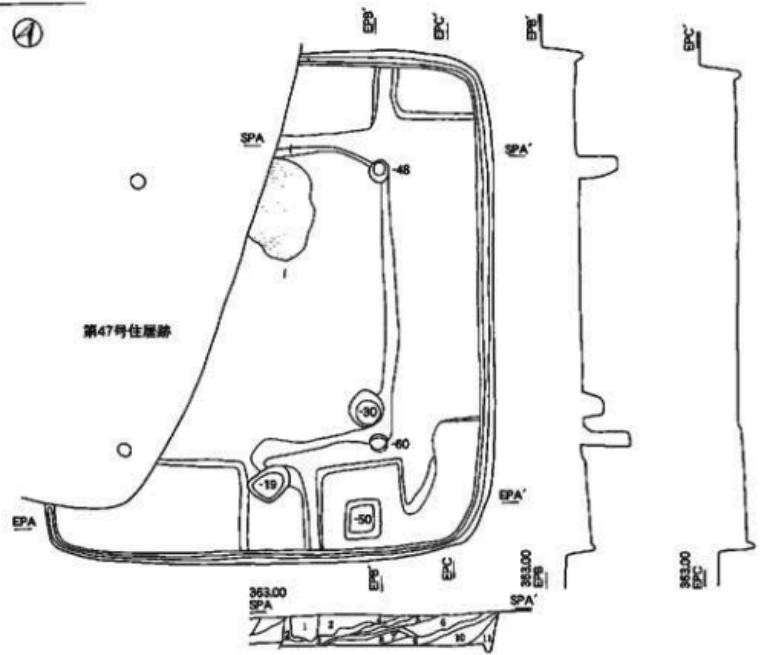


第46号住居跡・炉平面図

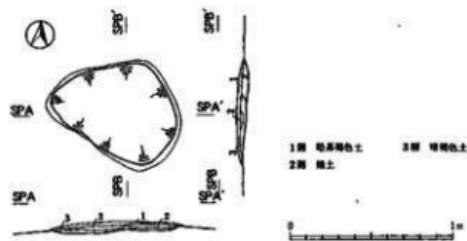
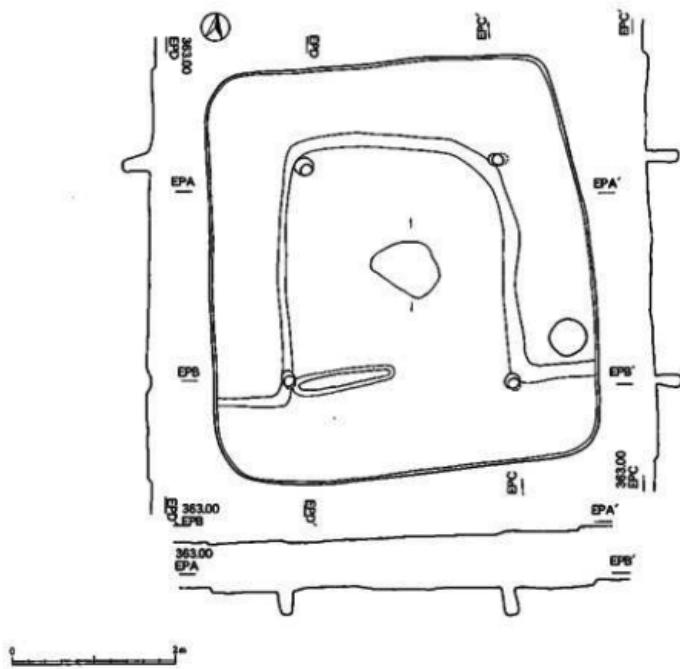
圖版四四 遺構実測図



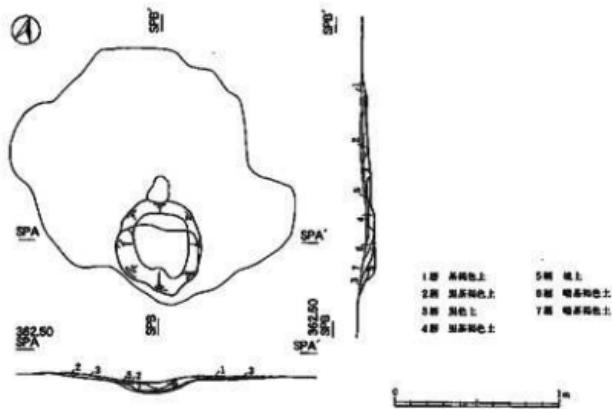
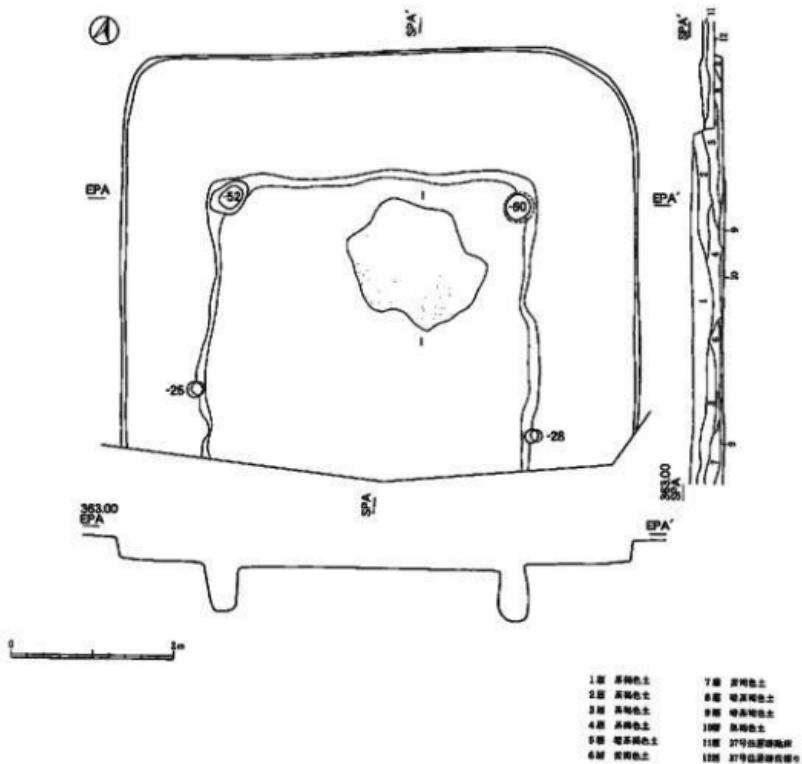
第47号住居跡・炉平面図



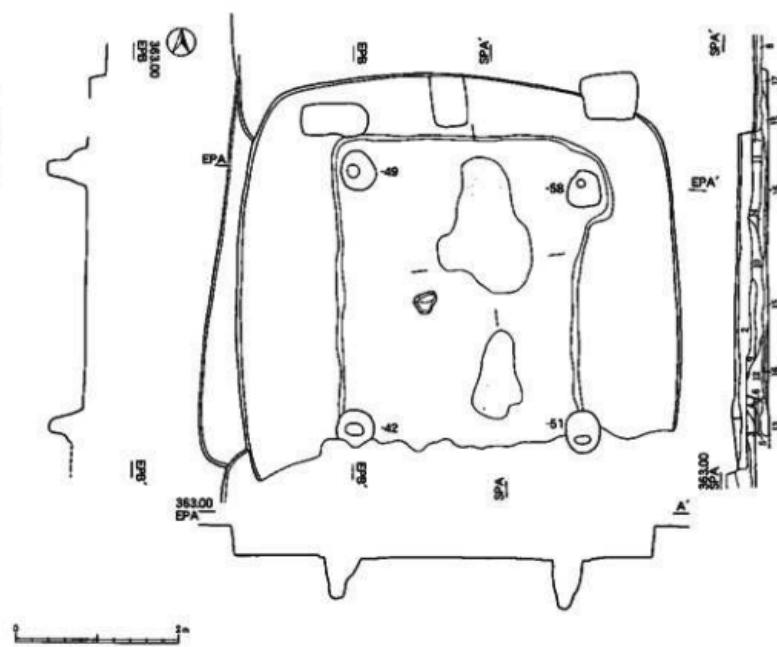
第48号住居跡・炉平面図



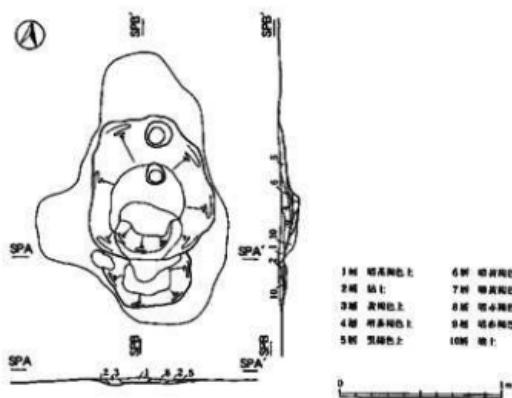
第49号住居跡・炉平面図



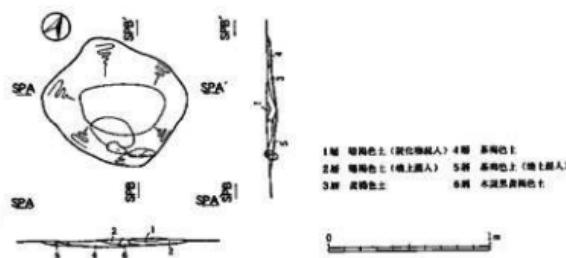
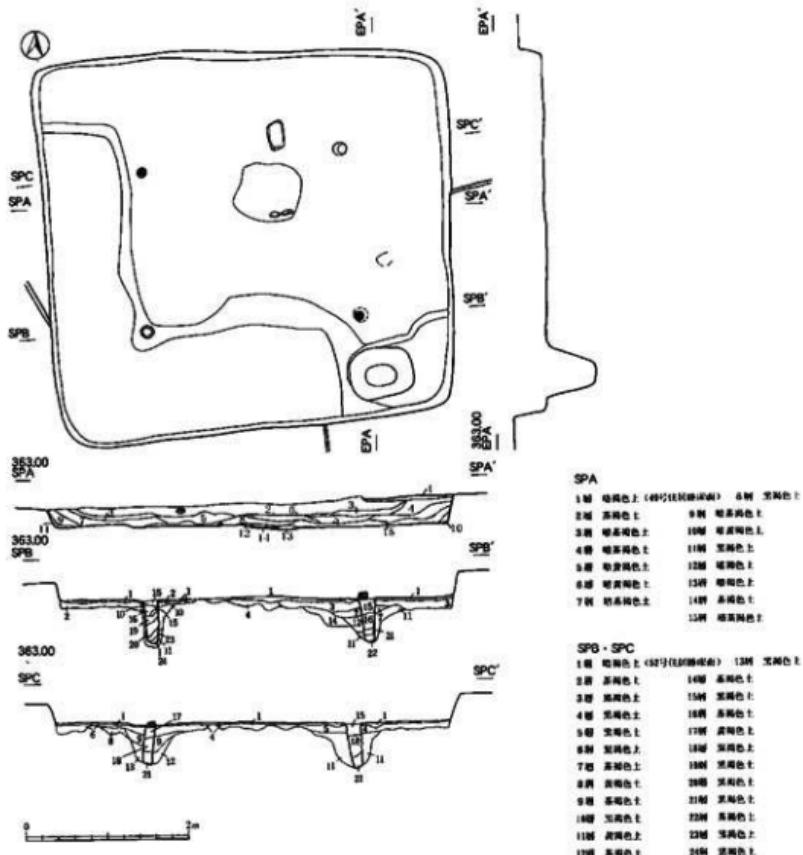
第50号住居跡・炉平面図



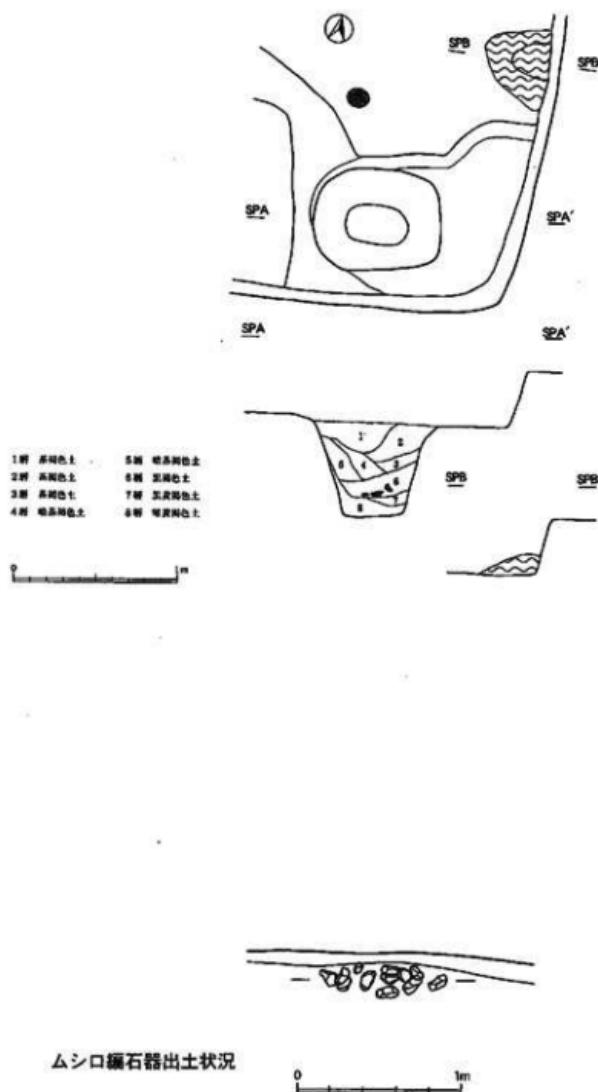
- 1号 37号往復螺旋狀
- 2号 37号螺旋狀螺旋
- 3号 增厚螺旋土
- 4号 增厚螺旋土
- 5号 50号往復螺旋狀
- 6号 50号往復螺旋狀
- 7号 34号往復螺旋狀
- 8号 34号往復螺旋狀
- 9号 增厚色土
- 10号 增厚色土
- 11号 增厚色土
- 12号 增厚色土
- 13号 增厚色土
- 14号 增厚色土
- 15号 增厚色土
- 16号 增厚色土
- 17号 增厚色土



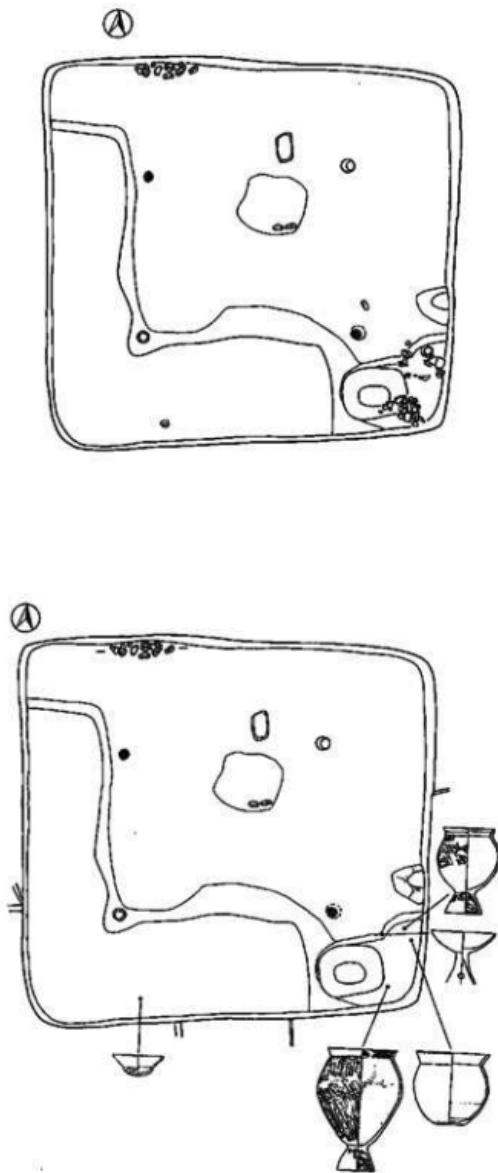
第51号住居跡・炉平面図



第52号住居跡・炉平面図

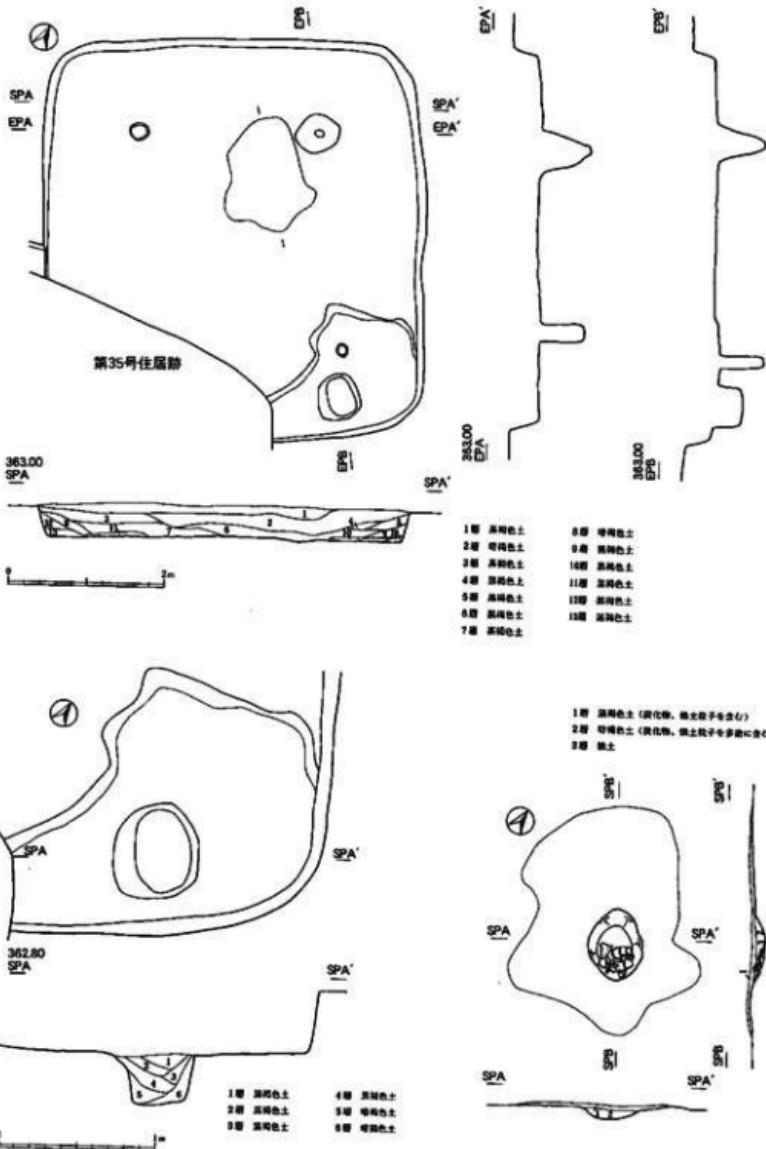


第52号住居跡貯藏穴及びムシロ縞石器微細図

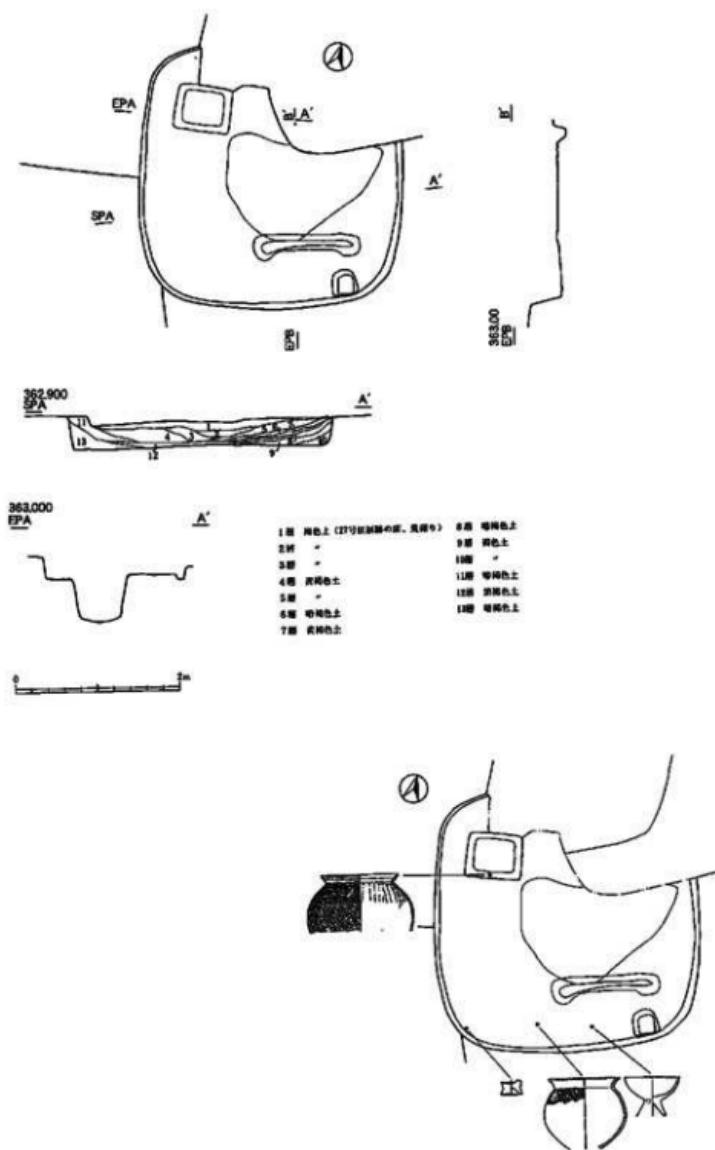


第52号住居跡遺物出土状況・出土位置

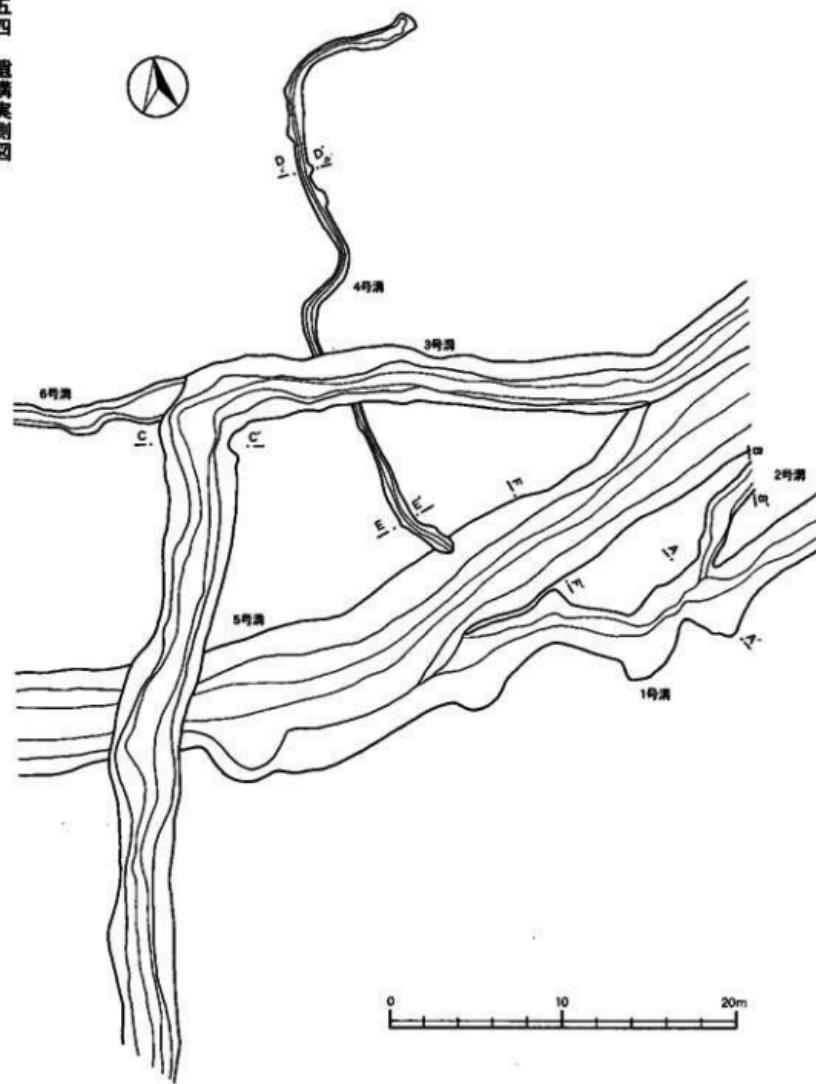
圖版五—遺構實測圖



第53号住居跡・貯藏穴・炉平面図



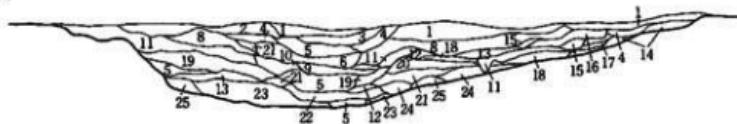
第54号住居跡平面図及び、出土遺物位置図



第1~6号溝平面圖

363.200
SPA

SPA'



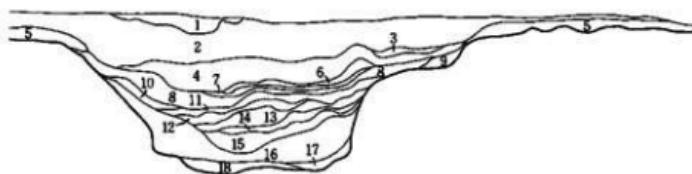
1号溝

1号溝 (A-A')

- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1層 單灰褐色土 (小粒の砂粒子を含む。粘性なし) | 14層 黒褐色土 (やや大粒の砂粒子を含み、粘性あり) |
| 2層 單灰褐色土 (小粒の砂粒子を含む。粘性なし) | 15層 黒褐色土ブロック (大粒の砂粒子を多量に含む) |
| 3層 單茶褐色土 (小粒の砂粒子を含む) | 16層 砂層 (粒子が細かい) |
| 4層 茶褐色土 (小粒の砂粒子を含む) | 17層 砂層 (粒子がやや大きい) |
| 5層 砂層 (大粒の小石を多量に含む) | 18層 單茶褐色土 (小粒の砂粒子を含む) |
| 6層 砂層 (やや大粒の小石を多量に含む) | 19層 單黃褐色砂質土 (大粒の砂粒子を含む) |
| 7層 單褐色砂質土 (小粒の砂粒子を含む。粘性なし) | 20層 單茶褐色土 (小粒の砂粒子を含む) |
| 8層 單褐色砂質土 (小粒の砂粒子を含む。粘性あり) | 21層 單茶褐色土 (小粒の砂粒子を含む、粘性あり) |
| 9層 單褐色砂質土 (小粒の砂粒子を含む。締まりあり) | 22層 灰褐色砂質土 (小石を含む) |
| 10層 茶褐色砂質土 (小粒の砂粒子を含む。粘性なし) | 23層 灰褐色砂質土 (大粒の砂粒子を含む) |
| 11層 單茶褐色土 (小粒の砂粒子を含む) | 24層 灰褐色砂質土 (やや大粒の砂粒子を含む) |
| 12層 單茶褐色土 (小粒の砂粒子を含む、粘性あり) | |
| 13層 單黑褐色土 (小粒の砂粒子を含む、粘性あり) | |

362.400
SPA

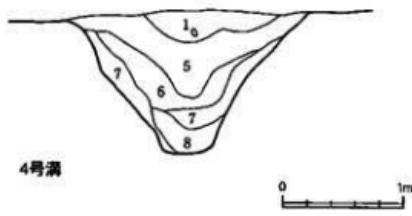
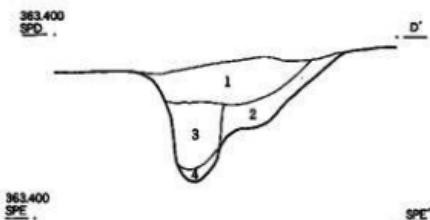
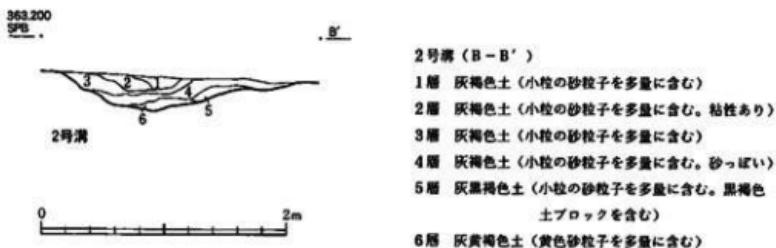
SPA'



3号溝

3号溝 (C-C')

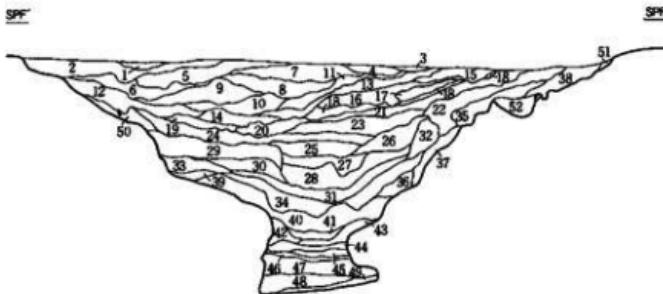
- | | |
|--------------------------------|-------------------------|
| 1層 灰褐色土 (きめの細かい砂粒を多量に含む) | 10層 黄褐色土 (砂層。大粒の砂粒子を含む) |
| 2層 灰褐色土 (1層より暗。きめの細かい砂粒を多量に含む) | 11層 灰白色土 (砂層。きめの細かい砂粒子) |
| 3層 灰白色土 (砂層。小粒の白色の砂粒を混入) | 12層 黄褐色土 (きめの細かい砂粒子を混入) |
| 4層 灰褐色土 (2層より大粒の砂粒を混入) | 13層 灰褐色土 (きめの細かい砂粒子を混入) |
| 5層 茶褐色土 (大粒の白色の砂粒子を混入) | 14層 單褐色土 (黒褐色土ブロックを混入) |
| 6層 灰白色土 (砂層。黄色砂粒子を多量に含む) | 15層 灰褐色土 (黒褐色土ブロックを混入) |
| 7層 茶褐色土 (きめの細かい砂粒を混入) | 16層 單褐色土 (黒褐色土ブロックを混入) |
| 8層 灰白色土 (砂層。大粒の砂粒子を主とする) | 17層 單褐色土 (きめの細かい砂粒子を混入) |
| 9層 茶褐色土 (小粒の砂粒子を多量に混入) | 18層 灰白色土 (砂層。暗褐色ブロック混入) |



4号溝

- 1層 暗茶褐色土 (大粒の砂粒子を多量に含む)
- 2層 暗茶褐色土 (黄褐色土ブロックを含む)
- 3層 暗茶褐色土 (大粒の砂粒子を多量に含む)
- 4層 暗茶褐色土 (大粒の砂粒子を多量に含む)
- 5層 暗茶褐色土 (大粒の砂粒子を多量に含む)
- 6層 暗茶褐色土 (黄褐色砂粒子を多量に含む)
- 7層 黄褐色土 (黄褐色砂粒子をブロック状に含む)
- 8層 暗褐色土 (黄褐色の砂粒子を含む)

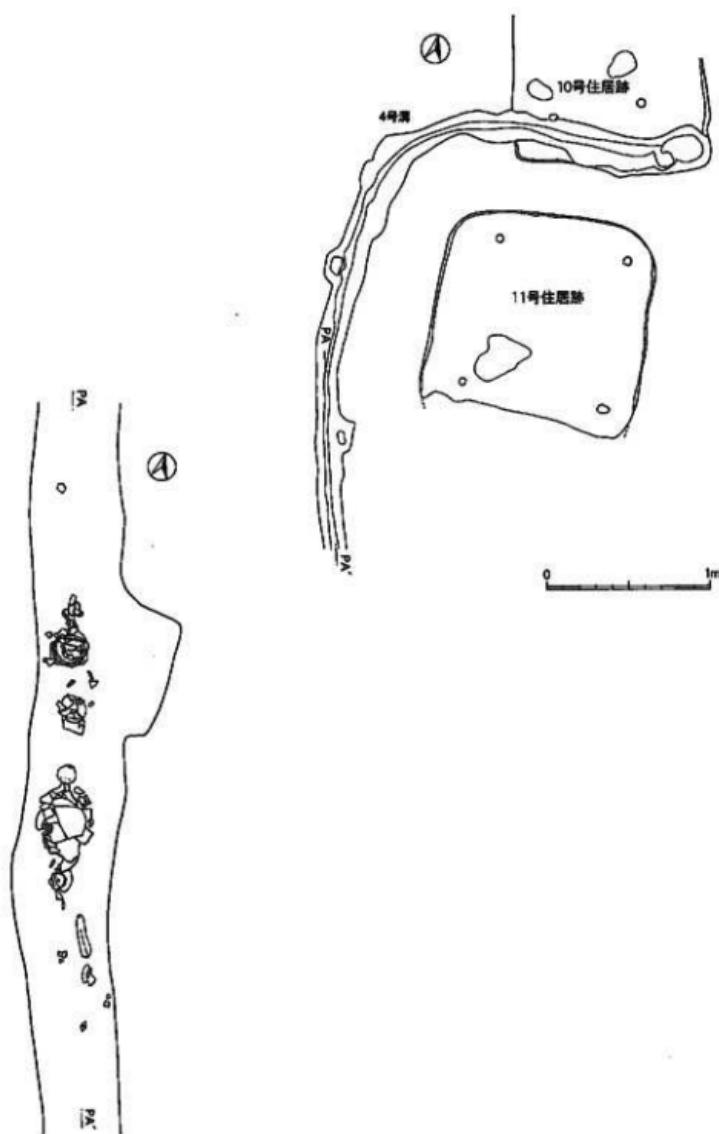
第2・4号溝断面図



5号溝 (F-F')

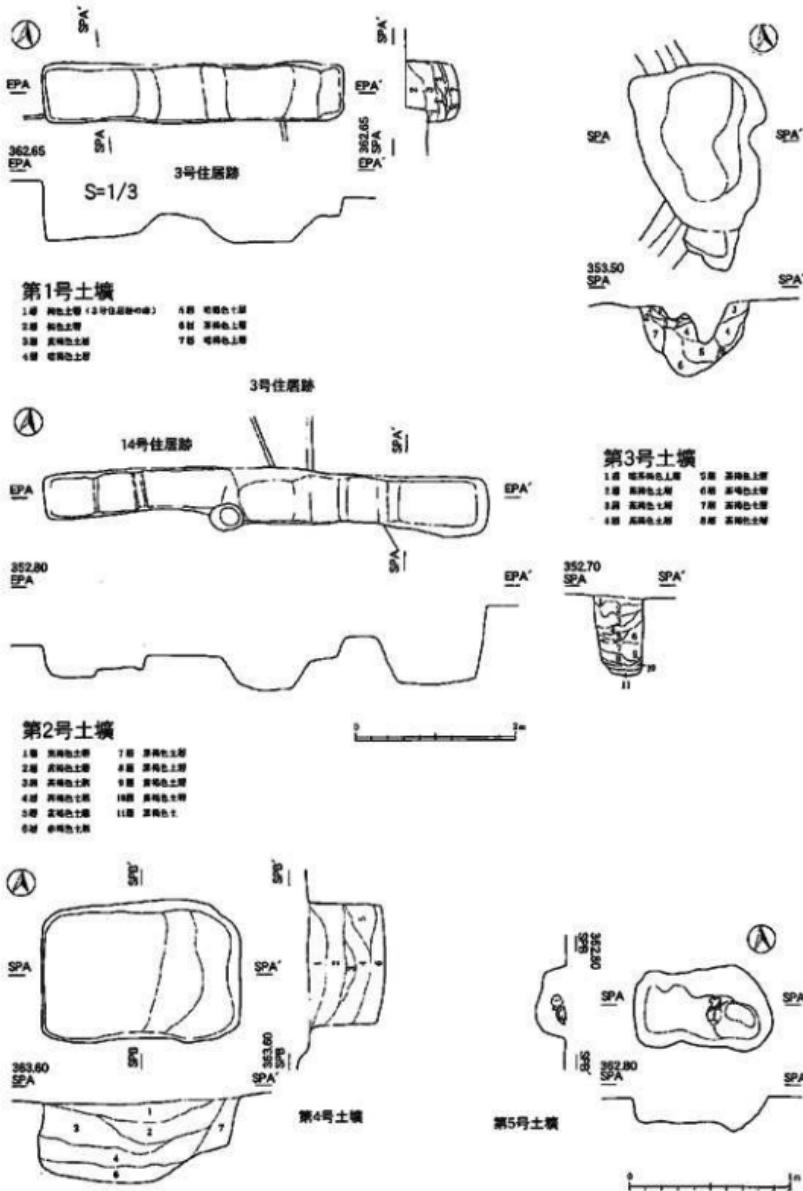
- | | |
|--------------------------------|----------------------------|
| 1層 黒褐色土（粘性強く、砂粒を含む） | 29層 黒褐色土（粘土層。砂粒を少量含む） |
| 2層 褐色土（黒褐色砂質ブロックを含む） | 30層 灰色土（砂粒を多量に含む） |
| 3層 黄褐色土（細かい粒子） | 31層 灰色土（砂粒を多量に含む。鉄分付着） |
| 4層 褐色土（砂質ブロック、砂粒を混入） | 32層 灰褐色土（砂粒を含む） |
| 5層 褐色土（黒褐色、砂質ブロック、砂粒を含む） | 33層 灰色土（砂粒を含む） |
| 6層 赤褐色土（沙層。赤褐色の若い砂粒） | 34層 灰色土（砂粒を含む。鉄分付着） |
| 7層 褐色土（細かい砂粒を多量に混入） | 35層 灰褐色土（砂粒を含む） |
| 8層 褐色土（7層より粘性が強い） | 36層 黄褐色土（地山粒子を多量に含む。） |
| 9層 灰褐色土（砂粒が帯状に混入） | 37層 黄褐色土（地山粒子を多量に含む） |
| 10層 褐色土（砂粒を多量に含む） | 38層 黄褐色土（砂粒、黄褐色土ブロックを含む） |
| 11層 灰褐色粘土（砂粒を少量含む） | 39層 黄褐色土（砂質。地山粒子で構成） |
| 12層 褐色土（沙層。砂粒は粗い。黒色砂層などが帯状に混入） | 40層 灰色土（砂粒が多量、白色砂粒ブロック） |
| 13層 灰褐色土（粗い砂粒、褐色土ブロックを混入） | 41層 灰色土（白色砂粒を多量に含む） |
| 14層 赤褐色土（沙層。粗い砂粒で構成） | 42層 灰褐色土（砂粒を少量含む） |
| 15層 灰褐色土（砂粒と黒褐色土ブロックを混入） | 43層 灰褐色土（砂粒、カーボン粒子を少量含む） |
| 16層 灰黒褐色土（沙層が帯状に混入） | 44層 灰褐色土（砂粒、黄色粒子を含む） |
| 17層 褐色土（沙層。粗い砂粒で構成） | 45層 灰褐色土（砂粒を少量含む） |
| 18層 黒色土（粘土層。少量の砂粒を混入） | 46層 灰褐色土（小礫を含む） |
| 19層 灰褐色土（砂粒を多量に含む） | 47層 灰褐色土（褐色土ブロック、砂粒を多量に含む） |
| 20層 灰褐色土（粘土層。砂粒を少量含む） | 48層 灰褐色土（褐色土ブロック、小礫を含む） |
| 21層 灰褐色土（粘土層。砂粒を多量に含む） | 49層 錠層（小塊と粗い砂粒） |
| 22層 灰褐色土（砂粒を多量に含む） | 50層 棕色土（少量の砂粒を含む） |
| 23層 灰黒褐色土（砂粒を多量に含む） | 51層 灰褐色土（褐色土ブロックを含む） |
| 24層 灰黒褐色土（粘土層。砂粒を含む） | 52層 黄褐色土（黄褐色土で構成） |
| 25層 灰色土（砂粒を大量含む） | |
| 26層 灰色土（砂粒を少量含む） | |
| 27層 灰色土（粘土層。砂粒を少量含む） | |
| 28層 灰色土（粘土層。砂粒を多量含む） | |

第5号溝断面図

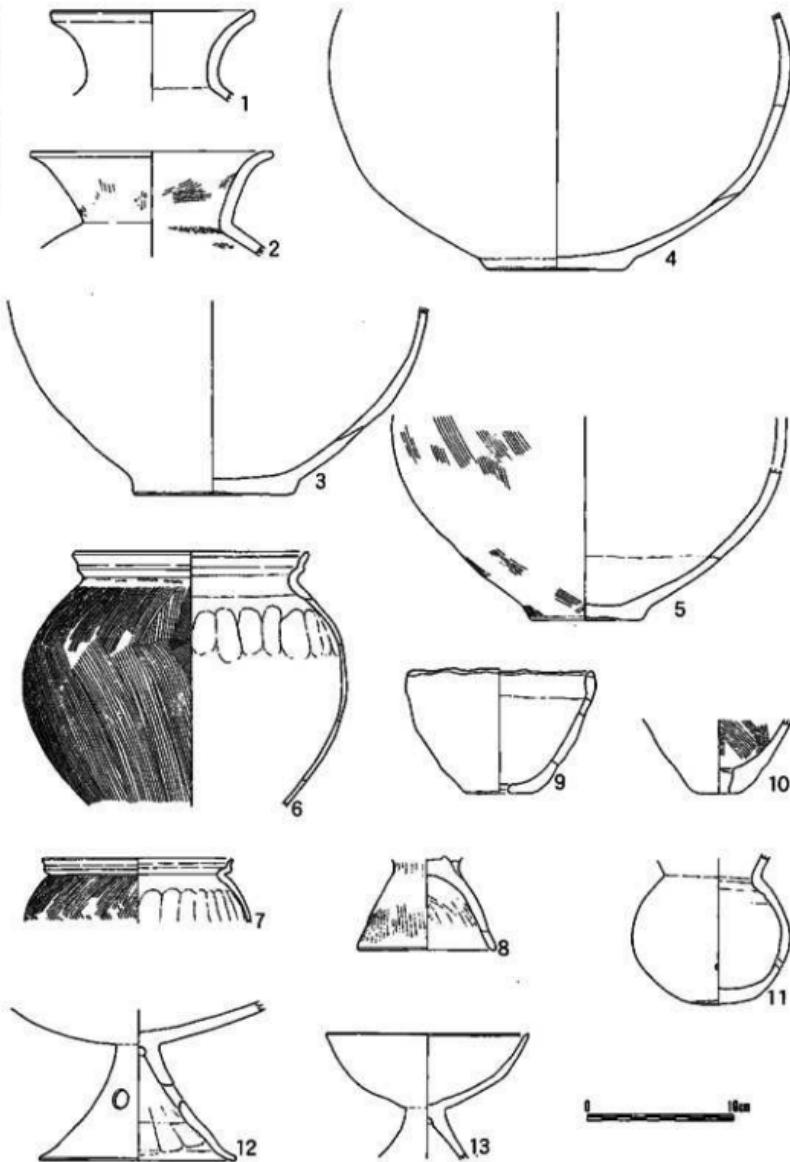


第4号溝遺物出土状況図

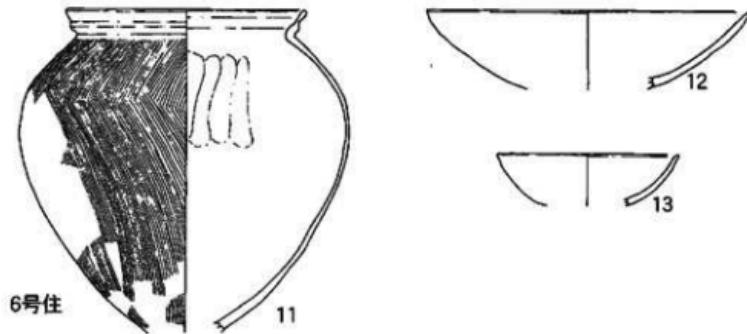
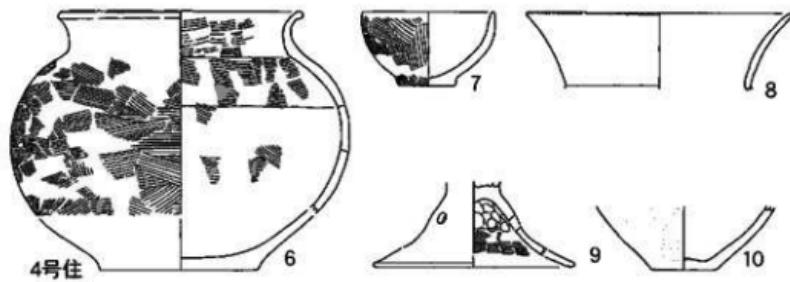
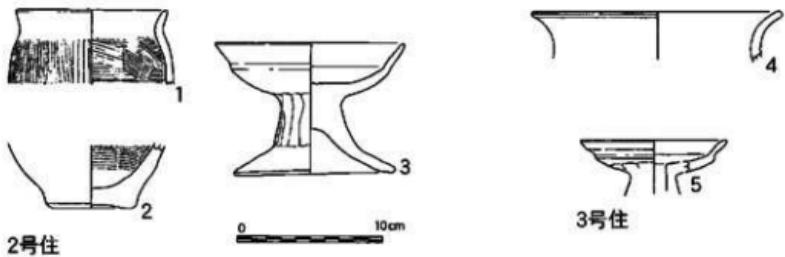
圖版五九 遺構実測図



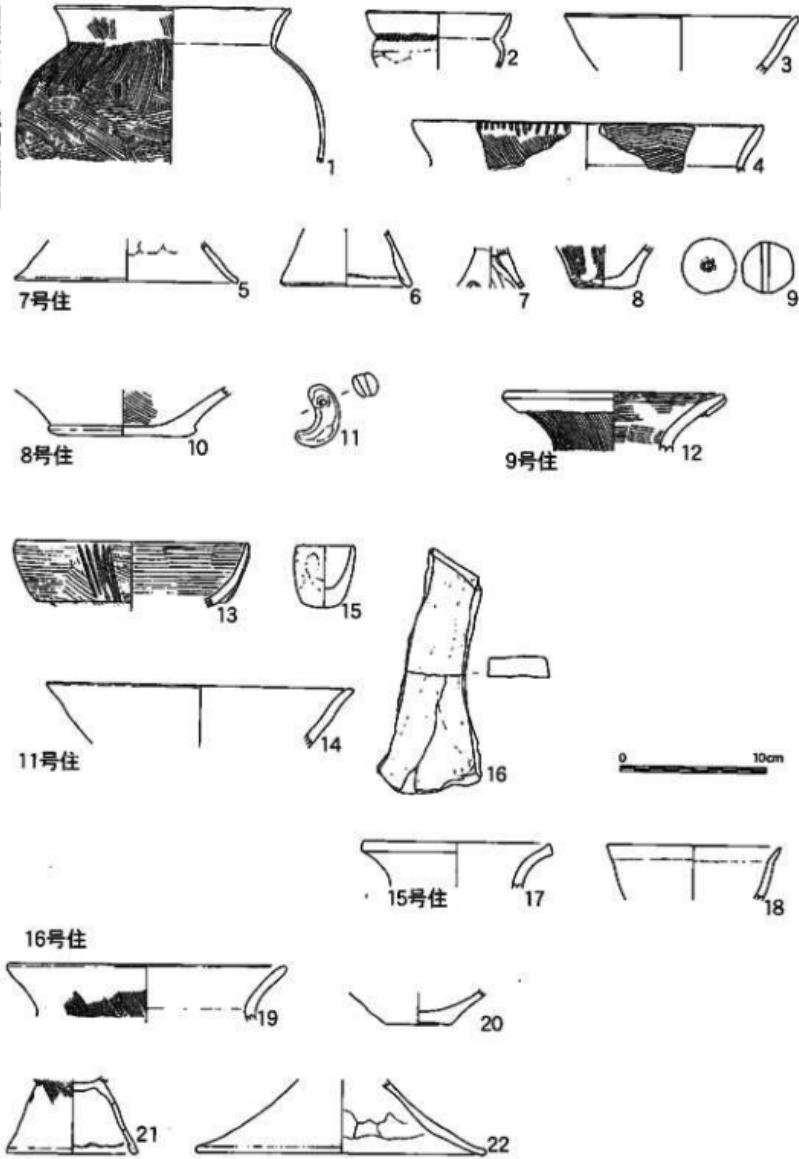
第1~5号土壤平面图



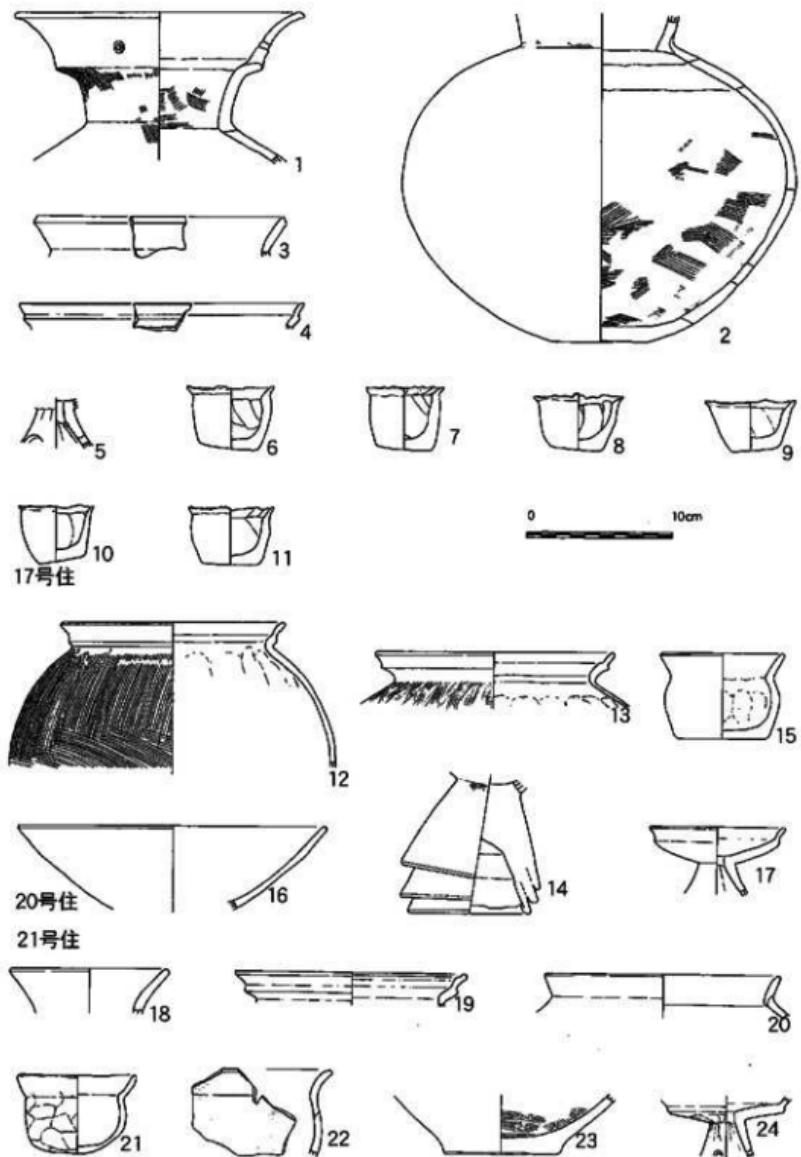
第1号住居跡出土遺物



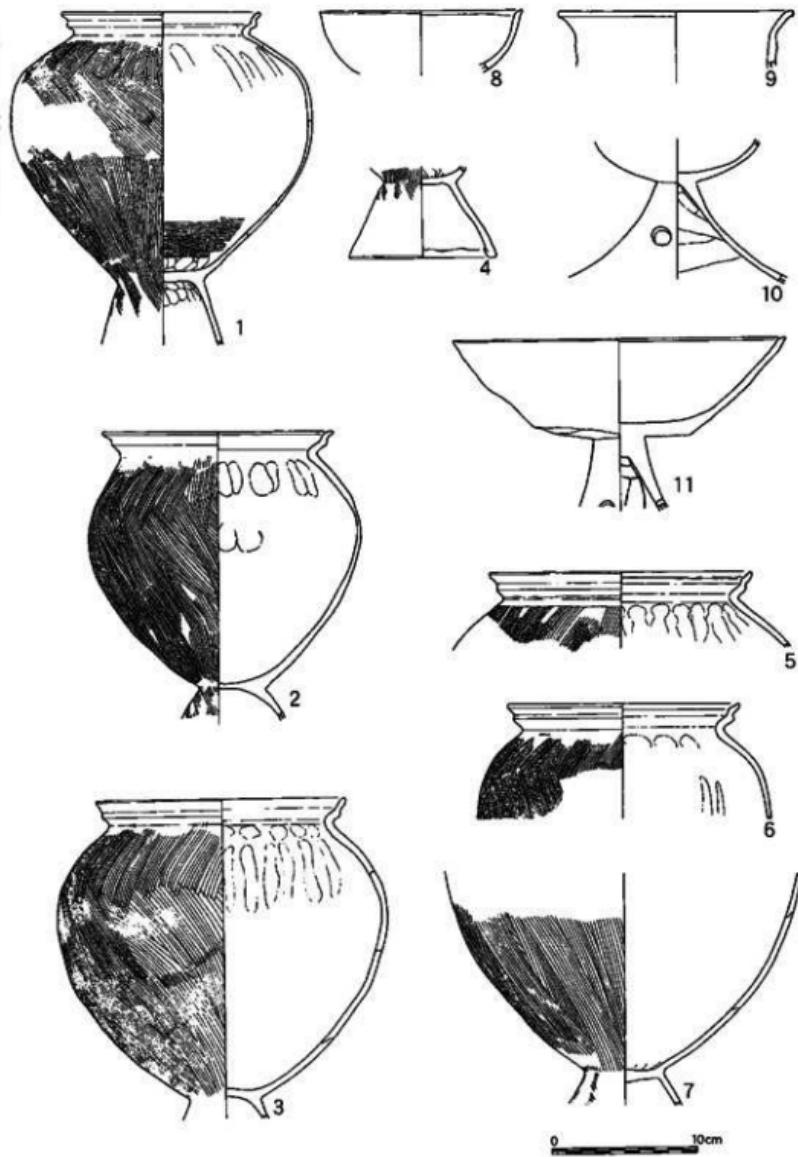
第2・3・4・6号住居跡出土遺物



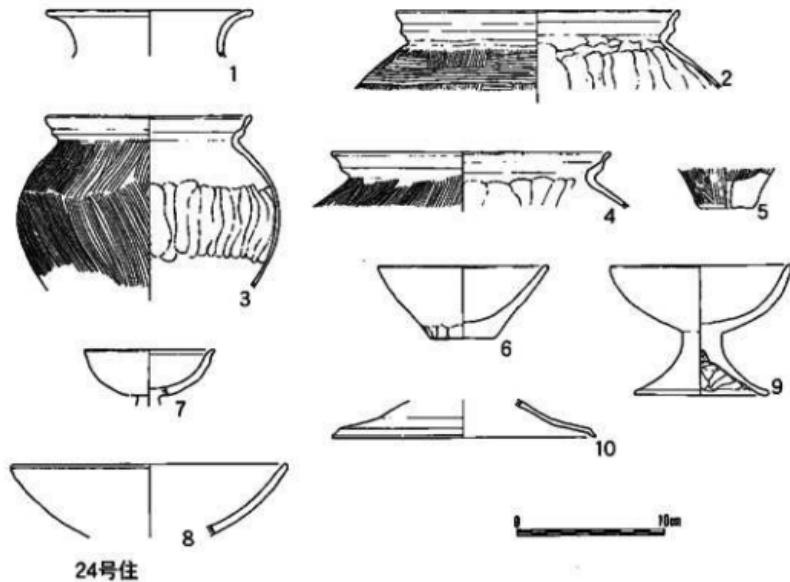
第7·8·9·11·15·16·号住居跡出土遺物



第17·20·21号住居跡出土遺物



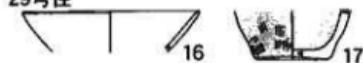
第22号住居跡出土遺物

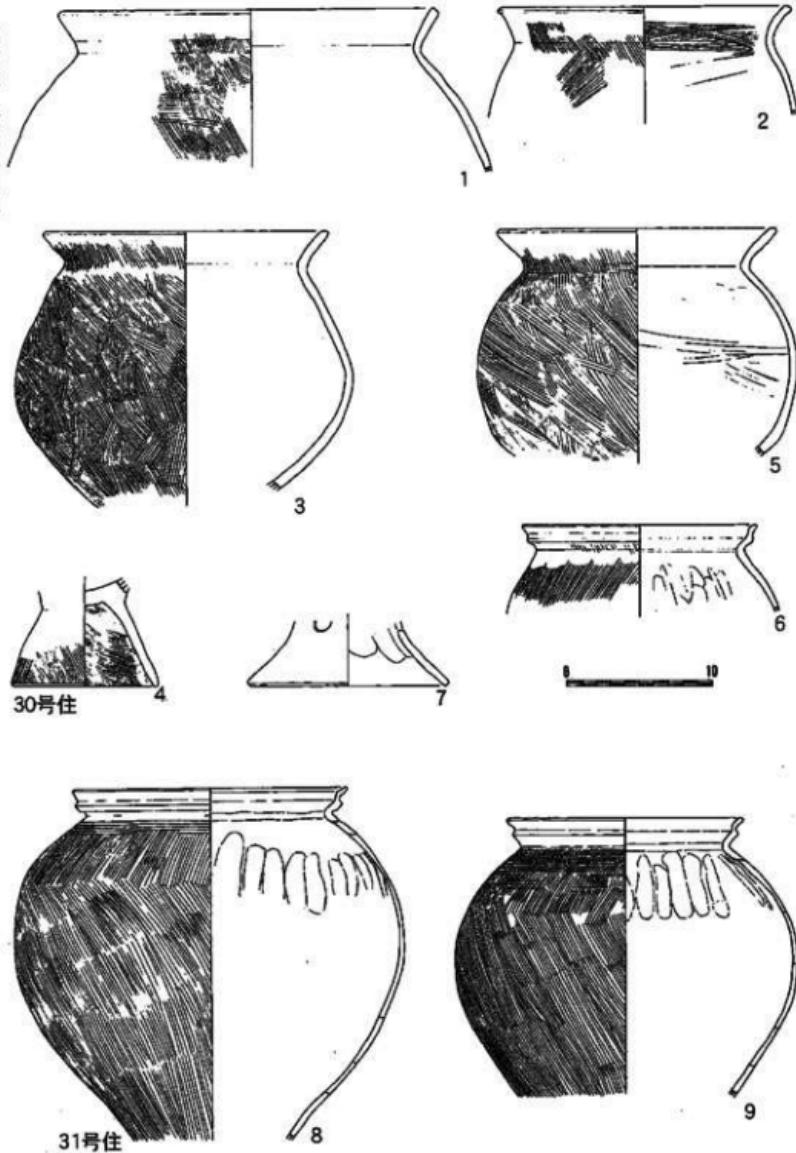


27号住

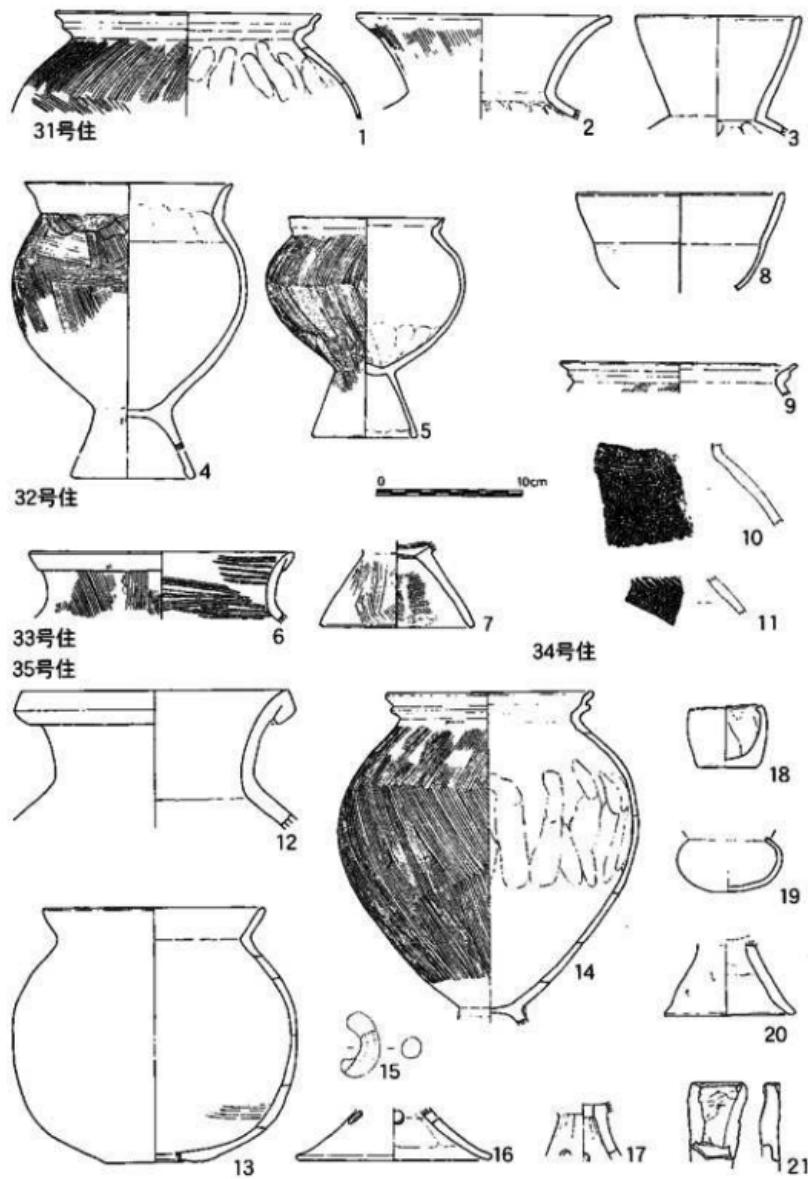


29号住

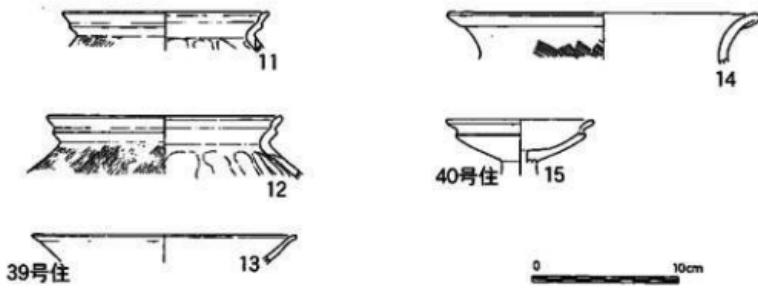
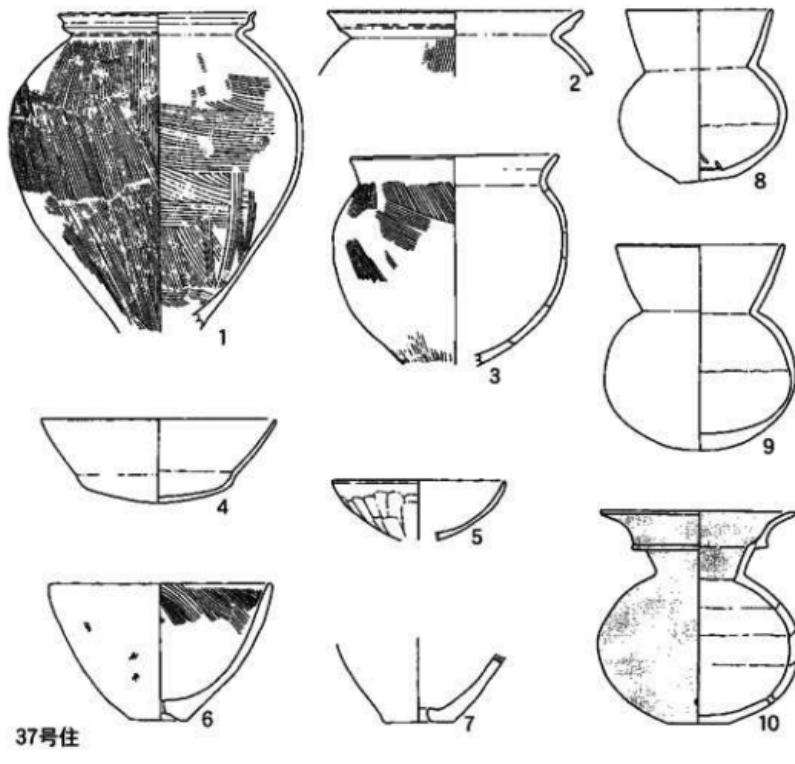




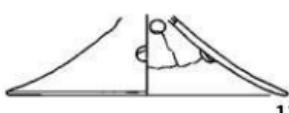
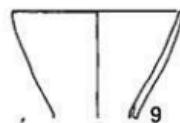
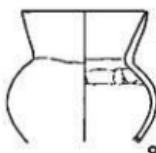
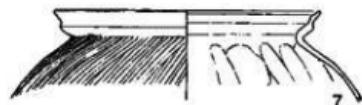
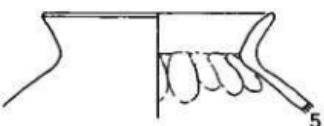
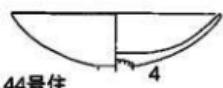
第30・31号住居跡出土遺物



第31・32・33・34・35号住居跡出土遺物



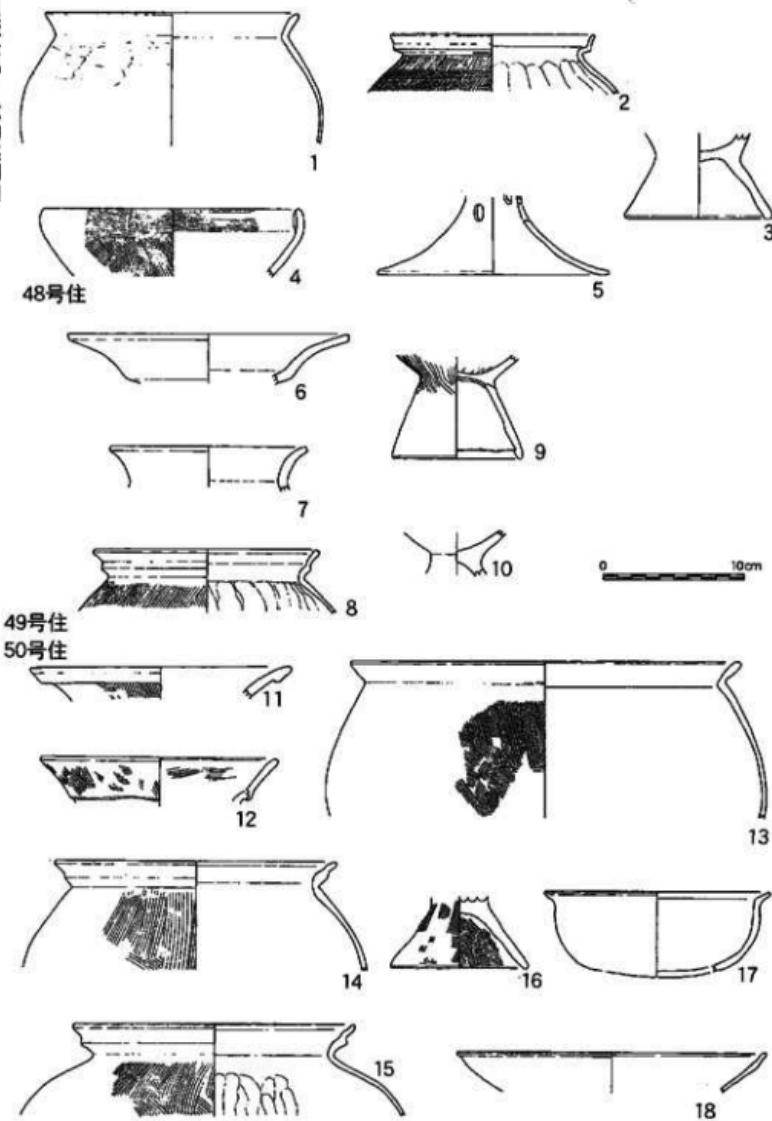
第37·39·40号住居跡出土遺物



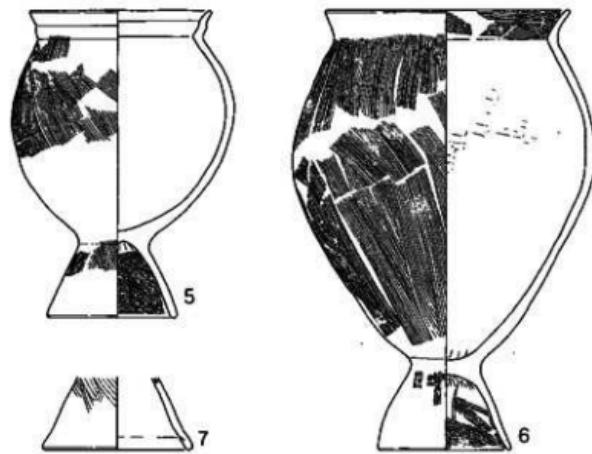
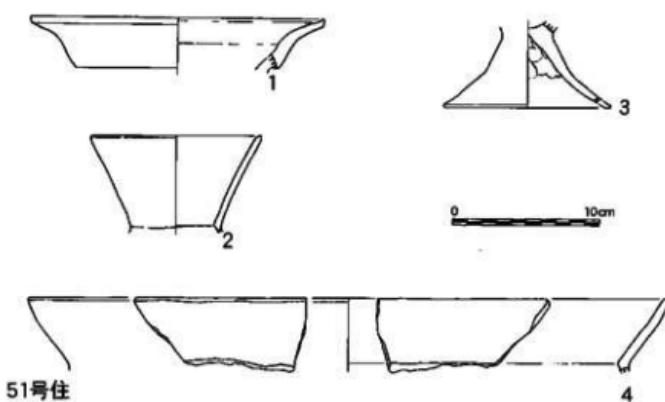
0 10cm



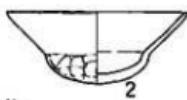
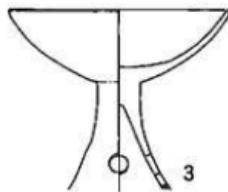
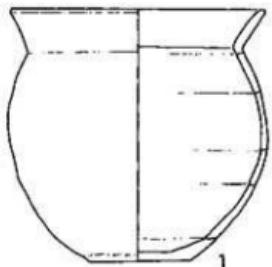
第42・44・45・47号住居出土遺物



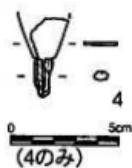
第48·49·50号住居跡出土遺物



51号住



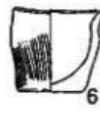
52号住



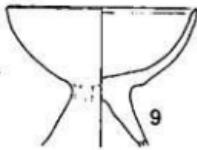
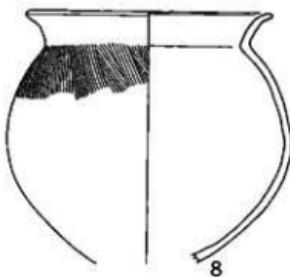
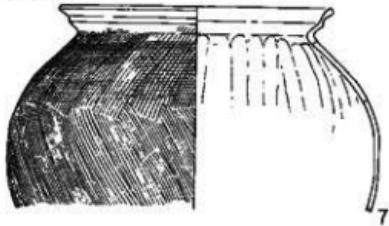
0 5cm
(4のみ)



53号住

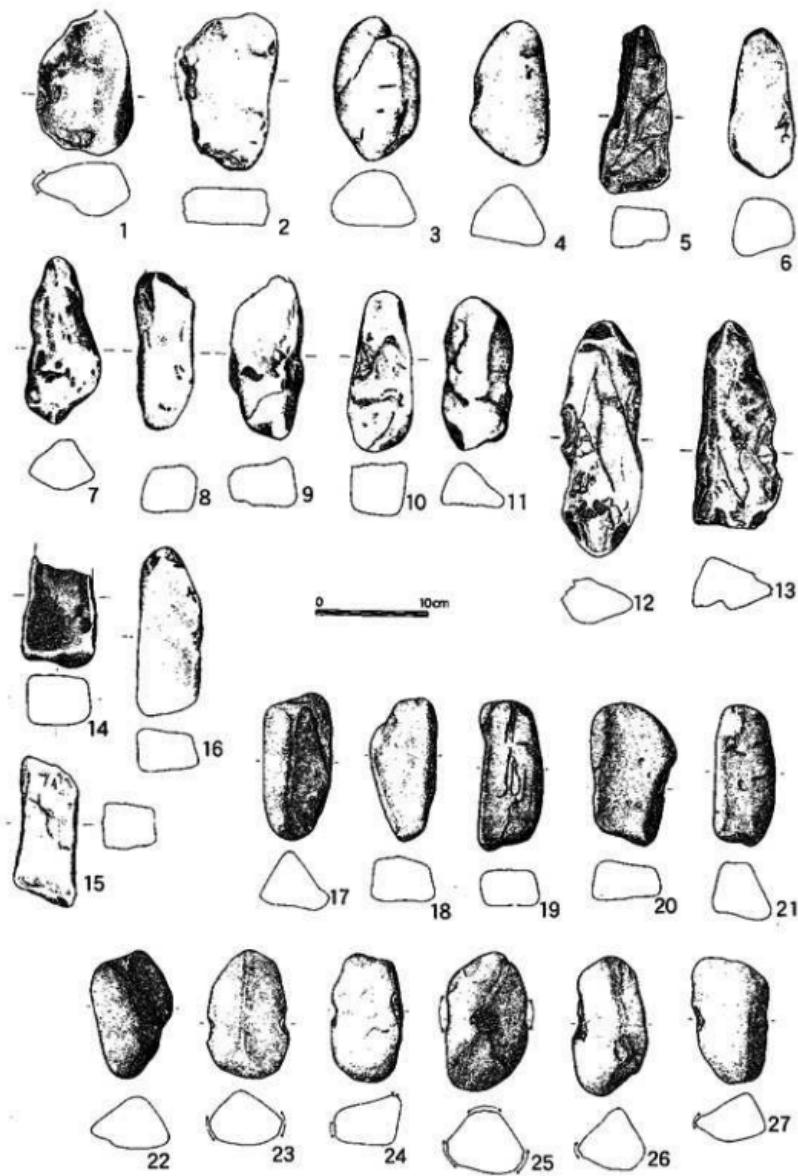


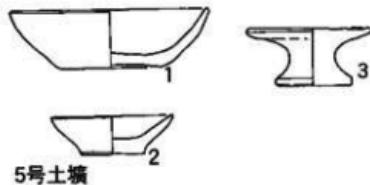
54号住



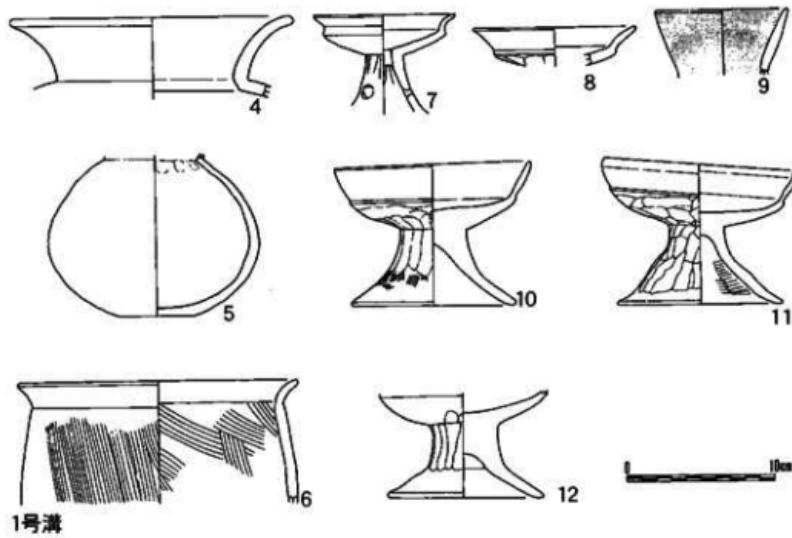
0 10cm

第52・53・54号住居跡出土遺物

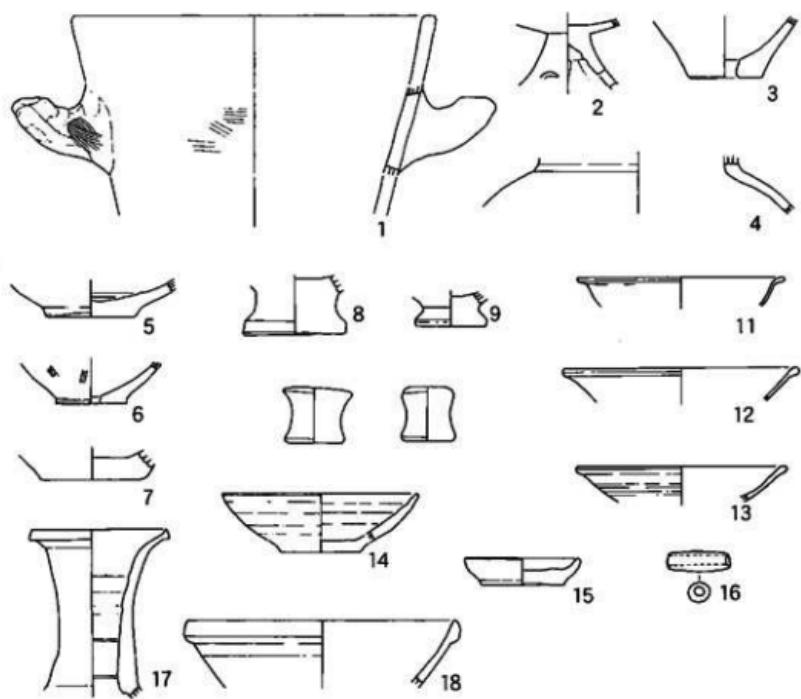




5号土壤

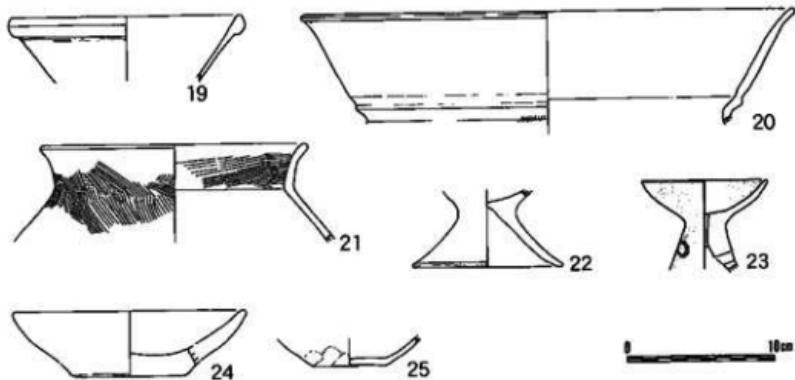


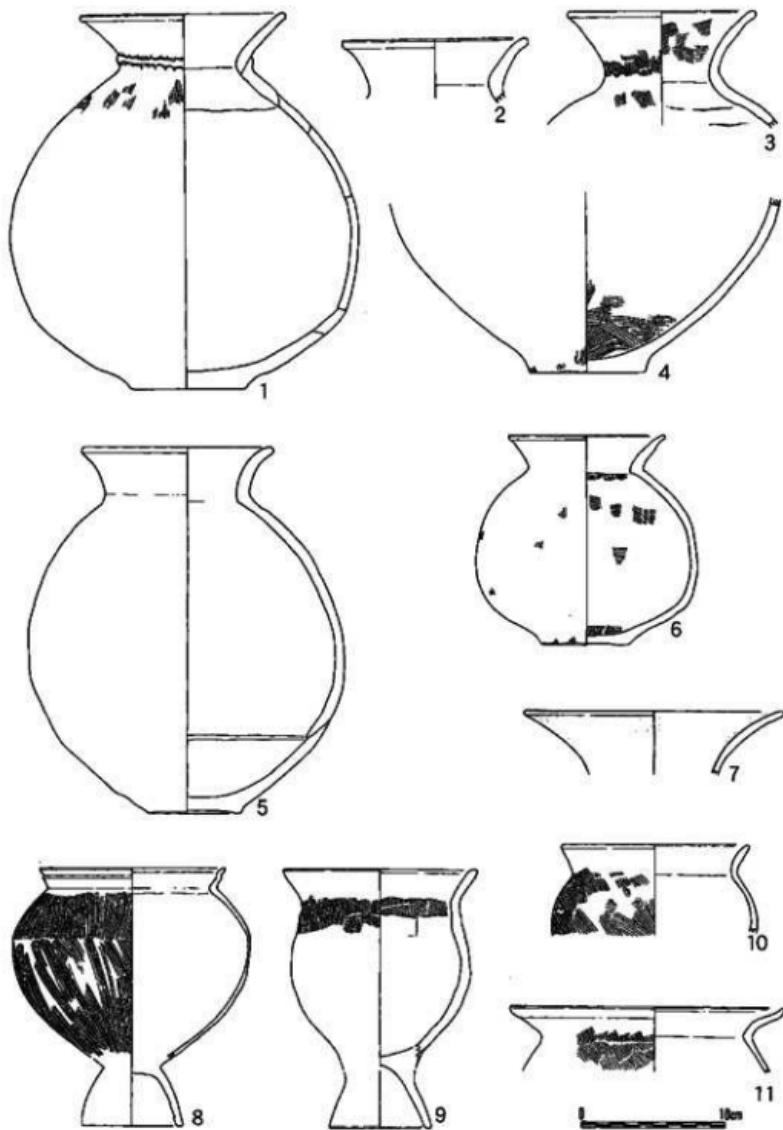
1号溝



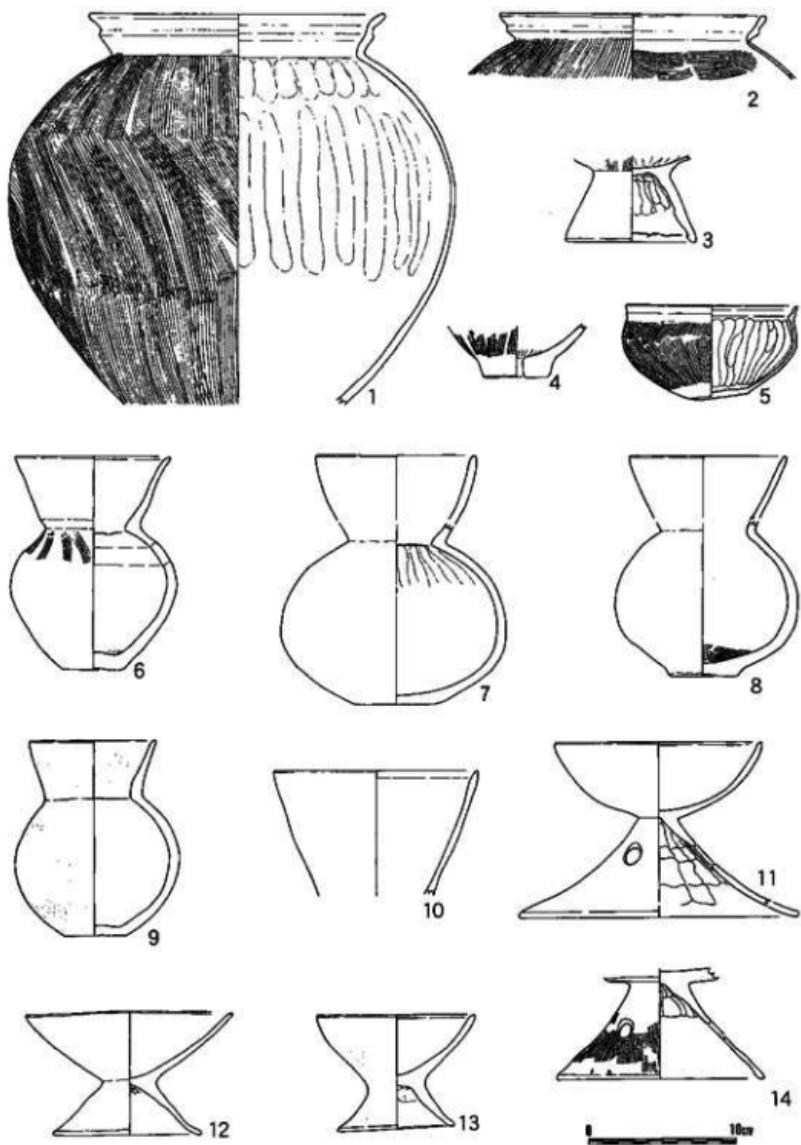
2号溝

3号溝

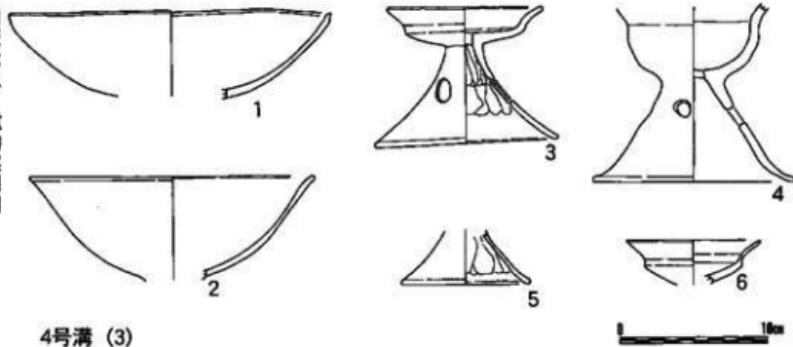




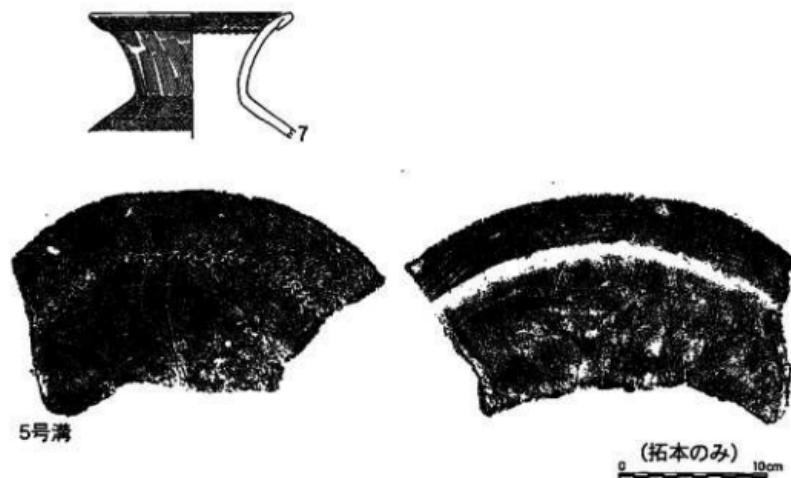
第4号溝出土遺物 (1)



第4号溝出土遺物 (2)

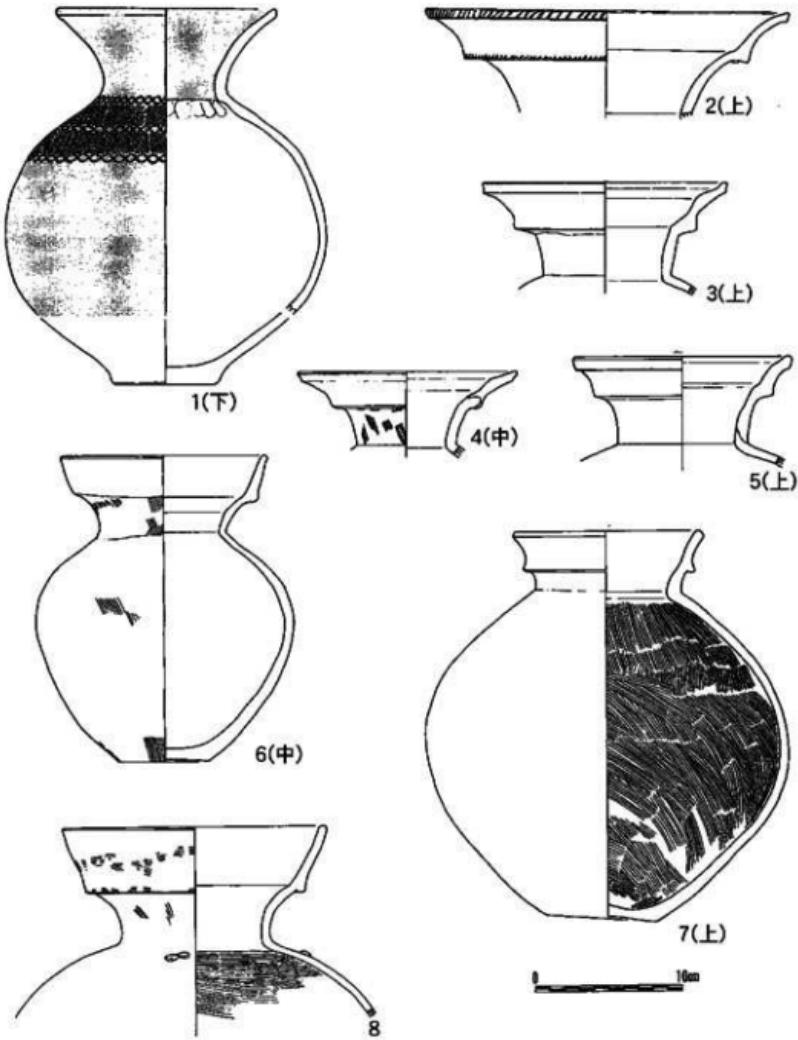


4号溝 (3)

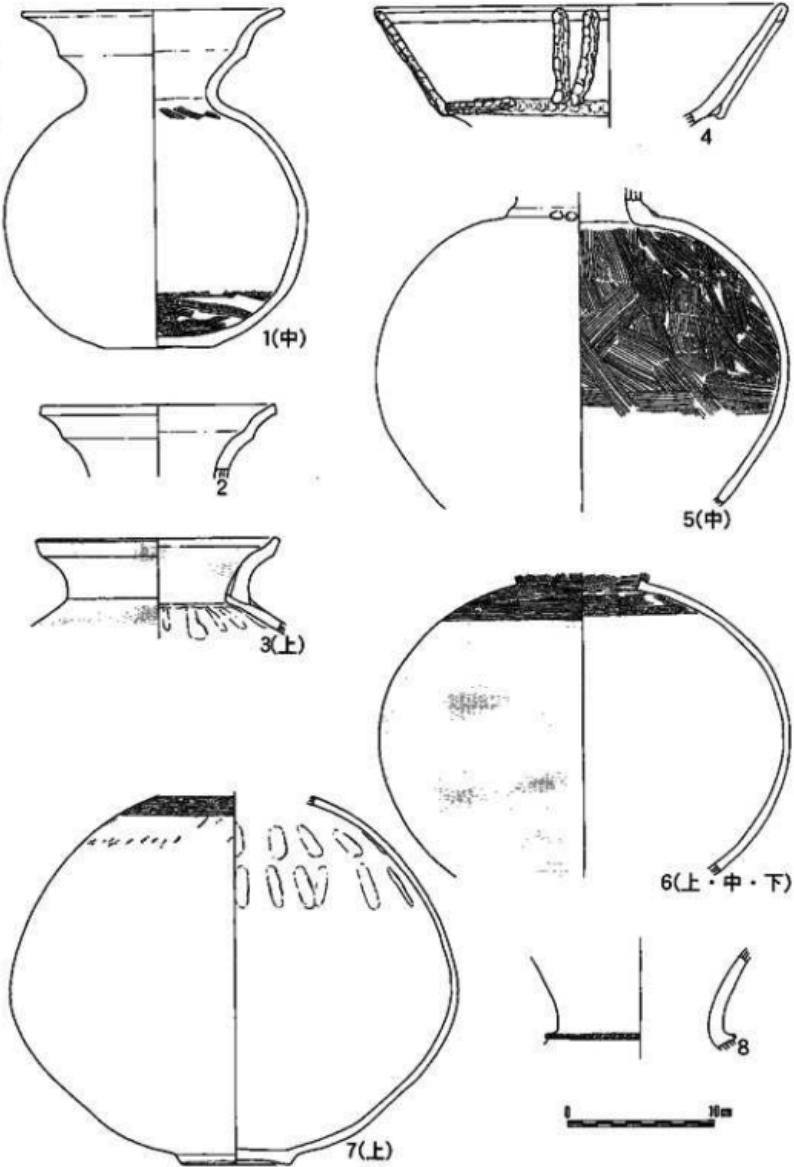


5号溝

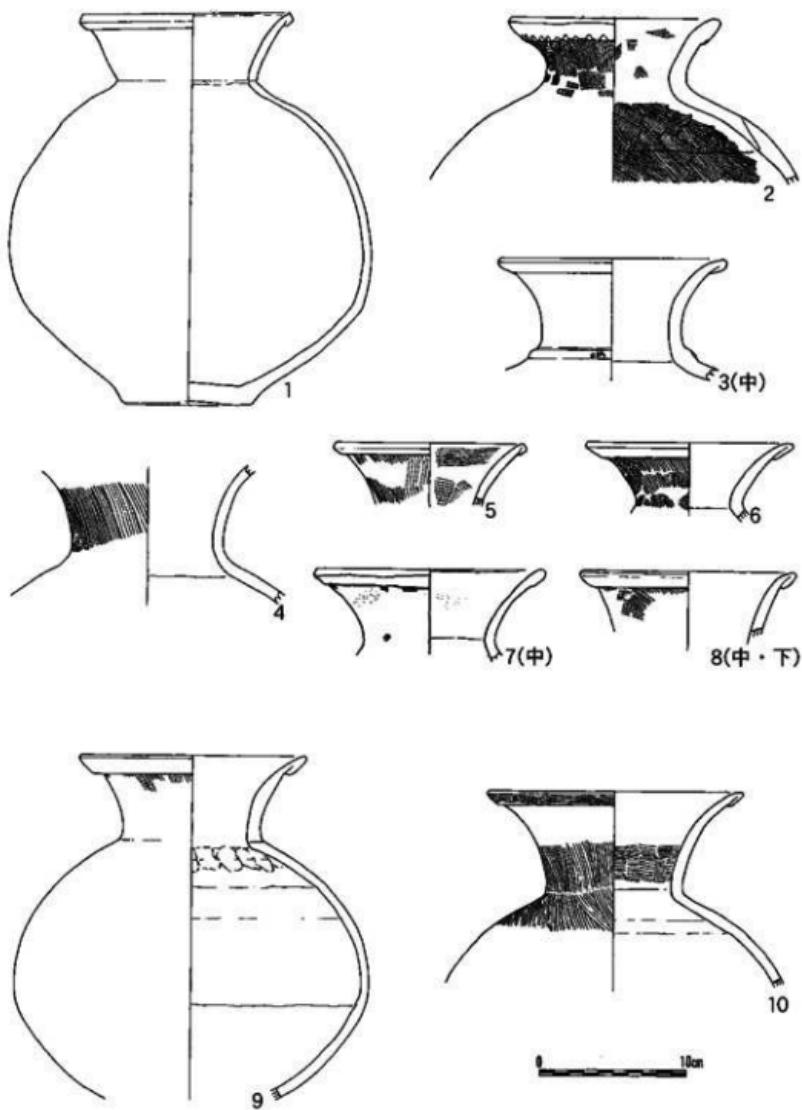
(拓本のみ) 10cm



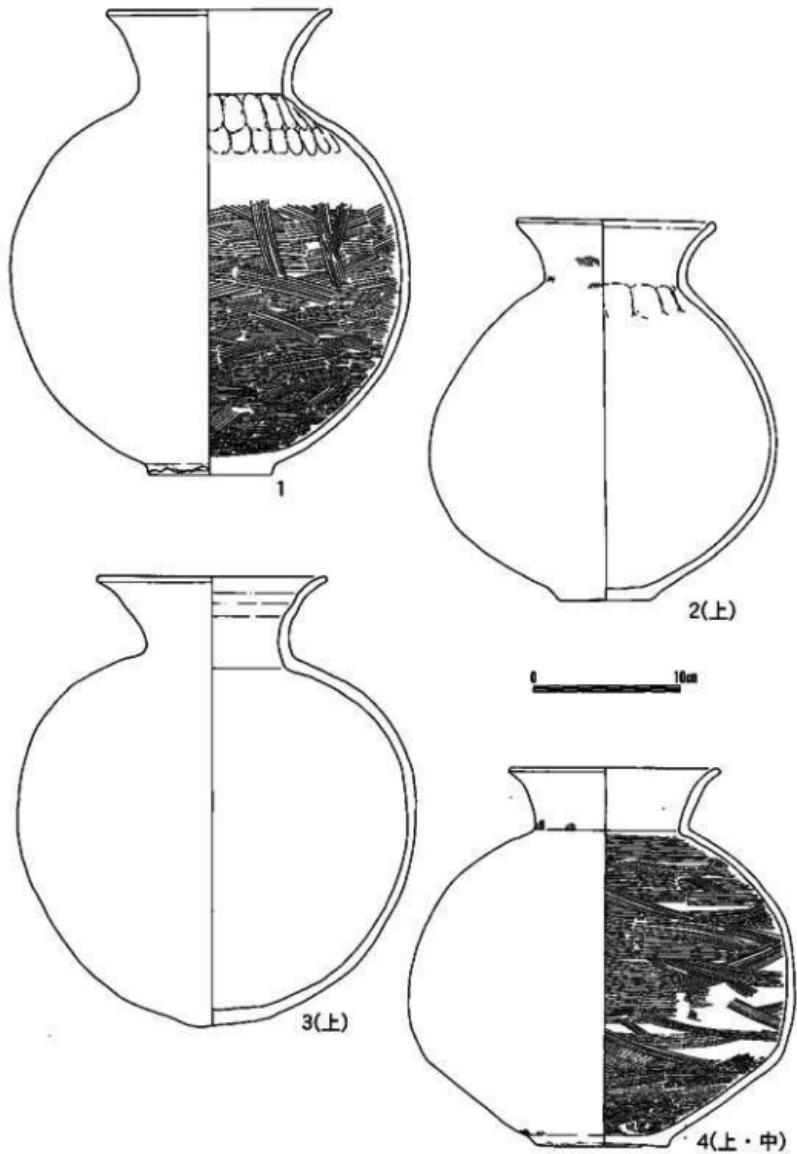
第5号溝出土遺物（2）



第5号溝出土遺物 (3)

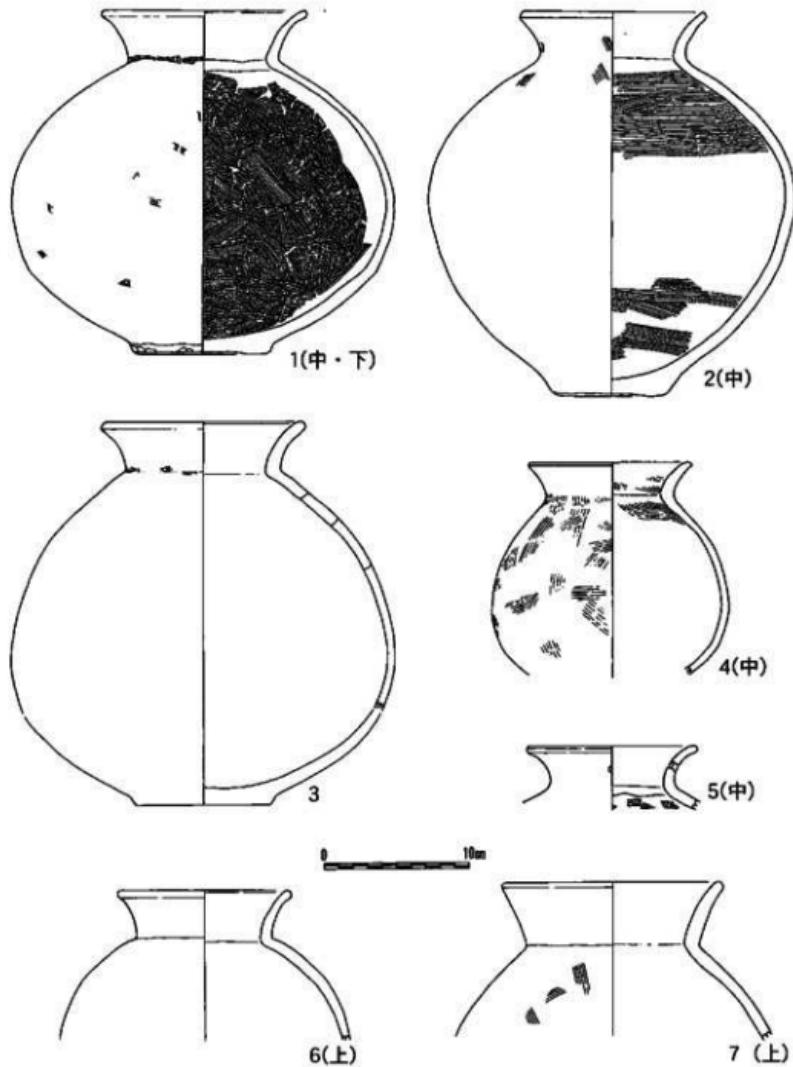


第5号溝出土遺物（4）

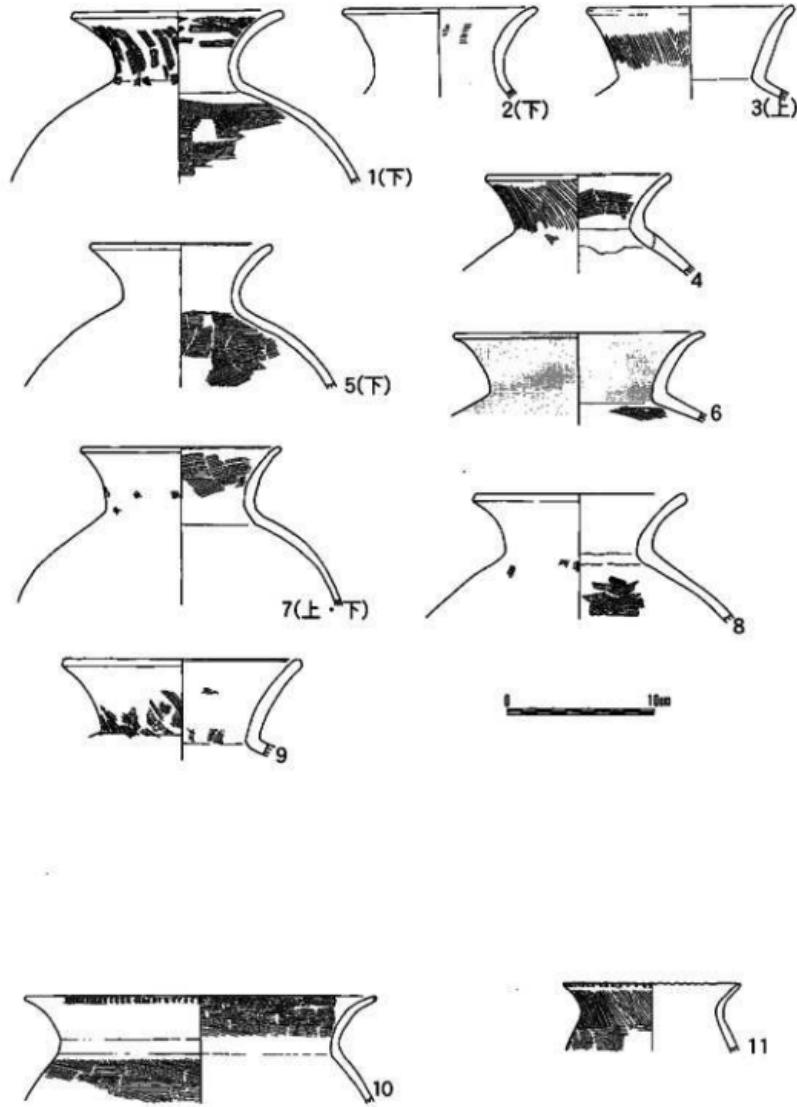


第5号溝出土遺物 (5)

図版八三 遺物実測図

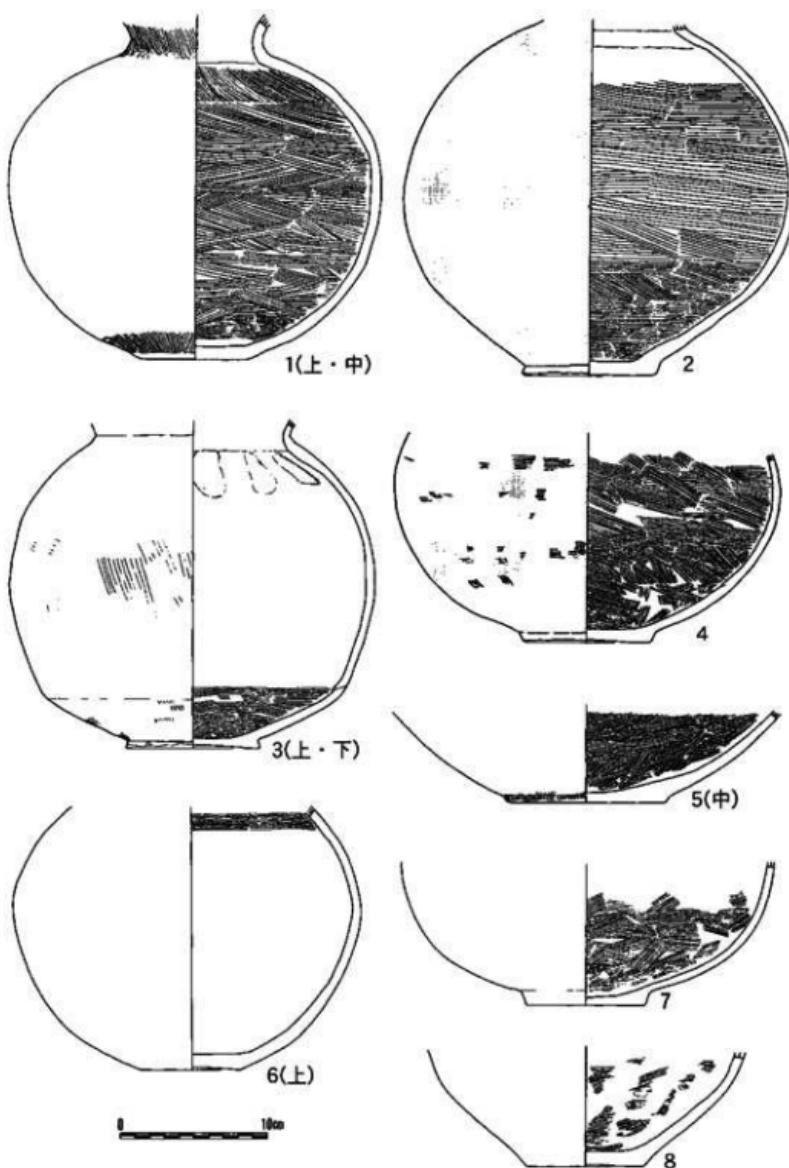


第5号溝出土遺物 (6)

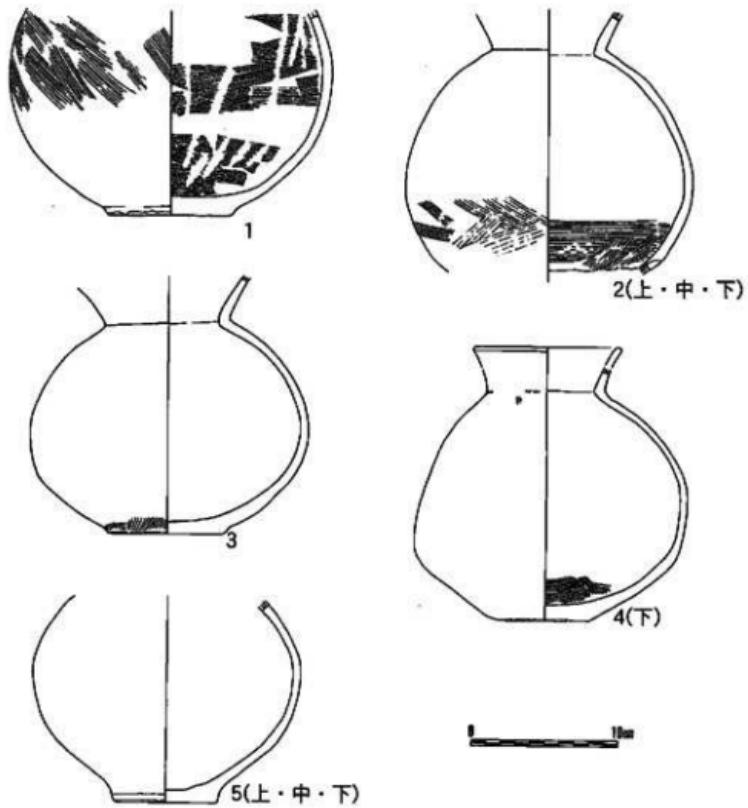


第5号溝出土遺跡 (7)

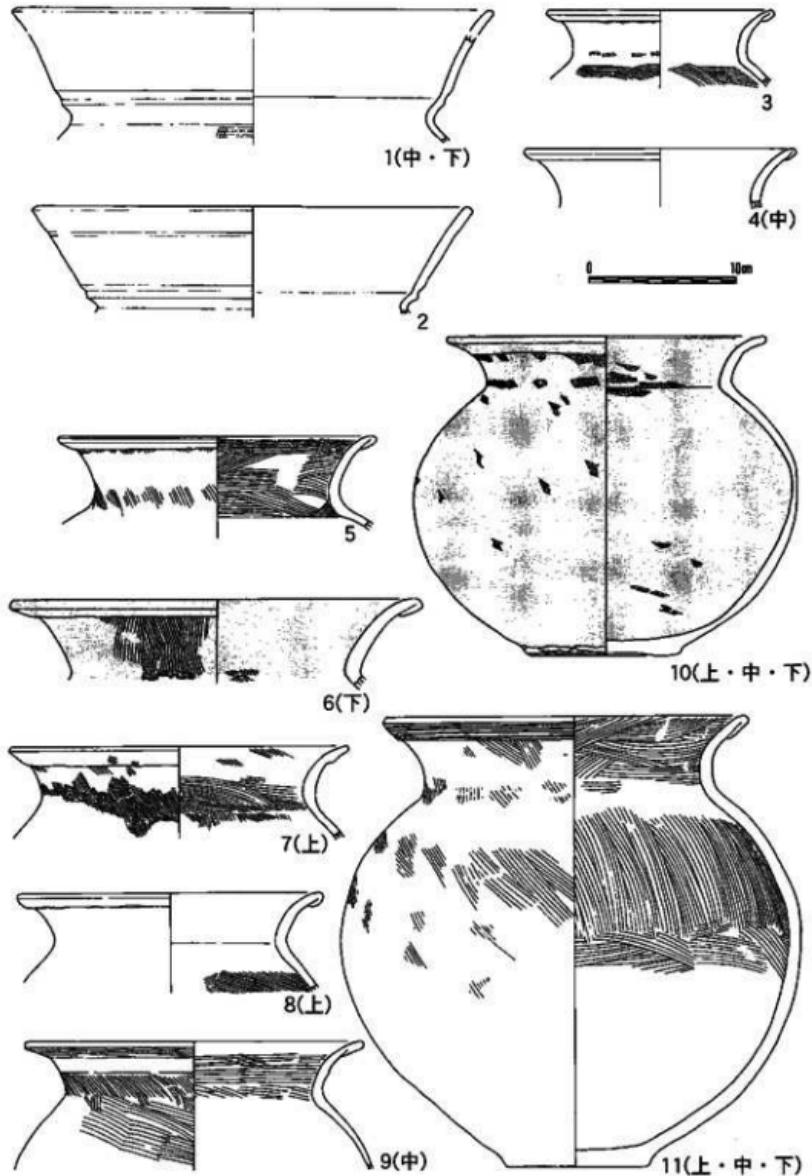
圖版八五 遺物測量圖



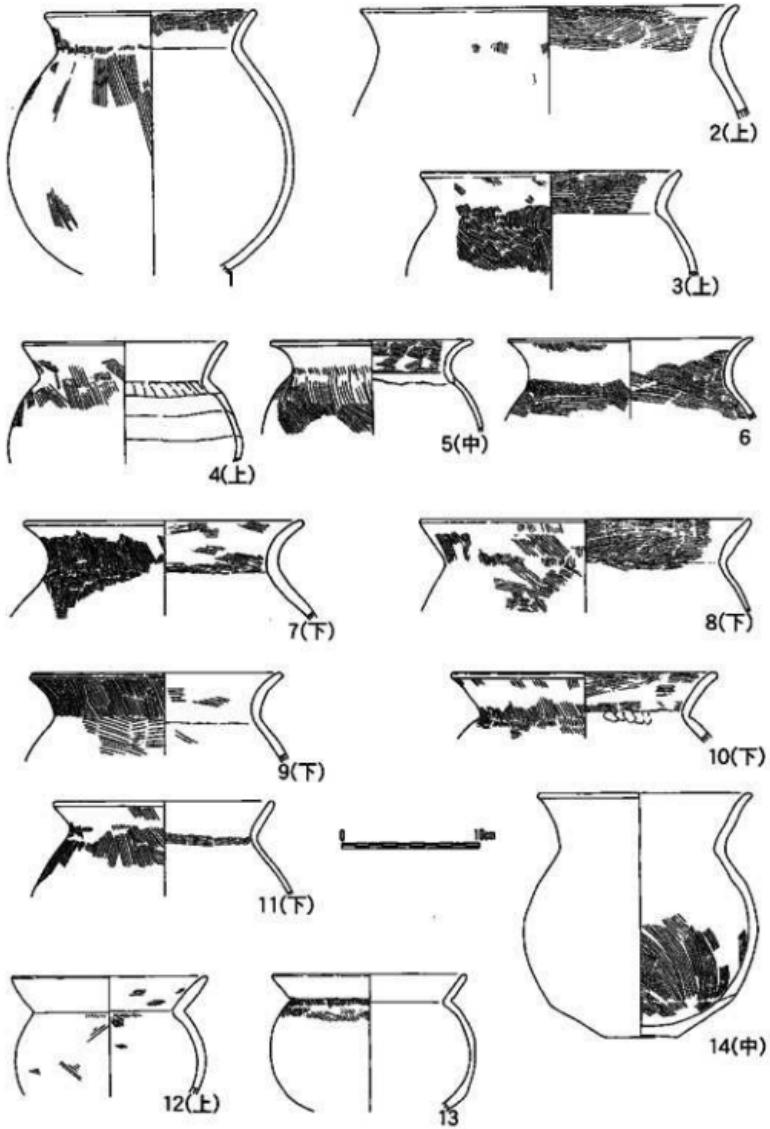
第5号溝出土遺物 (8)



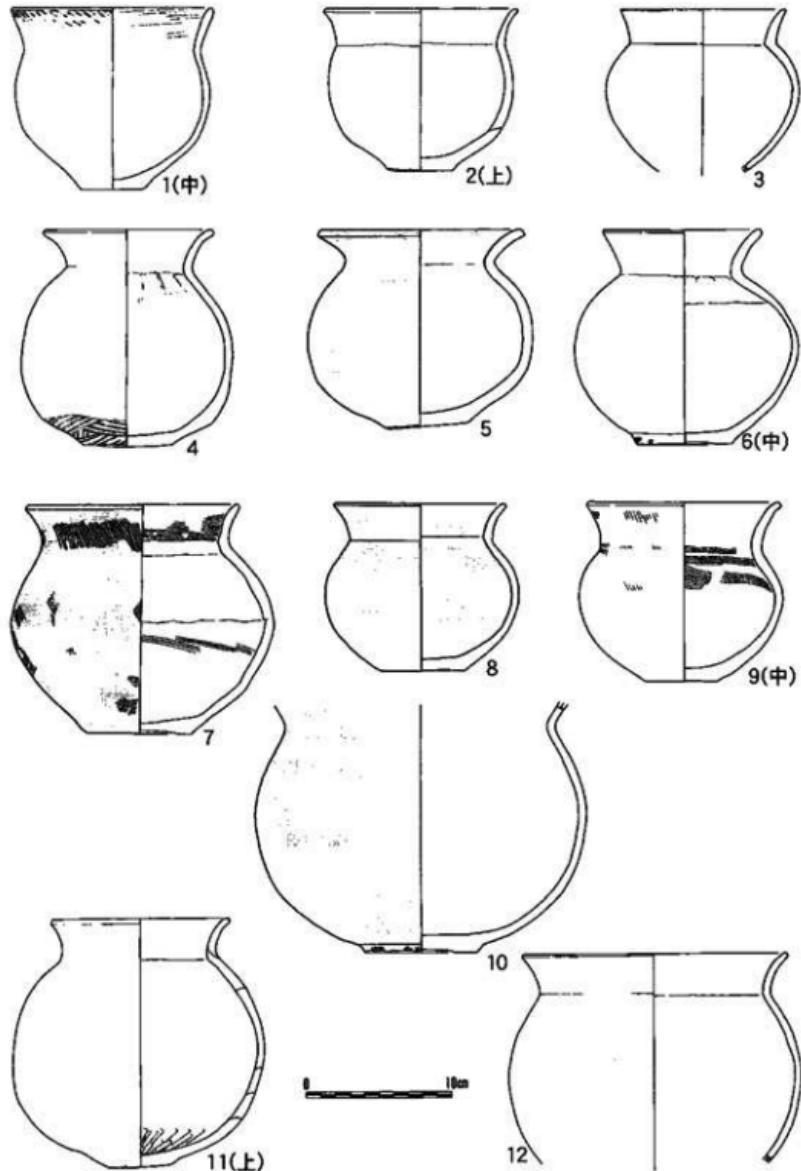
第5号溝出土遺物 (9)



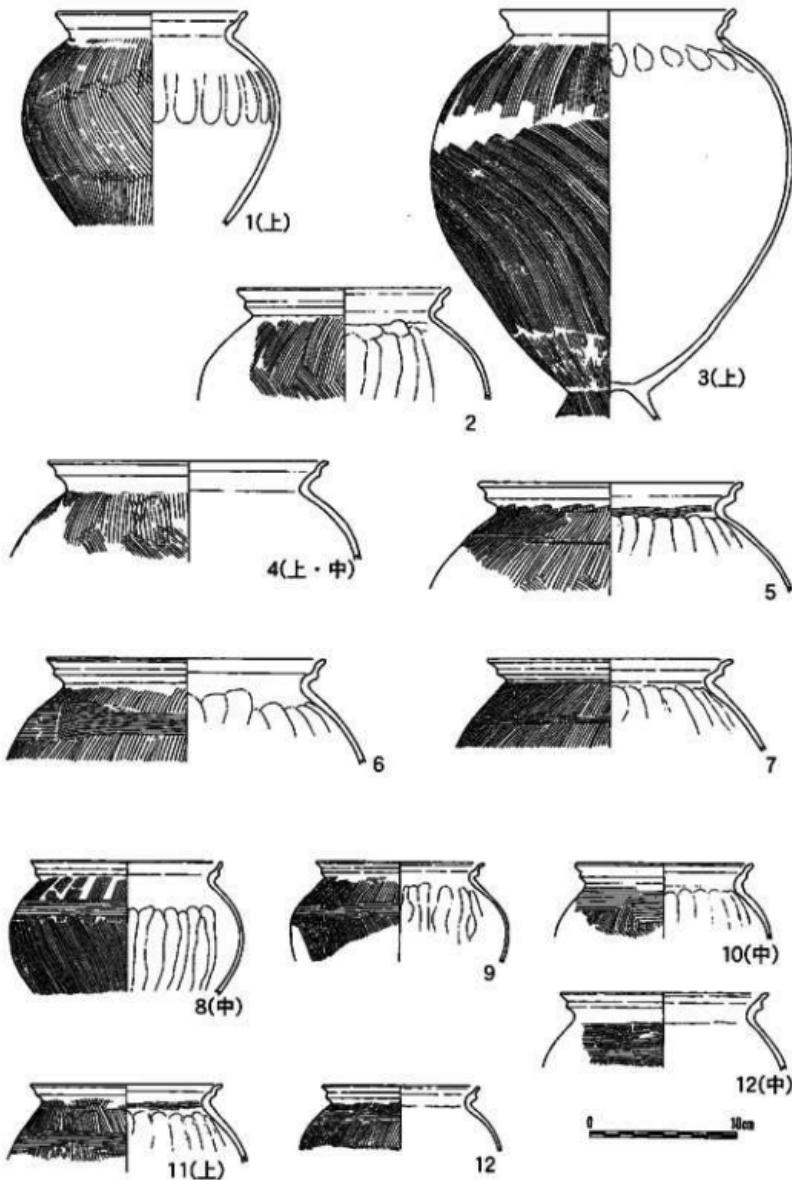
第5号溝出土遺物 (10)



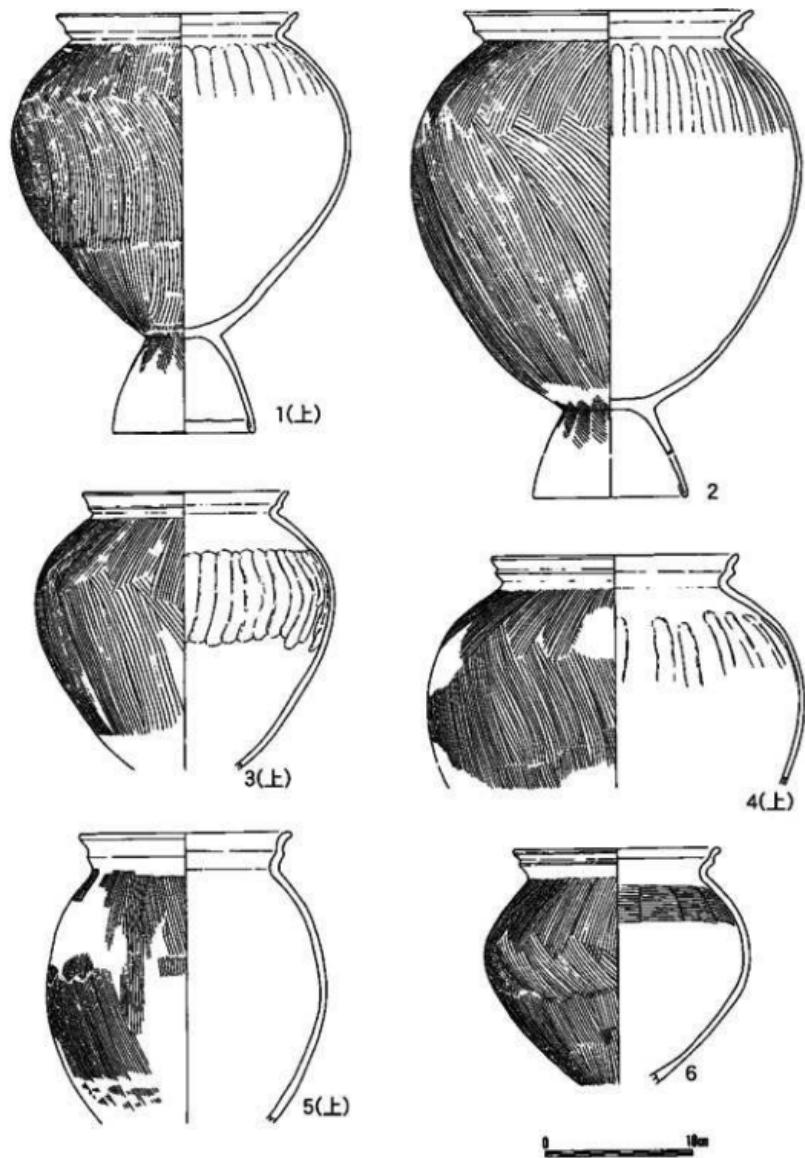
第5号溝出土遺物 (11)



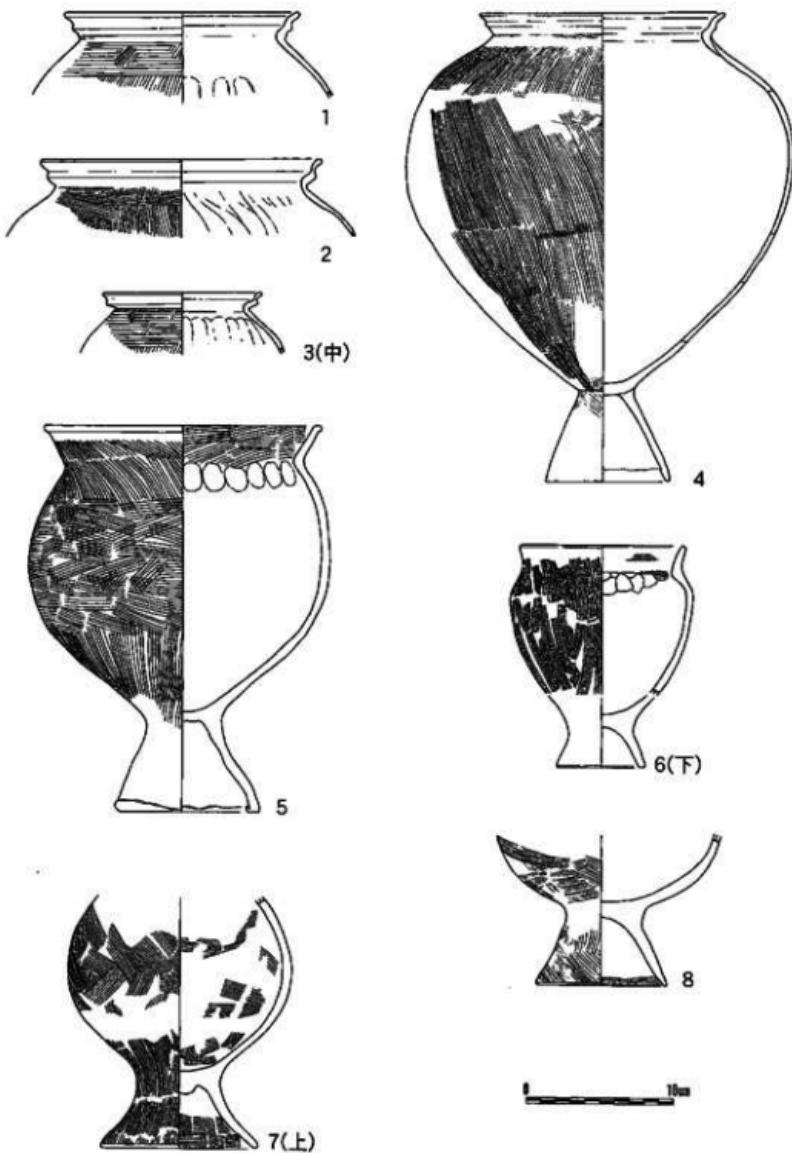
第6号溝出土遺物 (12)



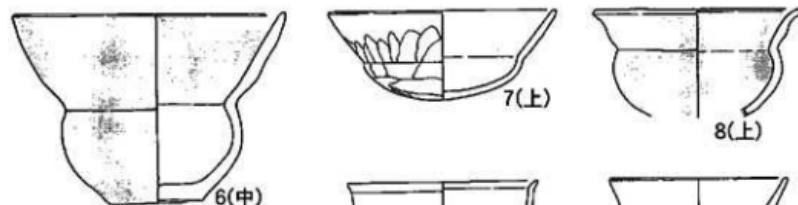
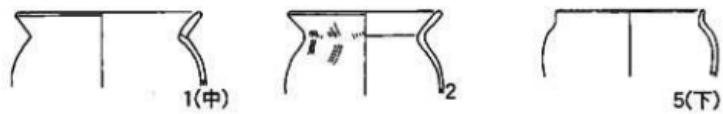
第5号溝出土遺物 (13)



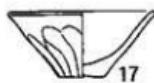
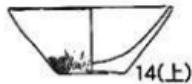
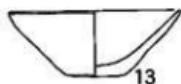
第5号溝出土遺物 (14)



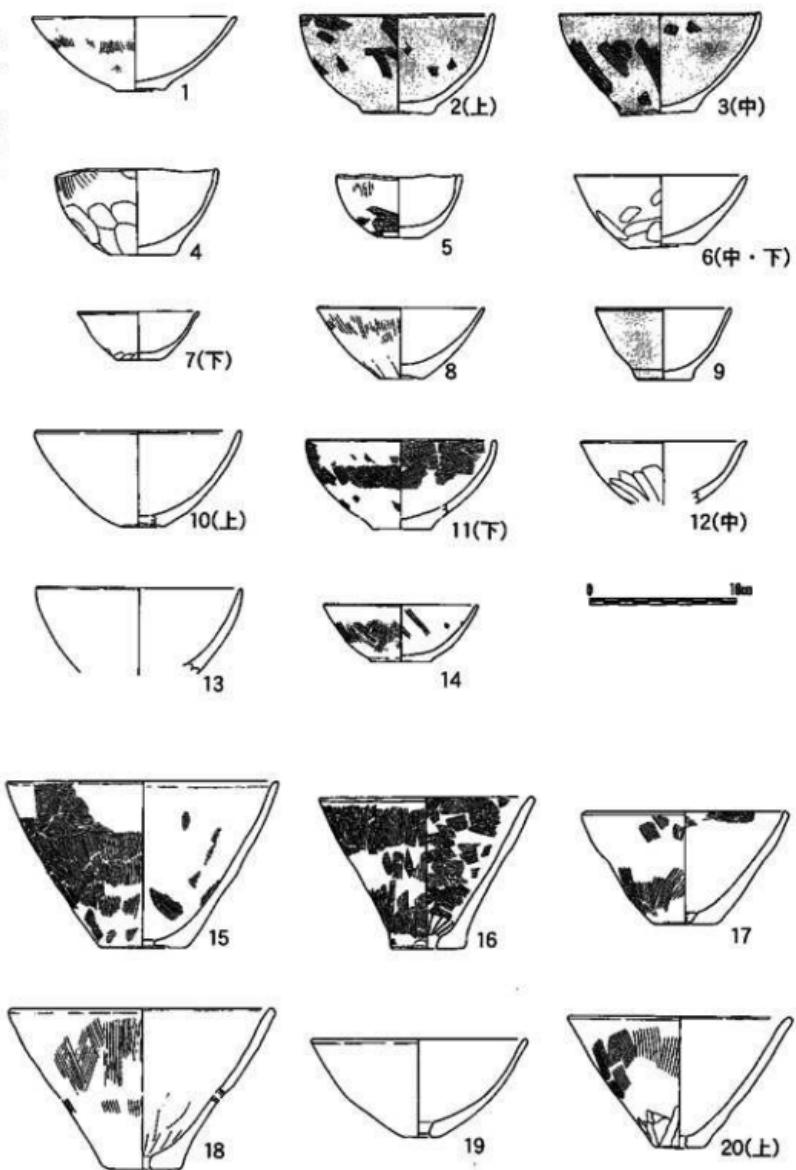
第5号溝出土遺物 (15)



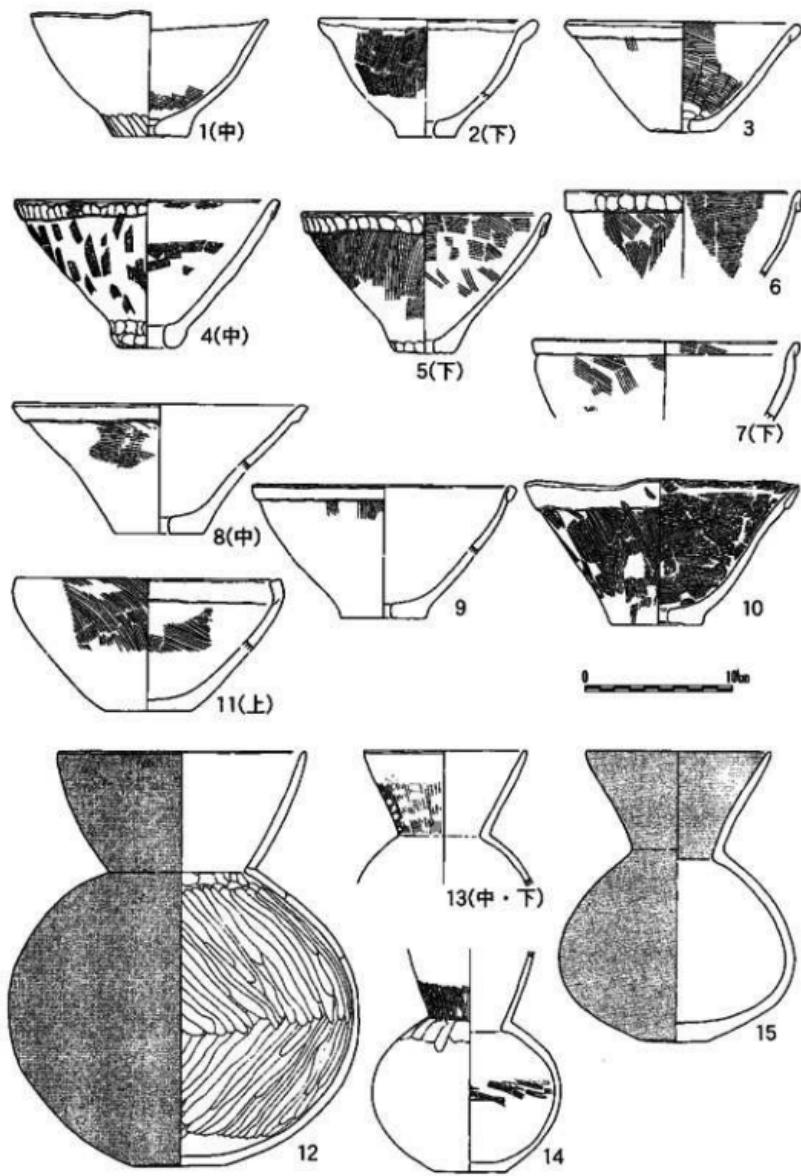
0 10cm



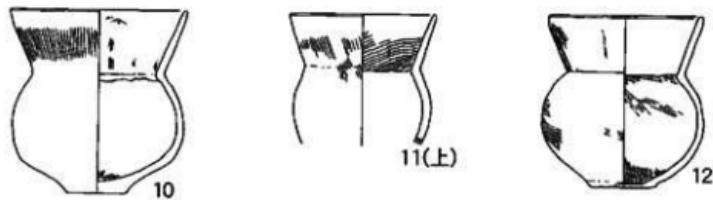
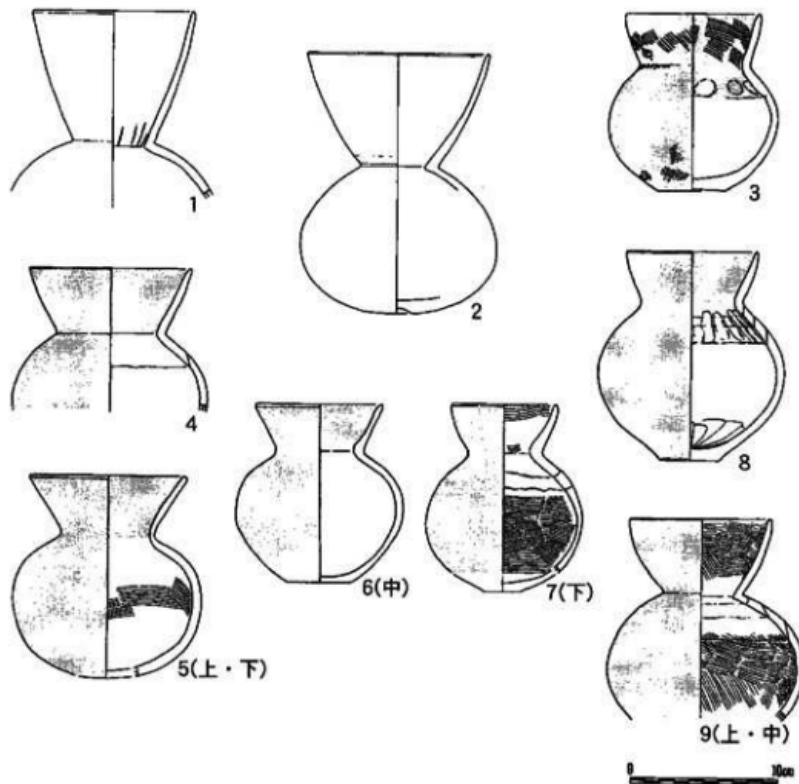
第5号溝出土遺物 (16)



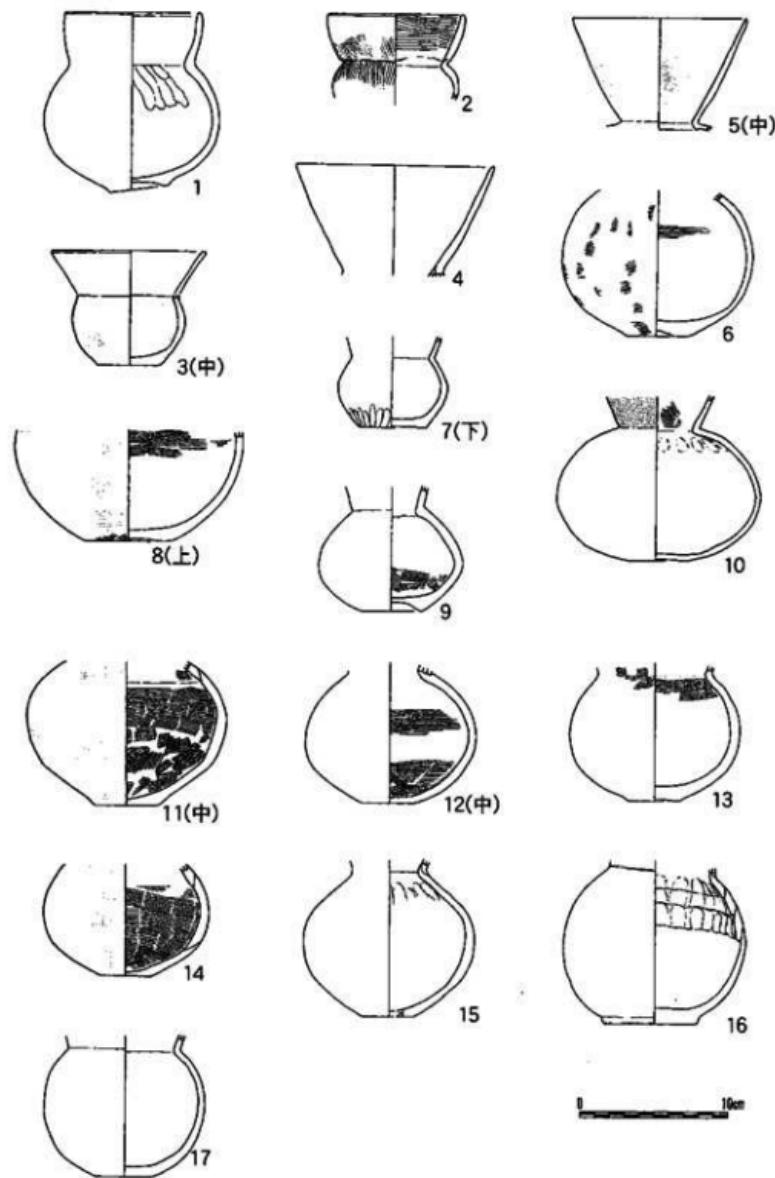
第5號出土遺物 (17)



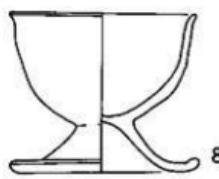
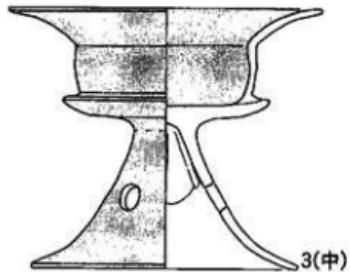
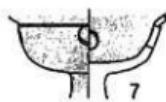
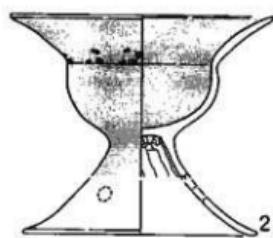
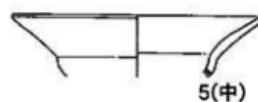
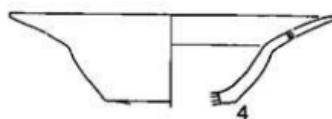
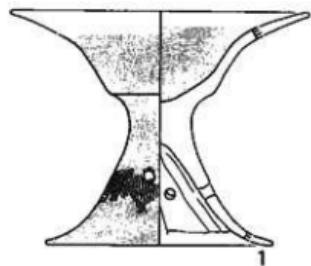
第5号清出土遗物 (18)



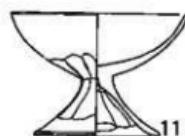
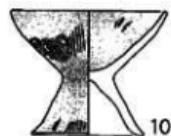
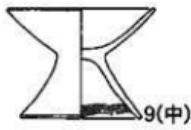
第5号溝出土遺物 (19)



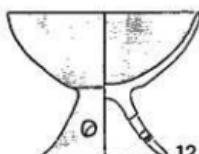
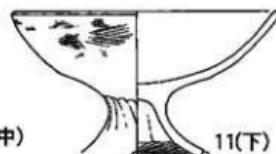
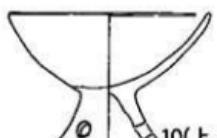
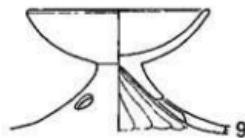
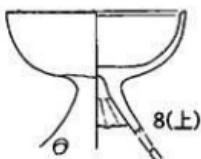
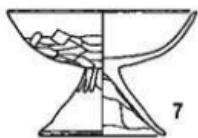
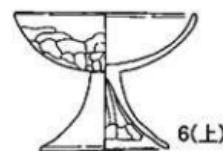
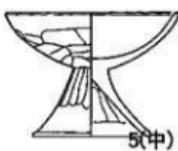
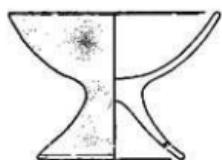
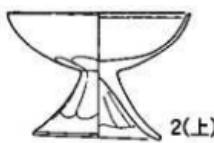
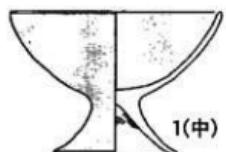
第5号溝出土遺物 (20)



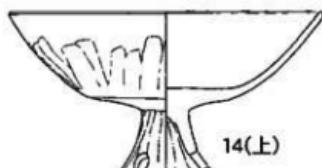
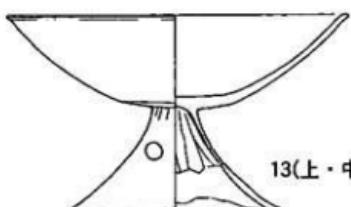
1cm

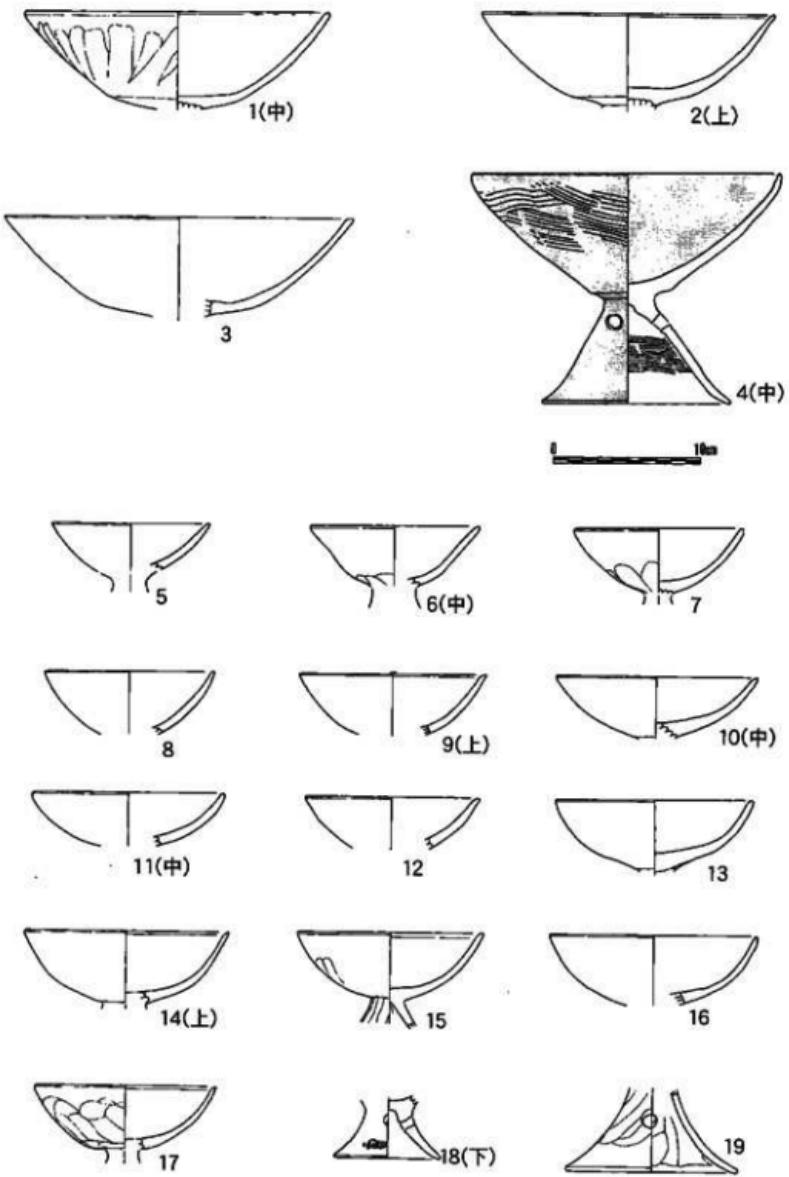


第5号溝出土遺物 (21)

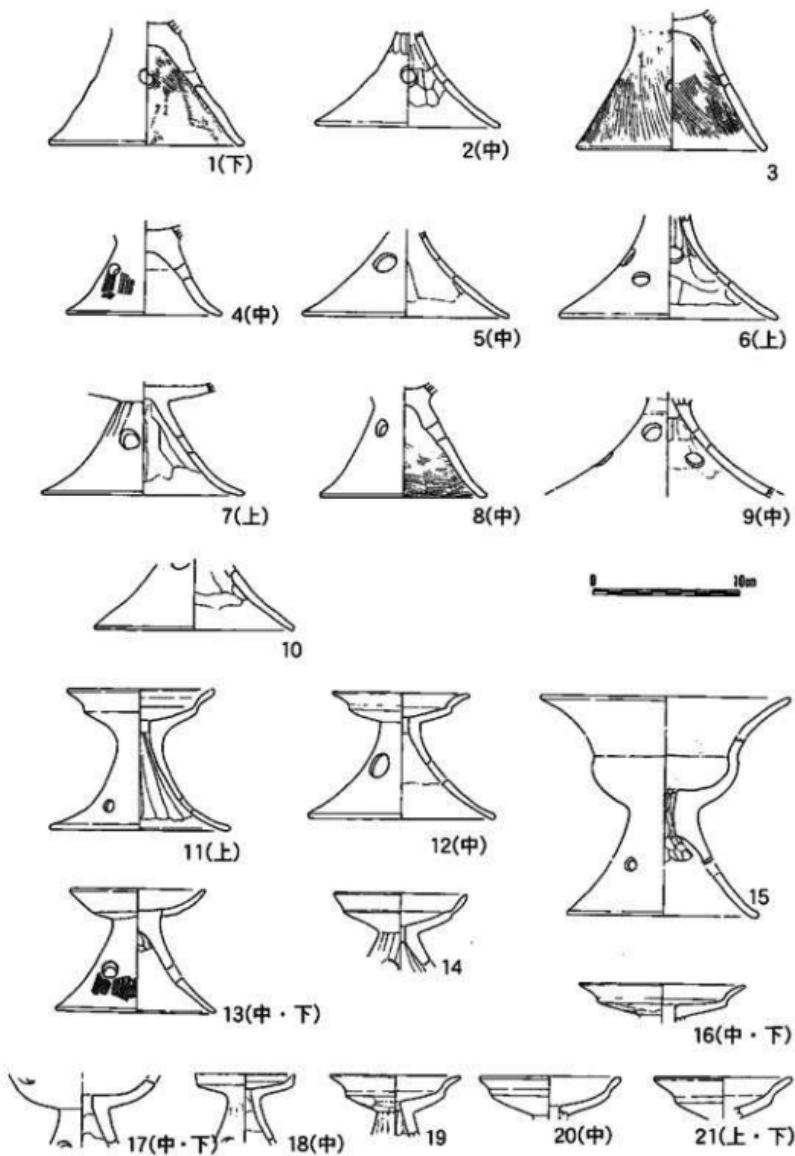


10m

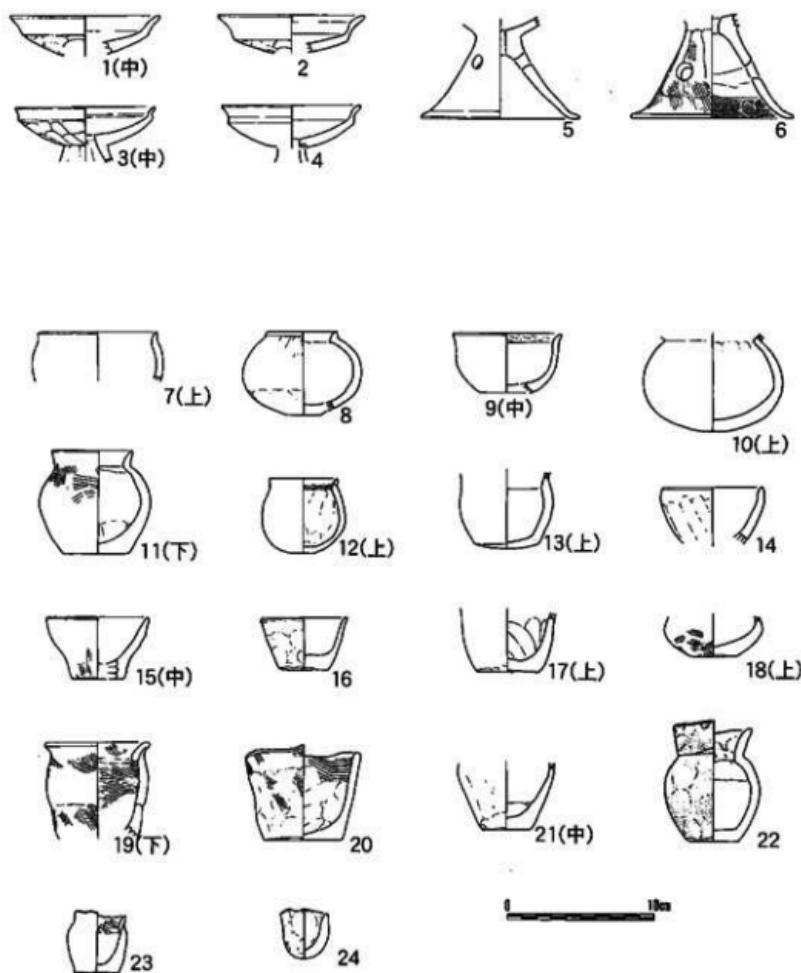




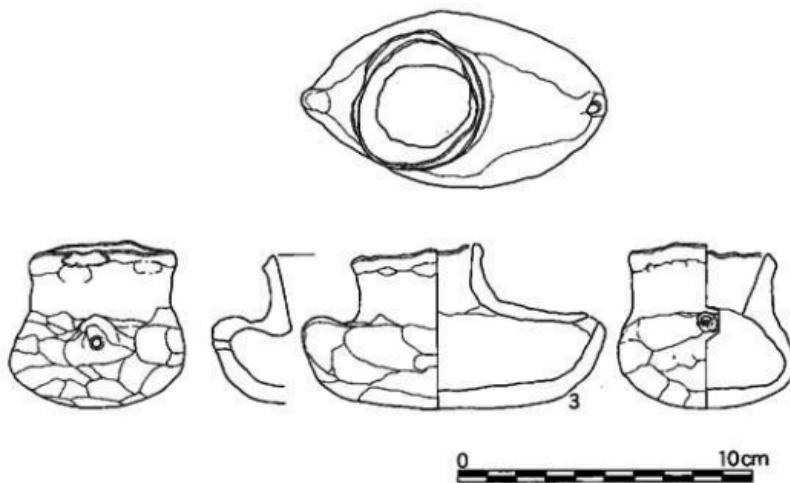
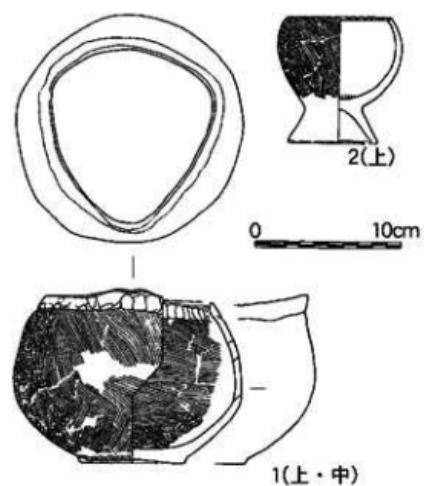
第5号溝出土遺物 (23)



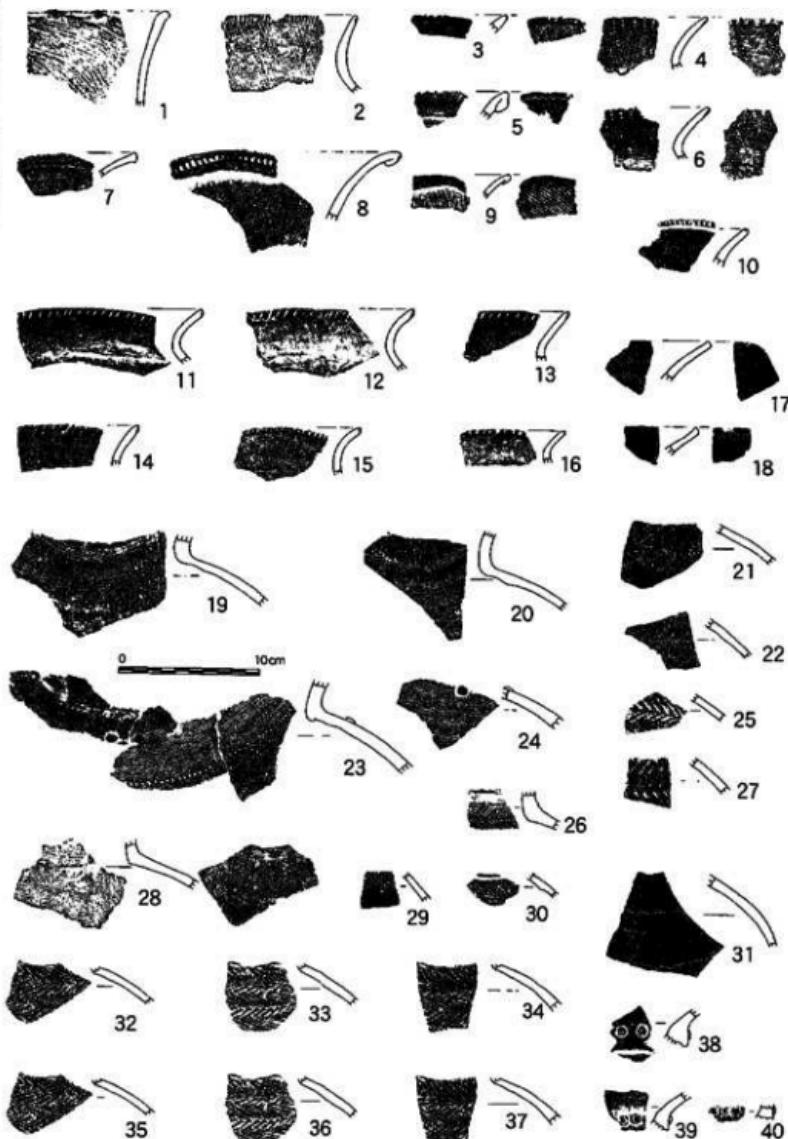
第5号溝出土遺物 (24)



第5号溝出土遺物 (25)



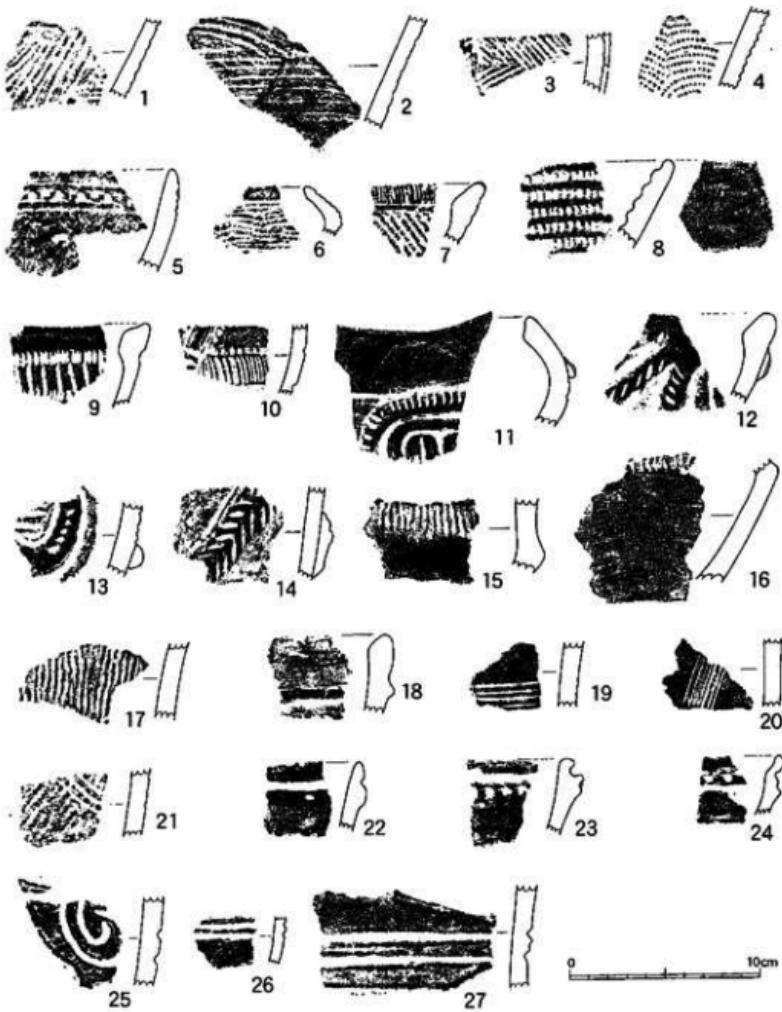
第5号溝出土遺物 (26)



第5号溝出土土器拓影



第5・6号溝、グリッド出土遺物



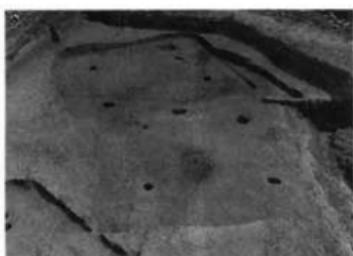
グリッド出土縄文土器拓影



遗跡遠景



第1号住居跡



3.7.13号住居跡



3.7.14号住居跡



17号住居跡



17号住居跡炉



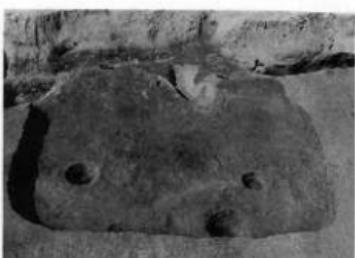
18号住居跡



22号住居跡



25号住居跡



30号住居跡



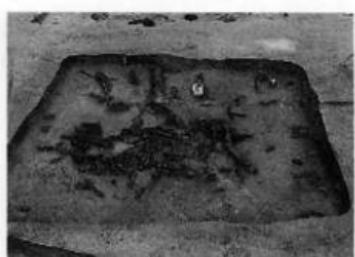
31号住居跡



34号住居跡



47,48号住居跡



52号住居跡



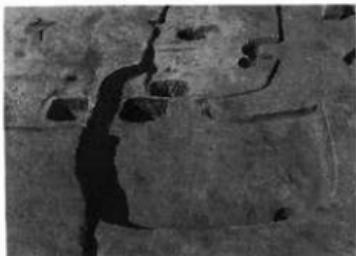
52号住居跡柱穴断面



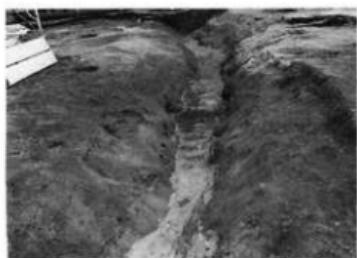
52号住居跡柱穴断面



52号住居跡 編物石



54号住居跡



3号溝



3号土層断面



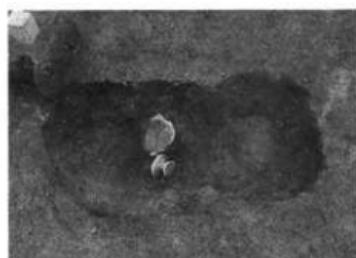
4号溝



1.3.5号溝土層断面



5号溝土層断面



5号土壤壠

報告書概要

フリガナ	ニシダイセキチョウサホウコクショ	
書名	西田遺跡調査報告書	
シリーズ	山梨県埋蔵文化センター調査報告書 第138集	
編集著者名	坂本美夫	
発行者	山梨県教育委員会	
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター	
住所・電話	〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL 0552-66-3881	
印刷所	株式会社印刷所	
印刷日・発行日	1997年3月24日・1997年3月31日	
ニシダイセキ	所在地	山梨県塩山市大字熊野字西田105番地ほか
西田遺跡	25000分の1の地図名・位置	塩山北緯35°41'13" 東経138°43'6" 標高364m
主な時代	古墳時代前期	
主な造構	古墳時代前期の住居跡54軒、溝2本。平安時代の溝4本。	
主な遺物	古墳時代前期の土器・石器	
特殊造構		
特殊遺物		
調査期間	1981年4月5日～1981年10月31日	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第138集

山梨県塩山市

西田遺跡

—第二次発掘調査報告書—

印刷 平成7年3月24日

発行 平成7年3月31日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

発行 山梨県教育委員会

印刷 株式会社印刷所

